

## 私の戦争体験

戦後七〇年ということ、一橋大同級生の新田良昭君に勧められて、同君が毎月発行している「手賀沼通信」に投稿した。

私は昭和二十年五月の東京大空襲を経験した者ですので、皆さんと少しは違った戦争体験をしたのではないかと思ひ、投稿させて頂くことにしました。

私が東京の渋谷区代々木でこの空襲に遭ったのは、小学校の二年生の頃のことです。入学が十九年ですから、もう世の中が相当混乱していたでしょう、入学当時の小学校のことは殆ど覚えていません。父が招集されて外地に行っていたので、母親と妹が二人の三人での生活でした。多分、同級生は田舎に疎開してしまっていたでしょうが、母

が「死ぬならもろ共」の考えで、私は東京に残っていました。そんなことで同級生との交流も少なかったので、入学当時の記憶が薄いのかも知れません。

ですから覚えているのは、薪になる木を拾って来て、小さな手で薪を作って七輪に火を熾し、ご飯を炊いたり、雑炊かなんかの配給を待つて炎天下に長い列を作つて並んでいたことや、連日の空襲で、サイレンが鳴ると防空壕に入つて、頭上を通るB二九を見上げていたことくらいです。

三月の第一回目の大空襲では、東京の中心部がやられたので当方には被害がなく、真っ赤に染まつた東の空を見ていたのですが、五月にはこちらに回つて来ました。最初は防空壕に隠れていましたが、焼夷弾がドンドン落ちてきて危なくなつたので、逃げ出すことになりました。防空壕に形ばかりの土を掛け、母は下の妹を背負い、私は左手にお皿か何かの風呂敷包みを持ち、右手で上の妹の手を引いて逃げ出しました。小田急線を渡る踏切のところまで振り返つて、我が家を見ると、もうスツカリ火が回つて焼け落ちるのが見えました。母が、「このことを良く覚えて置くのですよ」と言う意味のことを

言ったのが印象に残っています。後で聞いたなら、「大きくなったら、敵を討つのですよ」と言う意味で言ったとのことでした。誰言うとなく、「明治神宮に逃げよう」と言うことになったのでしょうか、その夜は明治神宮の馬小屋で夜を明かしました。考えてみると、森の中なんて言うのは、火が回ったら逃げ場のないところです。賢い選択ではなかったと思います。これも後になって、母が、「神様が守って下さったのよ」と言っていましたから、当ても拙い選択であったことは気がついていたのでしょう。この当時の母はまだ三十代も前半だった筈です。昔の母親は偉かったんだな、と思います。

六月には母方の祖母の出身地である長崎に疎開することになりました。家は勿論、防空壕も完全に焼けてしまって、残っているものは殆どありませんでしたが、防空壕から焼け焦げた衣類や瀬戸物類を掘り出し、これらのボロを抱えて汽車で長崎に向かいました。途中でも空襲に遭って乗ったり降りたりで、三日ほど掛かって長崎に辿り着いたのではないかと思います。

その後、祖父が大村に家を探して来て、直ぐに大村に移り住みました。このまま長崎

に住んでいたら原爆の洗礼を受けていたところですよ。その意味では憑いていた、ということになります。原爆が落ちた八月の九日、大村からは長崎の方向に、太陽が落ちたのかと思うほどの物凄い閃光が見え、爆風が届きました。町の方ではガラスが割れたところがあったと聞きました。祖父が慌てて防空壕に避難させてくれましたが、これは手遅れというものだったでしょう。

サラリーマンだった祖父がこれまで経験のなかった農業を始め、色々な工夫をして農作物を作ってくれて、家族の皆を養ってくれました。最初はカボチャや薩摩芋しか作れなかつたので、毎食の主食がカボチャか薩摩芋でした。肌や爪が黄色くなるほど食べたので、それ以来私はこの二つが苦手です。もう一生分食べたような気がしています。その後は小麦なんか作れるようになり、食糧事情は改善しましたが、麦踏みもやらされましたし、小麦粉を作るのに石臼を挽いて、手を血豆だらけにしたことを思い出します。祖母や母に連れられてリュックを背負って田舎の農家に、お米などを買い出しに行ったのも、今となつては懐かしい思い出です。

二年生の二学期から大村の小学校に転入したのですが、東京から田舎の大村への疎開ですから、当然のことながら虐めの対象になりました。焼け焦げた布をつなぎ合わせ、母が作ってくれた洋服を来て通学するのですが、少し工夫して洒落た服装にしてみましたので、田舎の子達にはそれが都会的で生意気に見えたのでしようし、第一言葉が違います。毎日泣かされて帰る日々でしたが、母を心配させてはならない、と家の玄関の前で嗚咽を抑えるのに苦労して、手を引いて逃げた妹に慰められたのを思い出します。

昭和二十一年に父がラバウルから復員して来て、二十三年には仕事の関係で長崎に移ることになり、小学校の五年生から高校卒業まで、私は長崎で暮らすことになりました。私は歴史が好きで、昭和史も色々と読みましたが、止むに止まれぬ、と言う事態だったとは言え、勝算も先の見通しもなく、なんと愚かな戦争を始めてしまったのか、と、つくづく思われます。負ける戦争はしてはならない、と思っています。

(平成二十八年二月)

## 息子の怪我

横浜の工場に勤めていた昭和六十年二月のある日、東京へ出掛け、英国人の客の事務所で打ち合わせ中、会社から電話があり、中学生の息子が学校で怪我をして病院に運び込まれた、との知らせがありました。何でもガラスで怪我をして手術する、と言います。

ビックリ仰天して、取り敢えず打ち合わせを中断し、その事務所から相模原の病院に電話しました。病院の方は怪我のことよりも、保険証がどうした、とか、支払いがどうとか、私にとってはどうでも良いことばかり言っただけです。学校の医務室の先生が付いてくれている、と言っているので、その先生に聞くと、手でガラスを割って指を切ったが大したことではなく、臍にも骨にも異常はないとのこと、ホッとしました。縫合手術をするので、親の承諾が要ること。病院の支払いはツケでは駄目とのことなので、その先生に立て替えて貰うことにしました。

その後、その英国の会社との打ち合わせに七時過ぎまで掛かって、仕事を一つ纏めた後、今度は別の客とのお付き合いの会合に出て、ヤキヤキしながらお勤めを済ませ、流

石に二次会は逃げ切つて帰宅したのが十一時過ぎ。二階に駆け上がつてみると、息子は左手に包帯はしているものの平気な顔をしていて、痛みも大したことはない、と言います。やはりふざけていてガラス窓を叩き割り、左手の小指の外側を切つて、それでも六針縫つたと言います。自分も痛い目に遭つたけど、悪いのはどうやら息子の方らしい。これはまず学校に心配をかけたお詫びと借金返済に行かねば、と思い、翌日の朝一番で学校に行くことにしました。

まず、医務室の先生に会つて、四万円足らずの借金を返済し、あと教頭先生に会つて、7学校のものを壊したお詫びと弁償の話。その後病院に行つて、保険証を出して差額の返金などの手続きを、午前中一杯掛かつて済ませました。

後で息子が言うこと。学校で、「立派なお父さん」と褒められた由。別に変わったことをした訳ではないのに何故かしら？ と考えてみると、こんな時にお詫びに行く親なんて最近は少ないのではないか。むしろ、「大事な子供に怪我をさせた。どうしてくれるんだ」と言うクレームを申し入れて来るのが普通なのではないか。下手をすると病院

の支払いも渋るとか、ゴタゴタするのではないか。そう言えば、朝一番に医務室に行った時、先生が逆に大変恐縮していましたから、私の感覚の方がずれていたと言っことなのかも知れませんが。でも、こんなことが褒められる対象になるような風潮は私には異常に感じられたことでした。

最近、誰かが何かに書いていましたが、教育の荒廃とか何とか言うけれど、基本は生徒が先生を敬う気持ちで薄れているところに問題があるのではないか、と言っこと。まず親が先生を敬う姿勢を示すのが大切だ、と言います。(尊敬するに値する先生であるか否か、これは学校側の問題でしょうが)学校は大事なところなんだ、と言っことを身を以て教え、何でも学校の所為にするのではなく、学校に迷惑を掛けたら謝りに行く。この古い考えの父親は、巧まずして自然とそう言っことをやっていた、と言っことになります。

傷の方は、小一ヶ月掛かって治り、指の動きにも支障はないようです。事故のあった時に私が外に出ていた所為で、人から人へと伝わり、話が段々に大きくなつた上、その



度ごとに事故を知っている人の数が増えて行って、大げさに言えば、丸の内の本社中に知れ渡ってしまつて、かなり有名な話になつてしまい、とんでもない人から、「息子さん大変でしたね」とか、「もう大丈夫なのか」なんて聞かれて、「小指をチョット・・・」なんて説明するのに恥ずかしい思いをしたことでした。面白いもので、傷の具合を心配してくれる人が、左手の怪我と聞くと、「右手でなくて良かったね」と言います。不由さが少ないだろう、と言つのですが、息子は左利き。常識的には右利きと考えるのでしようね。

壊したガラス代、二五〇〇円は自分で弁償させました。病院の支払いは、保険証を持つて行つたら三万円ほど払い戻してくれて、保険証の威力を感じました。もつともこの差額も学校の方で掛けている保険で全額戻つて来ました。他方、家族補償の保険に入っていたのを思い出して申請したら、通院の間の補償と言つことで四万円ほど入つて来ました。何だか焼け太りで悪いみたい。全快祝いをやるつ、なんて言っていますが、まだ実現していません。

(昭和六十年十一月)

## 背負い投げ

この同人誌を始めて四七年。全部で三〇〇稿を超える原稿が掲載されていますし、私もその中で五五〇稿程掲載させて頂いていますが、柔道部の同期生の同人誌でありながら、柔道そのものに関して書いたものはなかったのではないかと思います。大分昔に、私が中学の体育の先生との交流を紹介した「柔道事始」と言う一文を書いたことがありましたが、これも先生との交流の方が主役です。本誌では柴山謙治師範のことや精神論的な部分、OB会である柔友会のことなどは話題になったかと思いますが、柔道そのものに対する記述はなかったと思うのです。我々は一橋大学の柔道部員だった、とは言いつものの、柔道そのものではなくて、柔道部を通じての友人との繋がりや人間関係を大切にしたいんだな、と言うことを改めて感じます。

平成二十六年八月に、一年先輩の西村光史さんが「日本柔道界の実態とその再興試案」と言う本を出版されています。西村先輩は神永昭夫が現役だった頃の新日鉄で柔道部長を務め、講道館や全柔連などとも接触する機会があったことから、昨今の日本柔道界の

あり方に大きな疑問を呈し、講道館と全柔連の組織の改革を強く提言しておられます。我々が当時、我々なりに熱心に取り組み、青春の大きな一部だった柔道に対して何かの貢献が出来るとしたら、こんな面だったのではないかと、思います。今日は初めての試みとして、私の柔道そのもの話をして見ようと思います。

私が柔道を始めたのは、中学二年の頃です。戦後、進駐軍の規制によって学校柔道と剣道が禁止されていましたが、多分その前の年にこれが解禁になったと思います。学校には柔道場なかなかった頃ですが、図工室の片隅に畳を敷いて、先輩たちが白い柔道着を着て柔道をやっているのを見て、それが何だかとても清潔で、やってみたいな、と思ったのです。父に相談したら、「お前は足が遅いから運動をやるなら柔道ぐらいが良いかも知れないな。道具にお金も掛からないし」と言って直ぐに許してくれました。一緒に始めたのが、本誌にも何度か登場する幼友達吉原悟一君です。彼はお父さんがやっていた関係で、もう少し以前から始めていて、少し経験者でした。小柄ではあったけれどセンスの良い柔道で、技も切れました。中学校の指導教官は体育の先生で、松尾

駿一先生。確か初段と言っていました。受け身から始めて寝技を習って、三ヶ月ほど経ったところで中学校の何かの大会に出ることになり、初めての対外試合を経験したのでした。今だったら、危険だとか何とか言って、絶対に認められないところだったでしょう。考えて見ると先生もずい分乱暴なことをなされたものでした。四試合やりましたが、身体の大きな相手を走り回って引き摺り倒し、それしか出来ない「袈裟固め」、と言えば恰好が良いけど、相手の首っ玉に齧りついて押さえつけて二人に勝ちました。一人に物凄い勢いの袖釣り込みで投げ飛ばされ、一人には判定負けで、最初の大会の成績は、二勝二敗でした。

その後、試合の記憶はなく、高校に入ってから柔道部に入部しました。長崎東高の当時の柔道部は仲々強くて、立派な先輩が何人もおられて、良い部生活が送れたと思います。一年の終わり頃、初段の試験を受けに行きました。吉原は強くて次々と相手を負かしているのに、私の方がモタモタして仲々成績が上がらないので、吉原が心配して、自分が試合をしながら隣の試合場でやっている私の方ばかりを見ているものだから、

審判の先生に、「真面目にやれ」なんて叱られていました。合格が危なかったのですが、最後の試合で大内返しが決まって一本が取れて、これで合格。二人とも目出度く黒帯を頂くことが出来ました。高校では試合に出ることもなく、その内に「受験勉強だ」と称してあまり熱心に道場に通わなくなっていました。

ですから、高校を卒業して大学に進んだ頃は、身体もヒョロヒョロで、身長は一六四センチ、体重は五〇キロやっと、と言うところ。折角経験があるのだから柔道部に入ろうかな、と思つて有備館を訪れた頃は、柔道なんてやる身体ではなかったと思いません。歓迎会をやつて頂いた時、自己紹介の中で氏名・出身地・出身高校を言った後で、「得意技・背負い投げ！」なんて言つてしまつて、先日亡くなられた中島淳一先輩に冷笑されたことを思い出します。大学では同期に経験者がいなかったの、リーダー的なお役になり、諸兄にも受け身の指導などをしたこともありました。こちらは現役入学で年は一番若いし、髪も生え揃わない坊主頭で、おっかないオジさんに見えた諸兄の指導も恐々とオズオズやつていたような記憶があります。一年生の夏休みに岡谷での合宿で

鍛えられ、これは本当に辛かったけれど、ここで本気で柔道をやろうと言う気になったのだと思います。体重も六〇キロぐらいになって、合宿を終えて帰省したら家族にビックリされたものでした。

唯一の経験者と言うことで、主将なんてお役が回って来たのでしょうか、私を主将にするかどうかについては、先輩たちの間で大分論議があったと聞いたことがあります。

「非力な長島では頼りない。初心者ではあるけど、身体も大きくて可能性のある馬場兄や山本兄の方が良いのではないか」と言う声も高かったと言います。それだけに一・二年生を纏める前期主将をやり、その後主将を預かっている間は辛かった。先輩主将の駒井正明先輩、岡本光生先輩、大河内恒先輩などには随分泣き言を聞いて貰ったものでしたが、弱将を支えてくれた皆さんのお蔭で、何とかお役を務め上げることが出来ました。背負い投げが少しはモノになって来たのは何時頃のことだったのでしょうか。稽古では申し訳ないけど茂木兄と馬場兄が良い稽古台でした。丁度手頃の身長差だったのではないのでしょうか。面白い程良く投げられてくれて、大分ご迷惑をお掛けしたものでした。

右の背負い投げは右手に負担のかかる技です。特に右肘を無理に使うので、ずい分と痛めました。一時は右肘と腰と右膝を痛めて、もう柔道は出来ないかな、なんて思っていた頃もありました。

試合でも少しは掛かるようになり、成績も上がって来ましたが、試合での勝ち数と負け数を比較したら、負け数の方が多かったのではないかと思います。三年の頃が一番調子が良かったのではなかっただろうか。国公立の大会で、当時ナンバーワンだった教育大（今の筑波大）の選手とやって、これは我ながら見事な背負い投げが決まりました。故渡辺兄が大変に感心して、「あの選手は長島に投げられたので、その後の人生が変わった」なんて言っていました。教育大の選手は、体育の教師になるのが目的ですから、全日本級の選手を目指していたのだから、長島なんかには投げられたので、選手としては落第点を付けられてしまっただろう、と言つのです。東商戦で東大の大きくて力の強い選手に当たり、これも見事に投げたことがあります。練習試合では、東大や東工大の大きな人を背負いで投げました。これも国公立戦の大將戦で東工大の大きな選手と当

たり、何度背負いを掛けても掛からないので、帰り際に大内刈りを掛けたらこれが見事に決まって、一本になりました。当時東大の師範をしておられた清水先生に呼び止められて、「良い技を持っているね」と褒められたのを思い出します。大会に出て行くと、プログラムに出場選手の身長と体重が紹介されているのですが、どの大会でも私の身長と体重は一番貧弱で、自分より体重の軽い選手とやった記憶はあまりありません。私の背負いには自分より大きな人の方が良かったのでしょうか。大きな人と当たると何となくやり易く、自分より小柄な選手が出て来るとやり難いな、なんて感じていたものでした。

先日、馬場兄 が思い出させてくれた三年の時の三商大戦では、四将で出場しましたが、大阪の副将と当たり、これを背負い投げで倒して、大将と当たることになりました。揉みあいの中で肘の関節を取られ、もうダメか、と思ったところで、「頭を入れて身体ごと回れ」と言う声が聞こえたような気がして、その通りにやったら、固められていた肘が上手くスッポリ抜けて逆から逃れることが出来ました。応援に来ておられた牛島辰



熊先生の声が聞こえたのではないかと思います。馬場兄によれば、牛島先生が、「上手いっ！」と褒めてくれていた由。寝技の名人と言われた牛島先生に褒められたのは、「以て瞑すべし」と言っても良いでしょう。その後、技ありを取られたのを、取り返して引き分けに持ち込み、三人を残して勝つて、その年の三商大戦に優勝したのです。次の三将で出番を待っていた一年先輩の栗原さんが、自分がやらなくて済んだ、と言うことで、大喜びしてくれたのを思い出します。

自分が大将で出た四年の時の三商大戦では大阪には勝ったものの、対神戸戦では大将戦になって、大将の私が判定で負けて二位ということになり、神戸の道場で皆で肩を抱き合つて大泣きして、先輩に、「子供でもあるまいし」と叱られたのが強烈な思い出になっています。

三段を頂いたのは、大学二年の頃だったでしょうか。講道館に行つて昇段試験を受けて、これは余裕を持って合格した記憶があります。参段の時は、確か四年になってからか卒業の間際に、立川かどこかの道場に行つて、柴山先生の立会で試験をして頂いて、

これはどうやらお情けで頂戴したのです。ですから私にとって、大きな顔をして言えるのは、講道館式段まで、と言うことになりそうです。参段まで取っていると、後はお金を払えば昇段出来るようなシステムがあつたようですが、その後の昇段には興味がなく、現在も参段のままです。当時、参段を持っていると、接骨医を開くことが出来ると聞いたことがあります。現在ではどうなんでしょう？

学生時代の試合は、負けてはいけない、勝たねばならぬ、と言う責任ばかりが重くて、苦しい思い出ばかりが残っていますが、卒業してからの試合は楽しいものでした。自分の力を試す良い機会だ、と考えながら伸び伸びと試合が出来たからでしょう。三菱重工本社に柔道部を作り、何人かの若い人とチームを作って三菱武道大会に出たりしました。個人では三菱・三井武道大会に出場しました。三菱武道大会では、個人戦の三段の部で当時優勝候補だつた三菱重工の名古屋工場のコーチの人と当たり、相手も舐めて掛かつていたのでしよう、組んで直ぐに掛けた背負い投げが上手く決まって見事な一本勝ちになりました。三井との対抗戦では、元気の良い若い人と当たり、上手く担ぎ上げたら、

眼の前に場外の線が見えたので、そのまま斜めの場内の方向に向かって投げて一本を取りました。講道館の柔道新聞に講評が掲載され、「冷静なベテラン長島」なんて評になっていました。二十四・五歳の頃のことですから、ベテランなんて言われて変な気になったものでした。

三菱の武道部に道場があつて、毎年寒稽古をやっていたので、これには大分長い間参加していました。朝早く寒稽古に参加してお粥の朝食を戴き、そのまま出社するなんて、元気な頃でした。先の家内の病気の頃まではやっていたような記憶がありますが、その後はご無沙汰になりました。柔道と言つ競技は身体と身体が直接接触する格闘技ですから、一度中断すると再開するのが怖くなります。その後はスツカリご無沙汰することになりましたが、四十を過ぎてから一度だけ、試合をやったことがあります。柔友会の副幹事長をやっていた頃だと思えますが、一橋祭にお義理で出掛けたことがあります。柔道部で現役・OB對抗戦をやると言つので、応援の積りで行って見たら、一年先輩の方がおられて、三人が出場する、と言われます。お前も出る、と強要されて逃げる訳に

行かなくなり、OB側の選手として出場することになりました。準備運動は何とかやつたものの、久し振りの受け身が怖かった。自分の番になって、試合場が上がって行つたら現役側から出て来たのが、二年生と言つ一〇〇キロ近い大きな奴でした。こんなのに壊されてはたまらないな、と思いつながら組んだ瞬間に大内刈りを掛けたら、これが見事に決まって一本になりました。次に出て来たのが私と同じぐらいの小柄な奴で、これは見せ場もなく引き分けになりました。大きな方は当時のホープだったようなので、私に負けたことで気を落として辞められたりしてはいけない、と思い、コンパの席で「あれは、弾みだったんだから」と言つて盛んに慰めていたのを思い出します。

それ以来、柔道着には袖を通していません。学生時代の四年間は、ずい分柔道部生活を大切にし、殆どの時間を柔道の為に費やしていたような気がします。私の柔道そのものに対する思い出と言つたら、この程度のものなのでしょう。お勉強の方が疎かになったので、卒業してから、「経済学部を卒業した」と言つのが恥ずかしくて、暫くの間は、「柔道部を卒業した」と自己紹介することにしていました。

母校のキャプテンをやっていた十五年程後輩が近くにいます。この人は自ら、「歴代のキャプテンの中で、自分が一番弱いキャプテンだった」と言うのが口癖ですが、その後も柔道を続け、今でもやっているようです。講道館の高段者の大会にも出場する程で、六段を貰ったと言っています。格闘技は一度離れると競技するのが怖くなって再開するのが仲々難しくなるものですが、少しずつでも継続していれば、年を取っても出来るのでしょう。本当に柔道そのものが好きだったら、ここまでやるのが本物なんだろうと思っ  
ています。

(平成二十六年十一月) 21

### 野瀬清喜師範のご退任に当たって

我々の当時の一橋大学柔道部の師範は柴山謙治先生でしたが、平成三年に師範が野瀬清喜先生に交代しました。その野瀬師範が、今年で引退されるとの連絡を受け、当時師範交代に一役買った身として、何か歴史を残さねば

ならないかな、と思い、次の一文を柔道部の機関誌「一道」の野瀬師範退任特集号に投稿することになりました。三十四年卒の大河内恒先輩にもご相談しながら作ったのですが、関連して思い出したことがありますので、後に記に少し書いてみました。

野瀬師範が今年で退任されると伺い、また「一道」の平成二十八年七月号が退任記念特集号になると伺って、野瀬師範を担ぎ出した張本人の一人として何か書き残すべきではないか、と思い一筆認めることにしました。

師範引つ張り出しに一役買ったのは、私が柔友会の副幹事長をやっていた昭和六十二年のことです。当時の副幹事長は、戦後の先輩を纏めるのがお役目でした。幹事長にはもう少し年配の方がおられて、こちらが戦前の先輩の担当と言つことになっていました。当時の幹事長は二十一年卒の浅見和年先輩でしたが、戦前の先輩方から、当時の柴山謙治師範には退任して頂いて、他の師範を選びたい、という声が上がって来ていました。

私の前任の副幹事長は、昭和三十四年卒の大河内恒先輩で、学生時代は名主将、柔友会では名副幹事長でした。副幹事長を交替してくれ、との話があった時に、「師範交代の問題は柴山先生の信任も厚く、戦前の先輩方にも人望が厚い大河内先輩でなければ解決出来ないことだ」と思つて、「副幹事長の交代は本件を片付けてから」と言う条件でお引き受けしたのですが、どうしても前任者の任期の間には片が付かなくて、解決が私のところに回つて来てしまったのです。前任の大河内先輩が、六十年に脳梗塞を発症されてご療養中の柴山先生に、後任についてのご意向を伺つたところ、「竹内善徳氏に推薦して貰つて、自分が決める」とのことでした。竹内先生は東京教育大（現在の筑波大）のOBで昭和三十七年に全日本選手権を制覇された名選手、その後、国際柔道連盟の副会長を務められた方です。当時から柴山先生に私淑され、住まいも近くに定めて親しくしておられたようです。その竹内先生から、「技量、人格ともに申し分ない」との推薦があり、柴山先生にも、「一橋柔道部を託すに足る人」と認められたのが、ロス・オリンピックの銅メダリストで当時オリンピック強化委員の一人であつた野瀬先生でし

た。副幹事長就任の直後、当時の関係者の先輩方とご相談の上、六十二年の年末ギリギリになって、私の補佐役をやってくれていた四十二年卒の森重彦君と一緒に柴山先生のお宅に伺って最終的なご相談をしたところ、先生から、「自分は現在六十七歳だが七十歳になるまではやらせて欲しい」との強いご意向を伺い、板挟みになって困ってしまつたのでした。翌年の正月明けに、当時の会長だった十七年卒の高木正延先輩のところに向つて、それこそ必死の思いで事情をお話したところ、「君が一生懸命にやった結果がそう言うことなら、その線で行こう」と言つて下さり、本当に助けられた思いがしたことを思い出します。野瀬先生にお目にかかったのはこの後で、大河内先輩とご一緒に、どこかの簡単なレストランでお昼を一緒にしながらお話をしてご了解を頂いたのでした。ですから最初の数年は、野瀬先生は師範代としていらして頂き、その謝礼は柔友会から支出していたのではないかと記憶します。

その後、戦前の先輩方から、戦前に一世を風靡され、「炎の柔道」という本を出されて有名だった平野時男先生を担ぎ出す話も出て来て、ひと頃は柴山師範、野瀬師範代、



平野先生のお三方にご指導頂いていた時期があつたと思います。

その年の三商大戦は神戸で開催されました。試合が終わって暗くなった坂道を下って帰るとき、少しご不自由な身体になっておられた柴山先生に肩を貸しながら歩いていました。先生から、「長島ア、ここから神戸の夜景を見るのもこれが最後なんだなア」と言われて、悲しいような、申し訳ないような何とも言えない感覚に襲われたことが忘れられません。

野瀬先生にはその後三十年の長きに亘りご指導を頂き、一橋柔道部の伝統をお守り頂戴したことに對し、厚くお礼を申し上げます。引き続き名誉師範としてご指導頂ける由、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

(昭和三十五年卒 長島 達明)

(一橋大学柔道部機関誌「一道」平成二十八年七月号に掲載)

・ 竹内善徳氏に關して、

竹内善徳氏は我々と同年代の三十五年卒業の筈ですが、一年上の長谷川博之、一年下の猪熊功（一九六四年の東京オリンピックでの重量級の金メダリスト）と共に東京教育大の黄金期を支えた人でした。私は国公立の大会で、竹内選手と試合をしたことがあります。五人が一チームの試合でした。私は三将で出て行ったのですが、相手の三将の竹内選手に組んだ瞬間に内股で見事に投げられました。文字通りの秒殺でした。他の四人も同じような目に遭ったのですが、大将で出た大河内さんだけが、長谷川選手に相当抵抗し、それでも分殺で負けたいと思います。ほろ苦い思い出、

この大会の少し前に、杉山兄の企画で奥日光に山登りをしたことがありました。道を間違えて、何処だか分からないところを歩き、「ここは奥日光ではない、横日光だ」と言いながら、それでも無事に下山したのですが、下山の途中で若い姉妹と一緒にいました。妹さんの方が山に参ってしまったって、歩けなくなっていたので、交代で背負って下山したのでした。故渡辺兄がお姉さんの方と少し親しくな

つて、柔道の試合を見せて上げよう、と言う話になり、止せば良いのに、この大会に連れて来たのです。講道館だったか、武道館だったか記憶にありませんが、初めて柔道の試合を見せるには適当な舞台だったでしょう。同学年で出場したのは私だけでしたが、文字通りの秒殺に遭い、試合の後で合流して大変に恥ずかしい思いをしたほろ苦い思い出があります。

(平成二十八年二月)

### 喜寿を祝つ会

私は昭和十二年の生まれですが、昨平成二十六年の誕生日で満七十七歳になりました。喜寿に達したと言うことです。私は小学校と高等学校の同窓会の世話役みたいなことをやっています。中学についても、平成十五年に卒業五十周年の集いの幹事役をやったことがありますが、中学の会は何だか中途半端なのです。小学校の同級生は殆どが同じ中学に進むし、別の小学校から来た友達は、これまた殆どが同じ高校に進むので、中学のみの友達と言うのは、極く少ないものになります。と言う理由で、中学の同窓会はそれ

きりになっています。

同級生は殆どが十二年生まれですから、当たり前の話ですけど、皆が喜寿に達したと言つことになりませう。喜寿の祝いと言つのは数え年でやるのが普通なんだそうで、それなら一昨年が喜寿ということになるのですが、昨年はこの二つの同窓会の、一年遅れの喜寿のお祝いの会のお世話役をやらされることになりましたので、顛末をご報告しましよつ。

### 一・勝山小学校第三回生

小学校の方は、むしろ積極的に計画しました。七年前の古稀の時に「伊勢神宮で古稀を祝う会」を計画して全国の同期生に呼びかけ、三〇人ほどで伊勢参りをしてから熊野巡りをしたのでした。伊勢神宮では昇殿してお神樂を舞って頂き、お祓いをして貰つて、団体として頂いたお札を代表格の同窓生に預かつて貰うことにしました。私はマンション住まいなので、神棚が作れないのです。預かった奴が、「お礼参りが済んでいないのでお札を処分することが出来ず困っている。何か考えてくれ」と言つて来ました。同じ

伊勢神宮に二度も行くのは億劫だし、能がないな、と考えている内に、十月の出雲大社なら良いのではないか、と思いつきました。十月には日本中の神様が出雲に集まると言われます。ですから、十月は「神無月」ですが、出雲では十月のことを「神在月」と呼んでいるのです。「神在月」には伊勢神宮の神様である天照大御神も出雲に来ておられるに違いありません。ここでお礼参りしてお礼を返せば良いのではないか。皆に提案したら、「それが良い、それが良い」と言いつことになって、昨年初め頃からポチポチと準備を始めたのでした。

伊勢参りの時に世話になったＪＴＢの担当者を探し出して世話をして貰うことにし、計画を作りました。全国から広島に集合すれば、ここからバスで行けることが分かり、集合場所は新幹線広島駅、と言いつことにしました。前回同様の三〇人ぐらいを想定して試算したのですが、やはり老人化が大分進んでいて、夫々の事情で参加者が二〇人程度になり、会費が最初の目論見より大分高いものになりました。

長崎の十月は忙しいのです。十月七・八・九日の長崎くんちの時期は外さねばなりま

せん。また去年は「がんばらんば国体」と銘打った国体が開催されたので、この時期も避けねばなりません。結局十月二日から四日までの二泊三日の予定を作ったのですが、その後高円宮家のご婚儀が十月五日に出雲大社で執り行われることが決まりました。どうなることかと思いましたが、こちらの方が先約だ、と言うことにして決行することにしました。

出雲大社の分院と言うのが長崎にあつて、その分院長なる人と知り合いだと言う仲間がいて、「頼んだら何か特別なことをやってくれるかも知れない」と言います。紹介を受けてお伺いしてお願いしたら、お初穂料次第ではありませんが、特別の祝詞を上げてくれ、一人ひとりにお札が頂ける、と言うところまで持つて行つたのですが、同窓生の中にクリスチャンがいて、個人でお札を貰うのに抵抗がある、なんてことが判明したのと、お初穂料が大分高いものになるので、これは諦めることにしました。それでも紹介状を書いて貰つて持つて行つたら、相当な特別待遇をしてくれました。神楽殿に昇殿して大勢の他のグループと一緒にお被いを受けたのですが、他のグループがグループ名と

代表者の名前のみを読み上げていたのに対して、我々のグループは個々人の名前まで読み上げてくれ、お守りを頂いて皆さんも満足していました。

首都圏、長野、愛知、大阪それと長崎からの爺さん、婆さん連中がお昼前に広島に集合し、駅前に用意したバスで中国山脈を越えて世界遺産の石見銀山を訪れましたが、生憎の雨で十分な見物は出来ませんでした。あの地方は天候が本当に不順なのだそうです。第一日は玉造温泉泊。二日目の十月三日の午前中に主目的の出雲大社の神楽殿での昇殿参拝を済ませました。高円宮家のご婚儀は翌々日の十月五日、滞りなく営まれたそうです。午後は松江市内を見物して、松江城や小泉八雲の記念館を訪れ、二日目の宿は皆生温泉にしました。三日目は境港まで足を延ばして、八〇メートルの水木しげるロードを歩いてゲゲゲの鬼太郎のお化けのオブジェを鑑賞しました。水木しげるにはあまり興味はなかったのですが、一人の漫画家が出身地の街の活性化に貢献するだけの力を持つている、と言う点に感銘を受けました。安来節演芸館で本場の安来節とドジョウ掬いを観賞。お客参加のパフォーマンスに引っ張り出され、大舞台上でドジョウ掬いを踊ら

されて、「ちょこつと名人 修了証」なるものを貰って来ました。観客の中に「戦場のカメラマン」として有名になっている渡辺陽一さんを発見したので、「一緒に踊ろつよ」と誘ったのですが、遠慮して出て来られませんでした。最後の足立美術館が圧巻でした。横山大観のコレクションも見事でしたが、日本庭園が凄かった。一見の価値が大いにありました。庭園の借景になっている遠景のお山の名前が「勝山」で我々の小学校の名前と同一だったのも偶然で面白かった。

全員が喜寿の爺さん、婆さんの集団も事故も怪我も病気もなく、無事にお世話役の務めを果たしました。

## 二・長崎東高第八回生

こちらの方は、どちらかと言えば本意な形でやらされることになりました。長崎はこの会の会長と称する人がいるのですが、この人が二年ぐらい前から、喜寿のお祝いを長崎でやる、と言って張り切って、色んな会合で宣言していました。昨年の初めから



実行委員会を立ち上げて、何度も会合をやっていましたが、私は不便な遠隔地にいるので、気軽に集まりに参加することも出来ず、事務方として名簿の作成とか案内状の発信を担当することにしていました。ところが、何度会合を持っても、話が具体的にならず、これで大丈夫なのかな、と心配していたのです。どうやら組織を纏めて行事をやる、なんて経験を持っていない人だったようです。実行委員の皆さんも心配をし始め、七月になって突然、「長島さん、やってくれ」と言っ話になり、半分陰謀に引掛かったような形で、お役目交替でリーダー役を押し付けられる形になってしまいました。最初からやっていれば、準備万端と言う形でやれたのでしょうか、曖昧な部分を残しての引継ぎで、不十分な決めごとと、無理な時間設定の狭間で辻褃合わせに大分苦労しましたが、委員を増強するなどの手を打って何とか形を作りました。

名簿を作っていて、物故者の数に驚きました。同年齢ということであれば、我々年代の物故者の割合はこんなものと理解すべきなのでしょう。我々の学年の卒業生は総数四四二人です。今頃になっての自慢話になりますが、卒業式の時、「卒業生四四二名！

総代 長島達明！」の声で、卒業証書を受け取りに出て行ったので、良く覚えているのです。この内の物故者の数が二〇〇六年の卒業五十周年の時には四五人で一〇・二%でした。これが一年の五十五周年の時には五七人で二二・九%になりました。ところが今回の喜寿の会では八一人に増えて一八・三%になっています。この内男性が二四%を超えたのに対して女性はまだ一桁です。統計とは正直なものだな、と思います。あるクラスで四人中一人人と三分の一以上が亡くなっているクラスがありますが、これは異常値でしょう。

五月蠅く口を出す人もいて、気持ちの良い準備作業という訳には行きませんでした。何とかまとめ上げ、十月二十八日に長崎郊外の「二見」なる料亭で、恩師三人を含む一〇五人を集めて盛大に開催しました。司会進行役までやらされることになり、時間調整の責任は自分で被る羽目になりました。会の後は、二〇一二年に新世界三大夜景に認定されたと言う長崎の夜景見物を企画しましたが、半数の方が参加。翌日は雲仙観光とゴルフ会の二つのオプションを作りましたが、これにも大勢が参加してくれ、最後は雲

仙の旅館で大騒ぎの打ち上げ会をやつて、成功裡にこの大行事を終えることが出来ました。次に何かをやるとすれば、八〇歳の傘寿の会と言つことになりませんが、こんな大掛かりな会はこれで打ち止めにすべきではないか、と言つのが正直な感想でした。

(平成二十六年十一月)

### 私の車遍歴

私が車の免許を取得したのは一九六〇年、大学卒業の春のことです。卒業論文作りの傍ら武蔵小金井の教習所に通つて、卒業ギリギリで免許証を手にしたのでした。

会社に入つてからは仲々運転する機会がなく、もっぱら借り車でドライブに出掛ける程度でしたが、その頃、借り車はずい分経験しましたので、今でも初めての車に乗つてもあまり違和感を覚えなくて運転が出来るような気がします。外国でのレンタカーなんかも割と気軽に使っているようです。

私の車に対する姿勢は、便利だから使つ、と言つもので、運転自体やスピード感が好

きな訳ではなく、運転もむしろ下手な方だと思っ  
ていますので、安心のできる運転者が  
いれば、運転はお任せする方が好きです。  
別に車自体が好きなのではないのですから、  
車を大事にする「愛車」と言う感覚は薄い  
ように思います。車種とかデザインには全  
くと言って良い程関心がなく、何時セル  
モーターを回しても必ず直ぐに動くと言  
う安心感があれば良い、と言う感覚では  
ないでしょうか。それなら常にエンジン  
でも磨いて手入れをして、ピカピカにし  
ておく、位の気持ちがあっても良いの  
ではないか、と言われそうですが、それ  
もしないのは「ズボラ」のひと言で片  
付けられそうです。

一つだけ拘りがあるとすれば、ロ  
ンドン時代に事務所の公用車になっ  
ていたジャガーは何となく好きで、  
この車だったら一度くらい持つても  
良いな、と思っていたことがあり  
ました。結局、この夢は叶えられ  
ませんでした。

と言うことで、これまでの車の遍  
歴を思い出して見ました。

一九六六年に香港に短期の駐在  
をした時に、事務所に置いてあ  
った三菱コルト六〇〇〇  
と言う軽自動車を乗り回しま  
した。この車はその直前にマ  
カオで開催されたマカオ・レ

ースとやらに出場した車で、日本に持って帰る手続きが面倒なので、香港の事務所に置き去りにされていた、と言う代物でしたから、リース仕様で作られており、軽量化するためにオイルメーターも付いていない、と言う危なっかしい車でしたが、缶に詰めた予備のガソリンを積んで、ずい分と彼方此方走り回りました。半年の任期の間に香港島内は勿論、フェリーに乗って九龍半島に渡り、中国との国境近くまで行ったりしましたし、乱暴な酔っぱらい運転も何度かやったものでした。この車がなかったら、私の香港生活も行動範囲がずい分と狭いものになっていたと思います。生まれたばかりの娘を残しての半年間の香港での単身生活中に、退屈して時間を持て余したことは一度もなかったな、と思いつ返すことが多かったのですが、この車がそのお手伝いしてくれたことは確かだと思えます。

自分の車を持ったのは、六七年のこと。香港から帰って、高円寺の社宅から駒沢の社宅に移って直ぐの頃でした。三菱コルト—100と言う車でしたが、納車して貰って、「これで四年間の月賦が始まるんだな」と、初めての月賦払いに緊張を感じた途端に達

直が家内のお腹に出来たのが判つて、「果たして月賦が払えるだろうか」と心配になつたことを思い出します。この車は月賦を払い終えてからも活躍しましたが、後半はもつぱら先の家内との病院通いの思い出が大きいのです。体調不良の原因が仲々分からなかつたので、病人を乗せてあちこち病院巡りをしました。慶応病院で、病名が脳腫瘍だと言ふことが判り、慶応の先生の勧めで立川の病院で手術をすることに決めてからは、通院と度重なる手術への立ち会いと看護。不自由な身体になつた家内を土に近いところで生活させてやりたいとの思いから、コンクリートの社宅を出る決心をして、自宅を求め探し回つたのもこの車でした。休みになると駒沢の社宅から、地図を片手に千葉や湘南などを走り回つたものでした。結局相模原に居を構えることにし、相模原の自宅と立川の病院との往復にはこの車が活躍しました。病院からの帰り道、「これから先、どんなことになるんだろう」と思いながら、暗い気持ちでハンドルを握っていたことを思い出します。廃車を決断したのが、七四年のロンドン駐在でした。

ロンドンでは着任後直ぐにフォード・コルティナー一六〇〇と言つ車を求めました。申

し上げたように、私は車に興味がある方でなく、車なんて下駄代わりのものだ、動けば良い、と言う考えの方ですから、「色や形には注文を付けない。直ぐに手に入る値段が手頃の信頼のおける車」と言う条件で探したら、直ぐに見つかっただのがこの車でした。鮮やかなグリーンの中で、口の悪い人からは、「バッタ色の車」なんて言われていました。納車して貰ったその日に、仮住まいのホテルを出て、初めての借家に引っ越したのですが、初めて走るロンドンの道を、隣の座席に置いた地図を頼りに、慣れない大きな車、それも初めてのオートマチックの車を運転してウエンブレイのフラットに辿り着いたのです。左足がクラッチを探して何度も地団駄を踏んでいたのを思い出します。この車も英国中を走り回って活躍しましたが、この車で一番印象に残っているのは、無免許運転中の交通事故。英国の免許取得試験に失敗して無免許の状態での運転中に、信号機が故障している交差点で衝突事故を起こしたのでした。国外退去にでもなるのではないかと夜中に脂汗を流して目を覚ます、なんてノイローゼになりかねない程心配しましたが、軽微な罰金で勘弁して貰いました。

七六年に帰国して直ぐ買ったのが、やはり三菱車でミラージュと言う車でした。先の家内の身体が不自由になっていたので、車椅子を乗せるためにハッチバックの車にしたのです。税金の請求が来ないので、心配になって税務署に聞きに行ったら、「身障者を乗せるので、税金は取らない」と言われました。家内は重度の身障者にはなっていませんが、それを申請した覚えはありません。日本は法治国家なんだな、と身を以てその有難さを感じたことでした。この車はそれこそつぱら病院通いに使いました。

先の家内が八一年に亡くなり、気分を変えたいと言う気持ちもあって、直ぐ買い替えたのが、三菱コルトギヤランの一八〇〇ccでした。横浜製作所勤務になった時でしたが、造船不況で大変な時期だったので、休日出勤も多く、休日はこの車で横浜本牧の工場に通ったものでした。今の家内とのデートはこの車で始めたことになります。この車は八九年にハウステンボスに転職し、長崎に来た時も陸送して貰って持って来ました。田舎の社宅に入ることにしましたが、電車もなく、バスも不便なところ。こちらに来ることを決めてから直ぐに、家内を福島かどこかの合宿制教習所に放り込んで、免許を取



って貰いましたが、これが大正解でした。日常の買い物も車がなくては出来ない田舎ですから、家内の免許がなければ、飢え死にするとこゝろでした。私には役員と言つことで、会社から車を支給してくれると言います。銀行の関係で日産のローレルと言つ車でした。三菱以外の車を使つていたのはこの時期だけでしたが、私用には出来るだけギャランを使いました。このギャランを一番使つたのは、免許取り立ての家内の方だつたでしょう。オランダに長期出張している間はレンタカーでフォードのスコルピオと言つ車に乗っていました。左ハンドルで馬力の強いこの車で、右側通行のオランダやベルギーの国中を一四〇〜五〇キロのスピードで走り回つたものでした。途中で少しの間、BMWの五二〇と言つマニュアルシフトの大きな車に乗っていましたが、これが私が運転した一番大きな車です。三菱ギャランは良い車で、好きだったので、長いこと使いましたが、現役を引退して監査役になつた九九年には流石に電気系統に弱りが出て来たので、廃車にすることにしました。その頃、家内の買い物にこれも三菱の中古車を買つて使つていた時期がありました。これは二・三年間のことだつたでしょう。

次も相変わらず三菱車でギヤランのビバーチエと言う車。この車を終の車にする積りでしたが、どうにも電気系統が弱いのです。コンピュータ制御の部分の調子が悪くて、突然動かなくなります。ブラックボックスの中の故障なので、自分ではどうすることも出来ず、JAFのお世話になることが度重なりました。車は動きさえすれば良い、と言う私の要請に合わず、安心して乗っていられなくなって来たので、買い替えることにしました。

ここで三菱への義理は忘れて、一度くらいトヨタに乗って見ようか、と一旦は思ったものの、ここまで来たら一生三菱車で統一しよう、と思い直しました。私はどうしてもセダン・タイプの車が好きなのですが、その頃の三菱はセダンを作っていなかったもので、中古を探したところギヤランのフォルティスと言う車が見付かりました。二年使った中古で六万キロ走っています。経歴を聞いたら、三菱自動車販売の営業車として使っていたと言うので、それ程乱暴に乗った車ではないだろうと思って決めました。二〇一一年暮のことです。これが大正解で、その後は機嫌良く走っています。

このところ長距離の運転が億劫になりました。以前は鹿児島へも何度か車で往復した程でしたし、温泉巡りをしたりして、九州中を走り回ったのですが、二年前の脑梗塞の所為でしょうか、年齢の所為でしょうか、運転が億劫になって、最近では、車で往復していた長崎や博多も、単身で行く場合は電車にしています。本でも読みながらユツクリ往復する方が楽に感じられるようになりました。ゴルフも遠出は避けて近場のゴルフ場を選ぶようになっていきます。

この車が終の車になることは間違いないと思いますが、何時まで自分でハンドルが握れるのだろうか？ 田舎暮らしでは車がなくなると生活が困難になります。そんな心配を始めている今日この頃です。

後期高齢者になり、免許証も認知症のテストを受けないとくれないような年になりましたが、ここでは車は必需品ですので、出来る限り運転は続けねばなりません。ゴルフでも出来なくなったら、免許証返上を考えることにしようかと思っています。

(平成二十五年十月)

# ハウステンボス編

拝啓 工支社長殿

オランダで現地法人を作って、初代の社長をやっていますでしたが、神近社長が二代目の現地法人の社長をリクルートして送り込んで来てくれたので、私は交代で帰国することが出来ました。この方は商社から来た方でしたが、その後様子を聞くと、あまり評判が良くなく、一緒に働いたオランダ人たちからの苦情が私にも届いて来ます。思い余って左記のような手紙を書きましたが、随分と悩んだ結果、結局この手紙は出状しませんでしたので、幻の手紙と言うことになります。私のオランダで

の生活の一部を紹介したものになっていますので  
ご披露します。

ご赴任後、早三ヶ月になりましたね。アパートの住み心地は如何ですか。私はハンデ  
イで住み易いアパートだと思っていましたが、どうでしょう。奥さまもオランダの生活  
にお慣れになったでしょうか。初めての土地とは言え、大兄は海外生活のご経験は豊富  
だし、オランダも住めば良いところですから、もう余裕を持ってエンジョイされている  
ことと思います。

事務所の連中は如何でしょう。少しギグシヤグが見えて気にかかっています。大兄は  
海外生活一四年とか、言葉は勿論不自由はないし、割り切りは早いし、手が早くて事務  
処理能力はおありになるし、ご自身については全く心配がないのですが、事務所の連中  
との関係が気になるのです。過去の任地が南アフリカとかインドネシアが長かった所為  
でしょうか、マネージャーと使用人、と言う意識の強さが最初から見えたのです。アメ

リ力でも外国人を直接使うことは少なく、日本人を介して間接的にコントロールされていたのではないだろうか。私はあの二人を使用者として雇った積もりはありません。我々が進めているプロジェクトに興味を持ち、いわゆるヤル気で参加してくれた仲間として雇った積りなのです。

実際、事務所開設のゴタゴタの時は、二人とも本当に良くやってくれ、力になってくれたのです。W君の良いところはヤル気。外国人が日本の会社に入ると、どうしても雇われ人根性が顔を出すのが普通でしょう。彼の場合は仕事をやりたいと言う気持ち先立に立つので、一つのことを責任を持って完結させたい、と言う意識が強いのです。組織の中で働いた経験のない人ですから、仕事の進め方や手順については乱暴な面があるし、組織で育った我々から見るとビックリするようなこともあります。これは今後の指導で何とでもなります。あんなに優しい顔をしていて意外に短気で、カツとなるので直ぐに食って掛かってきますが、根がリーゾナブルな男ですから、静かに諭して理を分けて説明してやると、とても素直に理解してくれ、「分かった。自分が悪かった」と言って

くれます。ご存知の通り外国人は仲々自分の非を認めようとしない傾向が強いのですが、こんなに素直な外国人は珍しいと思つたほどです。意欲の割りに時間の管理が下手なので、アレもやるう、コレもやりたいと手を出した挙句、パンクしてしまって、期限内間に合わなかつたり、その日の内にせねばならない返事が出来なかつたりしています。これも何度か失敗している内に自分でコントロール出来る様になつて行くものと思います。それまではパンクしたら手助けしてやれば良いではありませんか。それより、自分はこので忙しいからこれ以上は出来ない、と自分の守備範囲を決めてしまつて殻に閉じこもり、樂をしようとするよつな、そんな仕事のさせ方にはしたくないと思つのです。確かに自分の時間を大切にする傾向はあります。でも、これは外国人全般に言える傾向で、私は彼の場合、それでも程度は良い方だと思つのです。仕事を残して帰る時も、個人的な理由を言つて、申し訳ない、と言いなから帰る。この気持ちが大切だと思つのです。平気で仕事を残して帰るよつな無責任な気持ちではありません。私がいる間はこつといった気持ちを持ち続けてくれたと思つのですが、マネージャーが代わつてから何

かドライになって時間が来れば仕事は放り出して帰るような風潮が出て来ているような気がするのです。時間から時間までいれば良いんだ、と言う、雇われ人根性が出てくるのが一番つまらない。お互いの不幸です。こういう気持ちにだけはしたくないと思っ  
ていたのですが・・・。

秘書のS嬢についても、あなたは最初から点が辛かった。やることが遅いとか、お尻が重いか。何度か申上げたように、私は彼女を単なるタイプスト、コピー作りやお茶汲みの秘書として雇った積りはありません。何せ人数の少ない事務所ですから、追々はもつと責任のある仕事、自己完結的な仕事をやって貰いたいと思っていました。本人もその気十分。やり甲斐のある仕事を任せて貰いたいと言う意欲に燃えていたのです。これから彼女にやって貰える仕事はドンドン出て来ると思っています。とは言っても四月に  
来てくれたばかりですから、取っ掛かりは所謂秘書的な仕事をして貰っていました。そういう気持ちがあるから、私の場合、コピー作りを頼むにしても、「悪いけれどこれをやってくれないか」と言う言い方になりました。それより誰だって頭ごなしに、



「これをやれ」と命令されたら面白くないでしょう。釈迦に説法ですが、使用人でも人格を尊重し、仲間として扱う、と言う姿勢が何処に行っても必要ではないかと思うのです。最初の頃、私がかなりバタバタと走り回っていましたから、朝、かなりポリウムのある仕事を頼んで出かけ、夕方遅くなつて、出来ているかな、と思いつつ帰つたら、この仕事が綺麗に片付けられて私の机の上に置いてありました。メモが添えてあります。曰く「あまり働き過ぎないで下さい。私にも負担を少し分けて下さい」。涙が出るほど嬉しかった。こう言う仲間意識は大切にしたいと思います。やはり自分が率先垂範でやつて見せることが大切なのではないでしょうか。口ばかりが達者な連中だ、と言われませんが、こんなこともありました。社長が来られて事務所開設のパーティをやつた時のこと。パーティの三週間前に来てくれた彼女をパーティの担当にし、「君が責任者だよ」と言つてやつて貰いました。招待状の発送から出欠の受付、会場のセット、ケータリング会社との打ち合わせ、当日の受付まで実に良くやつてくれたのです。とても上手くいったので、終わつてから社長にひと言褒めて貰おうと思つて、皆の前で「このパーティ

は秘書のS嬢がやってくれました」と披露しました。後で社長がS嬢に礼を言ったら、「これは全部ミスター・ナガシマがやりました」って言ったのだそうです。良い話でしょう。こんな気持ちを持っていることを理解してやって欲しいのです。このままでは二人とも辞めると言っているそうではありませんか。本当に勿体ない。何とかしてやって下さい。

大兄に言わせれば、前任者が甘く育てたので後任が苦勞する、と言われるかも知れない。やり方や厳しさや組織の中での動き方に不満はあるでしょうが、ヤル気はある人たちですから、デイスカレッジだけはさせないよう、やれと言われたこと以上はやらない、雇われ人根性は持たせないよう、上手くリードしてやって下さい。

どうぞよろしく願います。

私のこと。実は八月三日に帰国、東京で週末を過して五日の夕方西彼町に帰り、晩飯を食っていたら隣の社長から呼び出しがあり、オランダ村本体の営業本部長をやってく

れ、との話がありました。九月の株主総会で本体の役員に就任することになるので、子会社のゴルフ場とオランダ村商事の役員は兼務出来ず、両方とも首と言う訳です。直ぐにも席を営業本部に移して引継ぎと言うか勉強を開始しろ、と言うことで、早速引越しをしました。何せ又ゼロからのスタートですから、部長さんたちからブリーフィングを受けたり、若い人たちとのコミュニケーションに努めたりの毎日です。話があった時、「オランダ村の十倍の規模のハウステンボスが出来たら、十分の一のオランダ村に来る人はいなくなるのではないか」と言ったのですが、偶々翌日の役員会で、社長から、ハウステンボスがオープンしたら旧オランダ村は一旦閉鎖して、一年後に新しい形で再オープンする計画が提案され、この方向で進むことが決定されました。こんな基本的な重要な問題が今頃決定するなんて遅すぎるのではないか、と思いましたが、経営的にはこの方が圧倒的にメリットがあることが判つていても、開村当初からこの西彼町でゼロから育て上げて来た人たちからすれば、情において、また地域住民との繋がりの中で、ここを閉鎖するのは忍びない、と言う気持ちが強くて、仲々踏み切れなかったのではない

かと思います。ですから、オランダ村本体の営業本部長をやることになったものの、一年半後には閉める施設の営業責任者と言う訳で、これからどういうことになるのか訳が判らないでいるのが真相なのです。

私にしてみれば、入社後半年はゴルフ場の仕事をし、その後、半年以上オランダで建築資材の買付け等の商事関係の仕事をしてヤツと帰ったら、今度は営業・集客と一年の間に三度も仕事を変わったことになります。この会社、個人にとっては「一寸先は闇」ですね。

(平成二年九月)

### 聖女ブラクセデイス

私が、フェルメールが四十三年の短い生涯の間に遺した三七枚の絵の内、二九枚までを観ていることはご紹介したことがあります。残る八枚は個人所蔵になっていたり、英53 国皇室の所蔵だったり、一枚ずつドイツの美術館にあつたり、盗難に遭つて行方不明だったりで、もうこれ以上は観られないのではないかと半ば諦めていました。

四月に上京の際、日展の会員で工芸品を作っている友人から、「上野の都美術館で工芸美術展に出品しているので、機会があつたら観て欲しい」と言われていました。四月十八日に、お昼の集まりと夜の会食との間に時間が出来たので、お義理半分で芸術を鑑賞して来よう、と行つてみることにしました。上野駅の公園口を出て都美術館に向かう

途中で、西洋美術館の前を通つたら、見覚えのあるフェルメールの絵の看板が出ているのです。近付いて良く見ると、見残しているフェルメールの絵のうちの一枚、「聖女プラクセデイス」が看板になっていました。この絵はアメリカの女性富豪バーバラ・ジョンソンが所蔵していて、ジョンソン・コレクションの中にあると聞いていたものです。写真で見て、とても綺麗な絵なので、是非一度見たいものだ、と思っていたので、覚えていたのです。何故この絵がこんなところにあるのか、分からないまま、お義理の都美術館の方は後回しにして、何はともあれ西洋美術館の方に入ってみることにしました。企画展が開催されている訳ではなくて、常設展の中にあると言います。常設展だとシアは只で入ることが出来るのです。免許証を出して只の入場券を買って真っ直ぐにこの絵のところに行きました。

お目当てのこの美しい絵の前には人影もまばらで、ユツクリ鑑賞することが出来ました。聖女プラクセデイスと言う人は、二世紀頃、姉妹でキリスト教の殉教者を援助した人だとのことで、「画題はこの女性が、首を切られて殉教した殉教者の血をスポンジで吸

い上げて壺に搾り入れている場面です。後ろには首を切り取られた死体が転がっていると言つ、言つてみれば物凄くグロテスクなものなのですが、この女性の穏やかな眼差し、優しい顔つき、肩の線の美しい流れから指先まで、愛に溢れた仕草が本当に美しく描かれていて、写真で想像していた以上の美しさと迫力で、大好きな絵になりました。

解説によりますと、この絵はイタリア人の画家が描いたものを、修業中のフェルメールが模写したものとこのことで、極く初期の一六五五年頃描かれたものだとこのことでした。イタリア人画家の原画の写真と並べて展示されていましたが、構図は全く同じでも美しさには格段の差が感じられました。

二〇一三年にバーバラ・ジョンソン夫人が亡くなり、ジョンソン・コレクションが競売に出されましたが、一四年七月にロンドンのクリスティーズで中国筋の収集家が約一億円で落札し、これを西洋美術館に寄託したので、現在は西洋美術館の収蔵品になっているとのことでした。初めて展示されたのが、一か月前のこの三月十七日とのことです。数少ないフェルメールの絵が一枚でも日本にあると言つのも素晴らしいし、そ

れが何時でも只で見られるなんて、やはり東京と言うところは凄いところだ、とつくづく感じ入りました。有名なフェルメールおたくの青山学院の福岡伸一教授も知らなかったとのことで、その後、日経新聞に驚きのコラムを書いておられるのを読みましたから、私が驚いたのも当然です。本当にラッキ―な出来事でした。

私のリストによれば、この絵は「非真作」に分類されており、今尚専門家が調査中とのことでしたが、私は絶対に真作だ、と信じています。真作でなくても良い。こんなに美しい絵なら、偽物でも喜んで何度でも観たいものだと思いました。池之端の「藪蕎麦」で友人とお昼を共にする機会があつて、その際、「この友人を誘つて再度寄ってみました、丁度月曜日の休





館日で観られませんでしたので、その後、別の日に一〇分ほどの時間を見付けて、もう一度飛び込んで例の只の券を買ってこの絵だけを観てきました。ミュージアムショップで絵葉書を探しましたが、まだ制作が間に合っていない、とのことでした。どうやら寄託品については、絵葉書は作れないらしいのです。

今回の上京はこのラッキーな出来事に出会えただけでも価値があつたなと思つていきます。これで私が観た本物のフェルメールの絵の数は三〇枚に到達しました。

で、最初の日のお義理半分の工芸展鑑賞の方は、全くのお義理になりました。年を取つたら、「(風邪を)引くな。転ぶな。義理を欠け」と言いますが、やはり義理は大切にせねばならない、と言うのが今回の教訓でした。

(平成二十七年四月)

## 宇沢弘文教授が亡くなりました

私が隠れファンだった宇沢教授が昨年九月に亡くなりました。八十六歳でした。私が教授を初めて意識したのは、一九九九年十月のこと。日本開発銀行と北海道東北開発公庫が統合され、日本政策投資銀行が設立されて、福岡で開催された設立のご披露の宴に出席した際、教授の記念講演を聞いた時でした。教授は当時七十を過ぎたばかりだった筈ですが、私にはもつと年上に見えました。立派な白髯を振り回しての熱弁に圧倒され、その内容に感銘を受けたのでした。

東京大学を五一年に卒業し、数学科の特別研究生として大学に残りますが、その後経済学に進み、数学を経済学に応用した研究が認められて、五年後の五六年にはアメリカのスタンフォード大学に助手として招聘されます。そして六四年には三十六歳でシカゴ大学の教授になるのです。四年後の六八年に帰国して東大の助教授に戻って来るので

すが、シカゴ大の教授が東大の助教として戻ったと言うことで、当時は大分話題になったそうです。アメリカに居づらくなった事情は日経の「私の履歴書」に詳しく記されていますが、どうやらシカゴ大の教授でノーベル賞受賞者のミルトン・フリードマンが主宰する自由放任思想の新古典派の考え方に限界と反発を感じられたところにあるようです。

帰国後はもっぱら公害や環境問題に力を入れておられたようで、七四年に上梓された「自動車の社会的費用」では、自動車が市民生活に与えるコストは当時のお金で一台当たり二〇〇万円にも上ると言う数字を弾き出して、ベストセラーになっています。ご自身も自動車を使うことを止め、自転車やジョギングで通勤されていたことは有名になりました。成田空港問題では、地元と政府の間に入り、火中の栗を拾う形で解決に努めましたし、地球温暖化問題についても発言を続けました。水俣病問題や種々の開発計画についても問題を提起しておられます。

東大の経済学部卒業の人に聞くと、宇沢教授はマル系の経済学者だ、と言いますが、

私はマル系ではないと思います。自由放任主義の新古典派の経済学を厳しく批判するところが、マル系に見えたのだらうと思っています。

本誌でも何度かご紹介した「社会的共通資本」の考え方が有名になりましたが、私がファンになった一番の理由は、理想的な社会は資本主義と共産主義の中間、民主主義と全体主義の中間にある、と言う私の理想論にとても近い考え方を示して頂けたことです。私はこれを、「節度ある資本主義」「武士の心を持った経済」と言いたいのですが、教授はこれを「暖かい心を持った経済学」といった言葉で示されます。この考え方が認められて、一九八三年には文化功労者になられ、九七年には文化勲章を受賞されています。

定年で東大を退官された後、若い頃目指した医学部に入り直そうと考えられたことがあったようですが、医者になっていた娘さんから、「これから医者になっても社会に貢献できる期間は短い。医者を育てるには膨大な社会的費用が掛かる」と諭され、「自らの不明を恥じて」「医学部への入学を止めたと云う逸話が残っているのも、何だか教授の生き方を示しているような気がします。

学生時代、アダム・スミスの「国富論」も、カール・マルクスの「資本論」も、メイナード・ケインズの「一般理論」もまともには読んだ記憶のない経済学土落第生の私も、社会人になってから何となく経済学関連の本を読むようになっていたのですが、それを後押ししてくれたのが宇沢教授ではなかったか、と思っっています。読んでいて気持ちが良いので、そうだ、そうだ、と頷きながら読んでいたようです。その流れの中で英国の経済学者、ロナルド・ドーア教授がお気に入りになっていますし、先日ご紹介した水野和夫著の「資本主義の終焉と歴史の危機」なんかに挑戦したのも、これらのベースがあつたからでしょう。

トマ・ピケティの「二十一世紀の資本」もあれだけ話題になっているのだから読んでみようかな、と思つて紀伊国屋に出掛け、覗いてみたのですが、まず値段が税込で五九四〇円であることに恐れをなしました。七〇〇ページを超える膨大な著作の中に沢山のグラフや数表が並び、小さい字でびっしりの記述です。これは絶対に終わりまで辿り着けないな、と判断して、戦う前に退却を決め、解説書を幾つか求めて来ました。それに

してもこの大著が本屋の店頭に山積みの平積みになって売られているのです。一三万部を超えるベストセラーだとか。こんな本をどれだけの人が読み上げることが出来、内容を理解することが出来るのか、僻み半分で疑問に思ったことでした。解説書を読んでみると、どうやらお金の力で金儲けをするばかりで、世の中に何も産み出すことのない、私の大嫌いな類の連中が力を持ち過ぎて、大きな所得格差を生みつつある、と主張されているようです。この辺は、アダム・スミスが言った有名な言葉、「神の見えざる手」に示される自由放任主義を基本にする新古典主義経済学では上手く行かないことが立証されたと言つ事ではないだろうか。つまり、経済活動は、経済人の自由に任せておけば一番能率の良い接点が見出され理想的な姿に落ち着く、と言つ考え方は間違いで、このままでは所得格差が広がる一方で不公平な社会が出来てしまう、と言つことを主張されているようです。私の解釈では、実体経済の方は、「神の見えざる手」に任せても良いけれど、今や実体経済の何十倍（下手をすると何百倍）の規模に達していると言われる金融経済の方はそれでは制御できない、と言つことになります。企業経営者の不当に

高い年収も話題になっています。あんなに高い年収を払うことが妥当なんだろうか。CEOと呼ばれる人達はそれだけの価値のある仕事をしているのだろうか。貰う方も、自分がそれだけの働きをしているのだろうか、と疑問を感じないだろうか。経営者の末席を汚した経験のある私としては、僻み半分は大いに疑問に感じます。経営者の役割も大切ですが、その下で汗を流して働いている人々が大勢いる。その人たちの努力には大いに報いるべきなのではないだろうか。この不公平を是正するための国際的な税制の提言もされているようですが、この辺りも、資本主義と社会主義の間に理想の社会を見出して行こう、とする宇沢教授の考え方に近いのではないかと、我田引水の解釈をしています。ドリア教授も、昨今の株式は投資ではなく、投機そのもので博打の範疇だ、と言っておられます。この辺にも通じるものがあります。

亡くなった直後に、日経新聞が「経済と人間の旅」という本を発刊したので、最後にも思っただけで求めましたが、これは「私の履歴書」と日経に掲載された教授の論文を集めたもので、目新しいものではありませんでした。

宇沢教授は、経済学は人々を幸せに導くものでなければならぬ、と考え続けておられたのではないか、と思います。そんな役割が果たせていないのではないか、と常に疑問を持っておられた。それが「暖かい心を持った経済学」につがるのではないかと思えます。殆ど最後の著書が、「経済学は人びとを幸福にできるか」と言う表題だったと言っているのは偶然ではなかった様な気がしています。

(合掌)

(平成二十七年一月)

### 「アメリカの鏡・日本」

この本の著者のヘレン・ミアーズという女性は、一九〇〇年ニューヨークの生まれ。若い頃、日本を訪れて以来日本研究者になり、一九三六年の二・二六事件の頃の日本にも滞在したことがあります。戦時中にはアメリカ本国で日本専門家として活躍し、戦後はGHQの一員として日本で働いた経歴を持つ人です。この人がアメリカに帰国後、一九四八年(終戦後三年目)に書き上げたのがこの本で、アメリカで話題になり、邦訳



も試みられたそうですが、マッカーサーがこれを読んで、「この本は占領下の日本人には絶対に読ませてはいけない」と言つて翻訳を禁止したと言われます。

占領が終了した翌年の一九五三年に初めて邦訳されたそうですが、当時はあまり注目されず、一九九五年になって題記の表題で再度邦訳されました。日本の戦後を知るためには欠かせない本だ、と言つ書評に釣られて読んでみましたが、確かに相当強烈なことが書いてあります。

幾つか例を挙げますと、【括弧の中に私のコメントを書いてみました】

戦時中、アメリカ政府は、「日本人は狂信的軍国主義者の集まりだ」、「野蛮な戦争好きの民族だ」、「これを叩き潰さねばならない」と言つ謳い文句で国民を戦争に駆り立てたが、実際の日本人はそんな民族ではなく、平和を愛する国民性を持っていた。一八五三年に外国人が無理やりに日本に入つて来るまでは、狭くて貧しい国土の中で平和に暮らしていて、拡張主義者とは全く反対の行動を取っていた。パールハーバーはアメリカ政府が自分の国民を戦争に巻き込むために利用されたものだ。

【この辺は以前ご紹介した「逝きし世の面影」に描かれている、幕末から明治の初めにかけて日本を訪れた外国人が見た美しい日本人の姿が彷彿されます。また、これはこの本に書かれている訳ではありませんが、日本を戦争に引き込んだ一番の張本人は当時大統領だったフランクリン・ルーズベルトだった、と言う説もあるようです。つまり、一九二九年の大恐慌以来の不況から回復するために、ニューディール政策などを試みたが、一向に効き目がなかった。景気の回復には戦争が一番の特効薬だと言うことに気がついたルーズベルトが日本を挑発して戦争に引き込んだ、と言うのです。彼は、戦争はやらない、と言う約束で大統領に選ばれたので、国民を戦争に駆り立てるには相当の理由が必要だった。それには西部劇と同様に、挑発して相手に先に銃を抜かせるのが一番分かり易かった。それがパールハーバーだった、と言うのです。これは一部のアメリカ人の間にある見解だとのことで、彼らによれば、若し、終戦の時点でルーズベルトが生きていたら、スターリンと組んで、日本の天皇を抹殺しただろう、との見方をしているとのことです。恐ろしいことです。】

日本は領土拡大のために戦争を始めたのではない。自国を守るのが目的だった。日本は資源のない国で、輸入した原料を加工して、それを輸出して生活必需品を輸入する他に生きる道がなかったが、一九三〇年代にはメイド・イン・ジャパンの製品がアメリカや欧州諸国にとって邪魔なものになっていたので、日本からの輸出を不当に締めつけ、その上資源供給国からの輸出を制限して資源の供給も出来ないようにした。日本は自国の存続のためにやむを得ず立ち上がらざるを得なかったのであって、領土拡張の意図は全くなかった、と言って、日本の正当性を強調している。それらの事実を、数字を挙げ、当時の関係者が言っていたことを実名で挙げて紹介して、日本を戦争に追い込んだのは我々の方だった、との結論を導き出している。

【マッカーサーが帰国後、上院の聴聞会で、「日本の戦争の目的は自衛のためのものであった」と証言したことは良く知られていますが、この著者は戦後三年目に既に全く同じことを言っています。】

日本は実際にアジアの各国を欧米の植民地から解放してきている。フィリピン、マレ

ーシア、インドネシア、ビルマ、インドなどが独立して現地政府を持つことが出来た。日本が欧米と同じ方法で植民地支配をしたと言われるが、その植民地だった満州や中国でも、日本は時間が経つと約束に従って不平等条約を取り下げ、治外法権も外して植民地から開放している。植民地政策を取り続けた欧米諸国とは違う。その欧米諸国に日本を非難する資格はない。

【この辺は、それこそ右翼と目される一部の日本人の「大東亜戦争史観」を認める立場を取っている様です。】

アメリカが取ってきた対日政策が、日本人の眼から見たらどう見えたのだろうか、と言う視点で分析し、日本の対応が間違っていない部分が沢山あった、との見方をしている。

【同様の政策が自分の国に対して取られたら、日本と同じ反応を示したであろう、と言う言い方で、日本が戦争に巻き込まれていった経緯を正当化しているようです。

こつした言い方で、少なくとも一九三七年に勃発した日華事変以前の日本の外交姿

勢は正当なものであった、と言っています。】

終戦間際になつた日本はもはや戦う能力が全く無くなつていて、降伏が間近であることは、軍事関係者の誰もが知っていた。原爆は戦争終結の手段として使われたのではない。ソ連との戦後の政治戦争を有利に進めるために投下されたものだ。ポツダム宣言は日本政府に、「占領か、日本の完全破壊か」を選ばせる厳しい内容だったが、原爆投下までに二週間の時間的余裕しか与えられていない。これは上記の目的で投下されたことを示している。

【原爆はその破壊の効果を実験するために投下された。それが証拠に、比較的空襲の被害が少なかった広島と長崎が選ばれたのだ、と言う見方もあるようです。恐ろしいことです。】

占領政策も、「野蛮な戦争好きの民族である日本」を懲罰し拘束して、二度と再び立ち上がれないようにすべきだ、との方針の下に作られているが、全国民を有罪として一括して処罰しようとしている。人一人を有罪にするのに、裁判制度を使って慎重に判断

し、大変な努力が払われるのに、全国民を有罪視することなんて出来るはずがない。我々にそんな資格があるのか。戦後の占領政策は日本国民と日本文明を破滅させんとするものである。

【これはGHQが進めたWGIP（戦争犯罪周知計画）を批判しているものと思われる。極端で非現実的な平和憲法を押し付けたのも、日本を恐れるあまり日本が二度と立ち上がれないようにしよう、日本が未来永劫に亘ってアメリカに歯向かえないようにしよう、と言つ意図の下になされたものと思われます。この憲法の改憲を出来難くしたのも、当時のGHQの深慮遠謀の結果かも知れません。】

日本がやったことは、欧米の先進諸国がやって来た植民地政策のお手本を忠実に踏襲したものであって、欧米諸国が自分の都合の良いように作った所謂国際法を守った合法的なものだった。つまり、日本は欧米諸国の先生方の教育を見習った忠実な生徒だった、と言っているのです。

こうして、日本はアメリカの鏡になっている。アメリカはこの事実を自ら認識しない

と今後も大きな間違いを犯すことになる、という事を主張しているのです。マッカーサーが占領下の日本人に、アメリカ人がこんなことを書いたことを知らせたくない、と考えたのも当然のことと言えるでしょう。

こうしたことを日本通（決して日本臍履ではありません）と言われたアメリカ人が、戦後三年目に書いていることに驚かされるとともに、アメリカの言論の自由度を感じさせられたことでした。

（平成二十七年七月）

### 「大東亜戦争とスターリンの謀略」

突然変な話題になって驚かれるでしょうが、尾崎秀美（ほつみ）という人の名前は聞かれたことがあると思います。私も名前だけは知っていて、戦前、開戦の直前にドイツ大使館員のゾルゲとのスパイ事件に連座して処刑された人、程度のことしか知らなかったのです。ある人の勧めで題記の本に接し、こんな歴史の見方もあるのか、と目を開かされた思いがしたので、ご迷惑かも知れませんが、ご紹介してみようと思います。

著者の三田村武夫という人は、一九二八年から内務省警保局なるところで、四年に亘つて社会主義運動の取締を担当し、三二年から三年間、拓務相管理局なるところで、国際共産党の調査研究に従事していた人で、その後は三六年から衆議院議員に転じ、今度は逆に反戦・反軍の立場で特高警察に追い回される一〇年間を過ごし、最後は巢鴨刑務所のお世話になった、と言う特異な経験を持つ人です。この本が「戦争と共産主義」と言う題名で発刊されたのは、一九五〇年のことだったそうですが、当時、共産主義者が主導権を握っていたGHQの検閲官によって発売禁止になつてしまつたとのことです。八七年に題名を上記に替えて復刊された本書の序文は岸信介が書いていますが、当時の政府の中枢にあつた岸氏自身からも、「ウーンと唸ること屢々であつた」と驚きのコメントが記されており、「近衛文麿、東条英機の両首相をはじめ、この私まで含めて、支那事変から大東亜戦争を指導した我々は、言つなれば、スターリンと尾崎秀美に踊らされた繰り人形だった、ということになる」との言葉を残しています。この本を読んだ方々からのコメントの一部も紹介されていますが、東大総長の南原繁、慶応塾長の小泉



信三、最高裁判所長官の田中耕太郎辺りからも大変高い評価を受けているようです。

三田村氏は、自分自身が当時の政治家としてこの戦争を止めることが出来なかったことへの反省を込めてこの著書を書いています。当時自分が調査し、研究して残した資料や尾崎秀美自身が書き残したものの、左翼出版物の検閲の記録、当時の学者や政治家が「中央公論」や「改造」などの冊子に残した論文や座談会の記録、尾崎の裁判記録などを分析しているので、言わば、調査報告書や資料の部分が多くて、読み物としては誠に読み難く、苦勞しましたが、内容が物凄く興味深いものなので、何とか読み上げました。

内容は、岸信介が言っているように、戦前の戦争への流れは、スターリンが主導する国際共産党即ちコミンテルンによって作られたものだった、と言うひと言に尽きます。コミンテルンは、世界的な革命によって世界中を共産主義社会に持って行くことを最終目標にしていました。尾崎秀美は単なるスパイではなかった。筋金入りの共産主義者で、コミンテルンが出して来る指導、所謂テーゼの忠実な実行者だった、と言うのです。

一九二五年、東大学生当時に既に共産主義の信奉者となり、卒業後は上海でコミンテル

ン本部機関に加わり、最も実践的な本物の共産主義者だったが、その正体をあくまでも秘密にし、一〇年間連れ添った妻にすら知らしめなかった、とのこと。朝日新聞の記者を皮切りに、進歩的愛国者、優れた政治評論家として名を成し、近衛文麿の最高政治幕僚として、日華事変から大東亜戦争への流れの中で指導的役割を演じています。当時の近衛文麿は進歩的時代感覚の持ち主として国民の声望も高く、お公家さんですから天皇にも近く、軍部にも口が効けると言っ誠にご利用価値の高い人物だった上に、利用し易い人だったので、意識的に取り入って行ったものと解釈されます。ゾルゲ事件が発覚し、尾崎が逮捕された後、近衛文麿が、自らの不明を天皇に詫びた上奏文なるものがあります。この中で、近衛は「自分が尊重して来た軍部・官僚の革新論の背後に潜んでいた共産主義革命への意図を十分看取することが出来なかったのは自分の不明の致すところだ」と言っています。自分が知らず知らずの内に、革命主義者たちの口ポットとして踊らされていたことを告白しているのです。尾崎は近衛文麿の後ろ盾を利用して、政治家は勿論、学者や軍部に対しても働きかけを強め、自分の意図を隠したままで、コ

ミンテルンの目的とする方向に引つ張つて行つた、と理解されています。明治の元勲西園寺公望の孫の公一との親交（尤も公一はその後中国共産党に加担したと言われます）や、名望が高く、五・一五事件当時の首相で、殺された木堂尾崎毅の息子の健との親交も、周囲の信頼を勝ち得るために利用されたのではないか、と思われまふ。

コミンテルンは一九二七年と三二年の二度に亘つてテーゼを出していますが、分かり易いものの幾つかを挙げてみますと、

戦争は反対すべきものではない。資本主義国同士の戦争は、むしろ歓迎すべきことで、お互いを弱体化させ、その隙に共産主義革命を成し遂げるべきだ。この種の戦争は短期に終わらせてはならない。むしろ長期化させる方向に行つて、双方の国の体制の弱体化を促進すべし。各国の共産主義者は、積極的に軍隊の中に入つて行き、軍隊自身を共産主義思想に染めろ。自国を敗戦に持つて行くように仕向ける（敗戦革命と称していたそうです）。そして混乱し、弱体化した資本主義体制を倒せ、と言つた内容です。

尾崎は、北一輝や大川周明の右翼社会主義の考えや、貧しい農村家庭から出て来ていて資本主義社会に不満を募らせている多くの兵隊の不満に上手く呼応する形で、これらのテーゼを実現しようとしています。幾つもの具体的な例が挙げられています。幾つかをご紹介しますと、 については、日華事変の主因となった近衛政府の有名な、「蒋介石政府を相手にせず」宣言に大きく関わったとされていますし、事変が勃発する直前に、和平に持ち込む絶好の機会があったのに、近衛文麿の側近としてこれを潰した。 については、単に自衛の戦争にしてしまうと、戦争が短期で終わってしまう可能性がある。 があるので、大東亜戦争と言う名目にしてアジア解放の大義を作り上げて、大掛かりなものにするような与論の醸成に力を尽くし、戦争の長期化を果たそうとした。大戦が始まった直後、シンガポールで英国に大勝した時、米内光政以下より講和の案が出て来たが、これも潰した（大戦が始まっていた頃は、尾崎自身は既に巢鴨に収監されていたはずですが、彼の思想の流れが引き継がれていた、と解釈されています）。

著者は自分自身が巢鴨に入った時、一九四一年一〇月に検挙され、既に死刑の判決を

受けた後の尾崎を見たことがあると言いますが、大事を成し遂げた、と言う達観した立派な態度だったと言います。当時八〇〇〇万人の国民を苦しめ、三〇〇万人の人を死に追いやる戦争に加担した尾崎の働きは決して許されるものではないが、その、死を覚悟した上の信念と熱意と能力は並々ならぬもので、「偉大なコミュニストだった」と高く評価しています。

尾崎秀美は一九四一年一〇月に逮捕され収監された後、詳しい手記を残しています。この手記は、完全に覚悟を決めた上と言つか、悟り澄ました見事なもので、資本主義の矛盾を語り、日米開戦の必然性を予告し、日本の敗戦を予想し、敗戦後はソ連の庇護を受けてプロレタリア独裁の政権を作る流れまでが記されています。当時現存していた協力者たちの名前を具体的に挙げているのも一種の洗いざらいの白状なのではないか、と思いました。そして「第二次世界大戦の過程を通じて、世界共産主義革命が完全に成就しないまでも、決定的な段階に達することを確信する」とまで言っています。プロレタリア革命ですから、天皇制の打倒は打ち出しているのですが、日本の天皇制（君主制）

が真の君主制とは違ってかなり擬制的なものであることを見抜いて、天皇制の打破を目的にすべきではない、と言っているのも現実的で見事な見解だと思いました。もっとも、この手記は一九四二年三月頃書かれたとのことで、事態が大分進んでいる頃ですから、若干、「ジャンケン後出し」の嫌いもあって、自分の見通しの正しさを殊更に高く評価させようとした部分もあったのかも知れません。自分自身については猛烈な反国家犯罪者であることを自覚し、露見・逮捕に至れば、「要するに死ねば良いのだ」と言っています。その覚悟で信念を貫いた、と言う自信があったのでしょう。

ソ連の共産主義があんな形で崩壊するのを見たら、尾崎秀美はなんと言ったのだろうか、と興味が湧きます。これは尾崎に留まらず、共産主義革命を信奉してきた日本の共産主義者全員に聞いてみたいところです。

こうして見てくると、戦時中、当時のマスコミが朝日新聞を中心に戦争を煽り立てていた理由も頷けますし（最近発刊された「朝日新聞の戦争責任」と言う本に、当時の朝日の記事の数々が紹介され、その煽り方の凄まじさが描かれています）、若しかしたら

戦後も、朝日新聞は　のテーゼに従って、敗戦革命に持つて行くための後押しをして来たのかも知れませんが。朝日新聞のOBが書いた「朝日新聞　日本型組織の崩壊」と言う本を読んでみましたが、当時の朝日の社内には共産黨員になるのを一種のステータス視するような雰囲気があった、と言います。こうした目で昨今の朝日新聞の姿勢を見てみると、国益というものを全く考えない、また日本の国を愛することを知らない朝日の姿勢が頷けるような気がします。朝日新聞は未だに偉大な大先輩尾崎秀美の伝統を引き継いでいるのではないか、と言ったら言い過ぎでしょうか。

(平成二十七年九月) 79

### 「明治維新という過ち」

私が明治維新に興味を持ったのは、司馬遼太郎氏の「竜馬がゆく」を読んだのが切っ掛けでした。その頃、偶々子母沢寛氏の「勝海舟」を読んだこともこの切っ掛けを後押ししてくれたのではないかと思います。何だかスッカリかぶれてしまって、明治維新と言う名前のついた本を片っ端から乱読していた時期があったように思います。最後はマ

ルクス経済系の学者が書いた、左の立場から見た幕末・維新史を書いた経済学の本に手を出しましたが、これは流石に面白くなくて、明治維新熱が冷めたように記憶していません。それ以来、私は明治維新を、日本人が一種の誇りにすべき近代化に向けた立派な革命だった、と信じて来ました。フランス革命や英国の無血革命みたいに、その当時の王様の一族の首を切って殺してしまうような非道なことをしないで、世の中を変えた。確かに戊辰戦争では多くの血は流れたけれど、ロシア革命や中国の共産革命みたいに、何百万とも何千万とも言われる人たちが粛清に遭って殺されるなんてこともありませんでした。こんな革命を成し遂げた当時の日本人のことを誇りに思っても良いのではないだろうか。

新聞の広告で題記の書名の本を発見し、これは是非読んでみようと思って、アマゾンで求めました。左系の人が書いた批判のための批判ではないか、と思いつながら読み始めたのですが、逆にむしろ右側から見た批判で、仲々興味のある内容でしたので、ご紹介することにしました。



著者の伊藤伊織と言う人は昭和二十一年生まれで大阪外語大の卒業と言いますから、司馬遼太郎氏の後輩に当たります。この人も我々同様に、司馬さんを「知の巨人」の先輩として大いに尊敬しているのですが、司馬さんが明治維新至上主義に陥っているところだけは許せない、と言う調子で著述が始まります。この人は決して左寄りの人ではなく、例えば七〇年安保動乱の際には、学生の一人として全共闘とか民青がやった強烈なデモに対抗して戦った経験を持つているとのこと。

我々が理解し、一般的になっている明治維新の解釈は、維新のお陰で外国列強による植民地化を防ぎ、日本を近代化することが出来た、と言うもので、この見方は司馬さんの一連の小説で強化され常識化されてしまっていますが、伊藤氏によれば、これは全く間違った解釈だ、と言うのです。この見方は、官軍として勝った側の長州・薩摩が作ったもので、明治以来この見方に立った歴史教育がなされて来て、こう言った考え方が押し付けられて来たのだ、と言います。

何時だったか書いたことがあります、確かに司馬さんは倒幕派臆員です。子母沢寛

が倒される幕府側に温かい目を向けているのに対して、司馬さんの目は倒幕派に向けられています。人斬り以蔵と呼ばれて恐ろしい人殺しの存在だった岡田以蔵なんかに関する記述も暖かいし、テロ集団であったはずの志士と称する人たちの側に立った見方をしています。

これに反し、この伊藤氏の見方は、維新の志士なるものは完全にテロ集団だった、と断じていて、悪の元凶は吉田松陰と言つことになります。松陰は当時の長州でも困り者のテロのアジテーターで、何度も捕らえられたり牢に入れられたりしている。結局幕府82の手で処刑されるのですが、これも長州の意向でなされたものだ、と解釈しています。このテロ集団の中でも、長州の連中のやり方が一番酷かった、とのことで、その理由は彼らが武士ではなかったからだ、と言います。武士であっても極く下級の武士で、古来の武士としての心構えとか美しさを持ち合わせた人たちではなかった。それが証拠に、と言つことで、この連中が京都を中心にやっていたテロ行為の残酷さや醜さを取り上げています。武士の心を持った人ならとても出来ないことをやっていた、と言つのです。

天皇を担ぎ出し、偽の勅許を乱発するなど、旧来の日本人には考えられないような卑劣な行為で、幕府を崩壊に追い込んだ。無理やりに武力倒幕に持ち込んだのは西郷隆盛だった、と言つことになりますし、戊辰戦争で見せた長州の戦い方の残酷さ、醜さをこれでもか、これでもか、と例を挙げて強調しています。幕軍の最後の抵抗として、会津の鶴ヶ丘城の戦いが有名ですが、その直前の二本松藩の抵抗の凄まじさと、それを潰して行った長州軍の非道な残酷さが語られているし、中でも長州の奇兵隊の隊長の一人、世羅修造の例を挙げて、浮浪人上がりで武士の心なんて全く持ち合わせていなかった修造の行動の醜さを、口を極めて罵っています。修造はその言動の酷さから二本松藩で処刑されるのですが、これが二本松藩を徹底的に痛めつける原因になっていたと断じ、二本松藩に対する同情が書き連ねられています。会津藩が負けて、青森の北部の斗南地方に追いやられ、酷い目に遭わされたのも長州の所為だ、と言つことになります。

どうやら戊辰戦争当時の東北地方での状況をかなり詳しく調べたことがあったよう  
で、これが長州憎しを増大させているのでしょう。この人は幼少時を彦根で送つたこと

があつたそうですので、桜田門外の変で、自分の郷里の彦根藩の殿様である井伊直弼を惨殺した勤王の志士と称する連中に対する憎しみも残っているのではないか、とすら思いました。

更に、明治に入つてからの廃仏毀釈で仏教を弾圧し、神道を推し進めたのも、勝つて官軍になつた長州が主導して薩長の連中がやったことで、外来の宗教である仏教を廃し、日本古来の神道を浸透させようとした。古来日本人は日本古来の神道と、外来宗教の仏教を上手に共存させていて、神道のヘッドである天皇を権力の対象とせず、むしろ象徴として権威の対象にしていたが、神道を推し進め過ぎたので天皇が軍部に利用される形になり、大東亜戦争を引き起こしてしまったのだ、と言っています。長州の下級武士出身の山県有朋を首魁とする陸軍が、吉田松陰が指導した海外への進出の方針を忠実に守つて推進し、それがために大東亜戦争を引き起こして日本を破滅の危機に追いやつたのだ、と言っているのです。

明治維新と言つ呼び方自身も、最初はなかった。昭和に入つて、極右の勢力が、天皇

親政を押し進めるために、明治への回帰を主張し始め、昭和維新を断行しようとの動きを始めますが、明治維新と言言葉はこの時に作られ、一般化したものだと言っています。

幕末の幕府の官には優秀な人が多かった。幕末の外交もこれらの武士の精神を持った優秀な官僚が担当していて、外国人にも一目置かれるような立派な交渉をしていた。無理に維新という革命を起こさなくても、江戸時代の穏やかな社会や武士の精神を残したままで上手に近代化を進めたに違いない、と主張しています。

この本の副題は「日本を滅ぼした吉田松陰と長州テロリスト」となっていますがこの副題がこの本の内容を一言で言い表しているな、と思いました。

私のお気に入りの坂本龍馬には大きくは触れられていませんが、龍馬が薩摩と長州を結びつけ、倒幕を大きく進めることになったのは事実だが、それはグラバーの調達する武器を売りつけるための方便だった、と言う見方をしているようです。これでは私のご鼻根の坂本龍馬は、死の商人の片棒担ぎをした単なる悪徳商人の走り使いと言つことに

なってしまう。私は、龍馬がそんなつまらない役目を担っていたとは思いたくないのです。この本一冊程度では、私の龍馬臍履は収まりそうにありません。

(平成二十七年十一月)

### 「チャイナ二〇四九」

日経の書評で勧めていたので、求めてみましたが、私が本誌に度々書いている中国観を後押ししてくれていて、仲々面白かったので、ご紹介します。

著者のマイケル・ヒルズベリーと言う人は長いことアメリカのCIAで働いた人で、むしろ「パンダハガー」だったそうです。パンダハガーとは、パンダをハグして可愛がる人、と言う意味で、中国臍履と言う意味になります。日本の外務省で言うチャイナ・スクールに類する人なのでしょう。中国がパンダを贈る(貸す?)ことによって、誼(よしみ)を深めようとする、所謂パンダ外交が世界中に浸透していることを窺わせます。長年の中国との付き合いで自分が認識し、やって来たことが全て相手の騙しに乗ってや

らされたことで、全く間違いであったことを知った、と云うことで、この本は中国の危険度について論じられています。

中国は春秋時代の昔から何千年に亘って、「覇」を求めて来た国である。長い間、シナ国内で覇を争ってきたが、一八四二年のアヘン戦争で外国に蹂躪されることになり、覇を外国に奪われてしまった。これを取り戻したのが毛沢東で、アヘン戦争の一〇〇年後の一九四九年の共産革命だったと云う解釈です。ですから中国共産党がやるつもりとしているのは、アヘン戦争以前の中国に戻して、覇を取り返すのが目的だと言います。覇権主義そのものと言つことになりませんが、これは新たに覇権を求めるのではなくて、覇権を取り戻すと言つことなのです。共産革命から一〇〇年を掛けて覇権を取り戻し、二〇四九年までに世界のリーダーの地位をアメリカから奪取しよう、と云うのが中国の最終目的だと言います。この本の原題は「The Hundred-Year Marathon」ですが、正真正正の動きを表しています。中国はコトあるごとに、覇権を求めてはいない、と言いますが、これは真つ赤な嘘ということになります。この本の主題は、中国の国策と言つか戦略は、

『欺瞞』のひと言に尽きる」と言っているようです。

こうした長い時間を掛けての戦略は、私が二〇二二年二月に本誌に投稿した、「日本解放第二期工作要綱」の内容そのものですが、これは玉川夫人に頂戴した同要綱のコピーをもとにして書いたものです。玉川夫人が如何に先を見て日本の将来を憂えておられたか、が分かります。

面白いのが、多くの部分がシナの紀元前八世紀から四世紀にかけての春秋戦国時代や紀元三世紀の三国志の時代との対比で語られていることです。春秋戦国時代の昔から、中国の豪族たちは覇を求めて争って来ましたが、その戦略は戦争そのものより、策略が基本になっていた、と言つのです。自分が弱いと思つたら、チャンスが来るまで自分の野望を隠し、自分が覇を求めていると言つことを決して悟られないようにする欺瞞。自分の力を使わないで、他の人の力を利用して自分に利する方向に持って行くこととする無為と呼ばれる手法など、狡猾な知恵で他の人を操作するのが賢い戦略とされて来ています。孫子の兵法や、三国志の諸葛孔明の手法を例に挙げながら語ってくれるので、分か



り易く説得力があります。

敵を欺くのが戦争だ、と言うことになります。三国志は騙し合いの歴史を書いたものだ、なんて記述がありますが、三国志がお好きな大野木兄はこれを聞いてどんな印象を持たれるだろうか。有名な赤壁の戦いなんかは、その最たるもので、諸葛孔明が如何に巧みに敵を欺き、敵の力を利用して戦いに勝って行ったか、がかなり詳しく語られています。

筆者は中国語にも堪能なので、孫子などに記された格言の類も出てきます。鄧小平の言葉として有名になった「韜光養晦」と言う言葉も、自分に力が付くまでの時間稼ぎのための、欺瞞の言葉だ、と解釈しています。我々が理解している解釈と違う解釈も出て来ます。「鼎の軽重を問う」と言う言葉を我々は、その人の実力に疑問を持つ、と言う意味で使っていますが、この著者は、元々の意味に戻って、「覇を狙おうとする意図は隠しておくべきなのに、これを表に出してしまう愚かなこと」と言った具合に解釈しています。

毛沢東が中国統一の内戦をしている間、座右の書として手離さず持つて歩いていたのが、「資治通鑑」と言う本だったそうですが、この本は紀元前五世紀から紀元十世紀ごろまでの史実を編纂したもので、戦国時代の兵法を語り、為政者の鑑（かがみ）とするに足る通史なのだそう、この辺にも中国の長い歴史が感じられます。

こうした解釈の上に立つて、現代の中国の動きを見ています。例えば、一九七四年の電撃的なニクソン訪中は、アメリカ政府の思い切った決断だった、と理解されている。アメリカはソ連の脅威に対抗するため、中国を強力にしようとした、と解釈されている。90  
が、これは実は中国側から上手に仕掛けられたもので、他人の力を利用して自分を利する「無為」の手法だった、と言うことを、当時の外交の動きや例を挙げて説明してくれます。ニクソンとキッシンジャーは「弱い中国を助けてやれば、中国はやがて民主的で平和的な大国になる。ソ連との対抗上好都合だ」と言う幻想の下に思い切った外交方針の転換をしたが、「力を蓄えて、世界支配を目論んでいる」中国の意図を察知できなかった。中国得意の欺瞞の戦略に見事に乗せられたのだ、と述べています。著者はこの当

時、CIAで中国関連の情報の収集役として働いていたが、自分自身がこの欺瞞に気付かず、アメリカを間違った方向に導いてしまった、と言う反省も籠められています。

「韜光養晦」についても、これは鄧小平が殊更に、「か弱い嘆願者」の役を演じてみせて、アメリカを騙したものだ、と解釈しています。このお陰でフォード大統領・カーター大統領の時代に西欧の科学的専門知識が大量に中国に流出しました。軍事協力はレーガン大統領の時代にも続き、ピークに達して対等のパートナーと目されるようになって、と言われていきます。この辺はソ連を崩壊させることを意図したもので、この目的は見事に達成されましたが、その代わり、中国の思惑に乗って、中国を急速に強国・大国にしてしまった。この罪は問われるべきではないでしょうか。

その後も、アメリカは陰に陽に中国への援助を続けている、と言われます。オバマ大統領の弱腰外交のお陰で、これらが断ち切られていない。体制を崩す一番効果的な手法は国内の反対勢力を強くすることだ。援助を止めて、中国国内の民主主義勢力を支援すべきだ、と主張しています。

この本は極く最近の二〇一五年に上梓されているので、日本の昨今の対中国対策にも触れています。尖閣諸島や南沙諸島への侵略の意図にも触れられていますし、安倍首相の強い姿勢は高く評価されているようです。

中国は今や軍事よりも経済で世界を席卷しようとする意図に変わりつつある、と断言していますが、その手段として一番力を入れているのが、サイバーの世界だと言っています。軍事的にも経済的にも、アメリカの最大の弱点がサイバーの世界。ここを攻撃されたら、ひとたまりもない。中国共産党は一三億の国民の情報を統制する仕組みを作り上げています。この辺はジョージ・オーウエルが一九四九年に書いて未来小説の魁として有名な「一九八四年」に描かれた、ビッグブラザーが管理し、支配する世の中を思い出させます。この小説の主人公は歴史を改ざんする役所に勤めていたと記憶しますが、この辺も今の中国を想定したのではないかとすら思われます。サイバー攻撃を推し進めるため、中国共産党は宇宙衛星を打ち落とす実験、ハッカーの養成など、国の施策として進めて来ている、と言われます。

この著書には幾つかの方策が提言されていますが、中国の隠された意図に早く気が付いて、直ぐにも手を打つべきだ、と主張しています。と言うことは、今直ぐに手を打たないと、このマラソンを成功させてしまうよ、と言っているのだと思います。

後書きの形で、森本敏氏が解説を書いています。私は以前からこの人の防衛政策に対する考え方、安全保障に対する哲学や洞察力が好きで、防衛大臣をやって貰ったら良いのに、と思っていました。民主党政権で担ぎ出されて防衛大臣になりましたが、あの政権では何も出来なかつたでしょう。もう一度、今度は自民党政権で防衛大臣をやって貰えないかな、と思っっています。この解説の中で、森本氏は、これまでの中国はこの国家戦略の野心を隠し続けて来たが、ここへ来てそれを隠さなくなつて来ている、と言っています。私は二十六年七月に本誌に投稿した、「盗人猛々しい国」の中で、「習近平が総書記になってからの中国は大変に危険な国になっている。それは『総書記が代わつたから』と言うよりも、『そう言う時期に至つたからだ』と言つた方が正しいのではないかと書きました。専門家の森本氏にこれを裏付けて貰つたような気がしています。

同じ投稿の中で、「中国は恥を知らない嘘つきの国である」とも書きました。私の原稿を読み返してみると、この本に記された正にそのことを書いていたんだな、と思わされます。

中国人観光客による爆買いが大きな話題になっていますが、これだつて嘘付きの国の実態を示しているんだと思います。自分の国で作ったものが信用できない。自分の国内で、外国の製品だと称して売られているものでも偽物が多くて、若しかしたら自分の国で作られたものかも知れないので信用が出来ない。だから日本まで直接出掛けて来て、大量の買い物をする。買い物が多くは自分のためのものではなくて、他人に売って旅費を回収するためのものだそうです。国民が自分の国の人々を信用出来ないような、可哀想な国だと思います。(尤も、爆買いなんて現象も、中国政府がひと言規制を掛ければ、直ぐに収まってしまう性質のものではないだろうか。日本人もこんな一時的な現象に浮かれているようではダメだな、と思っています)

こんな国の魔手が昨今急速に日本にも伸びて来ていることが歴然としています。間違

つてもこんな国の支配下に置かれるような、そんな事態にはしてはならないと思つています。

中国の経済統計が大々的に発表されて、成長率が凄いと、最近はそれが鈍つてきている、とか言われていますが、これらもどこまで信用できるのか分かりません。発表される統計が正しいのか正しくないのか、分からないのです。これも嘘付きの国だから、と言つことになるのでしょう。多くの経済学者が、近いうちに中国経済は崩壊するだろう、なんて言っていますが、若しそんな事態になつても、あの国はどんな手段を講じて95も、それが周辺の他の国にどんなに大きな迷惑を掛けることになつても、自分の国の利益を守ろうとするだろう、と思います。迷惑の対象が我が国になることだけは何としても避けねばなりません。自分の国を自分で守る手立てを講じておかねばならない、この思いを新たにしています。

私が好きな「武士の心」には色々な要素がありますが、私が大事にしたいと思つている部分は、恥を知る気持ちと他人のために死ねる滅私の気持ち、それと金銭よりも道德

を上に見る気持ち、ですが、あの人たちにはこれらの心が全く感じられない。私が昔からシナ人を好きになれないのは、これが一番の理由なのでしょう。

(平成二十八年二月)

### 三橋貴明

ある人の勧めで、このところ三橋貴明と言つ若手の経済評論家に少し嵌つて、何冊か読んでいます。著者は四十代後半で、正に書き盛り、という感じ。あまりに次々と出して来るので、追いつくのが大変です。テーマが多岐に亘っていて、夫々の分野で凄まじい勉強をしているんだろうとは思いますが、あまりに発刊のスピードが早いので、何だか書き飛ばしているんじゃないか、と感じることがあります。そう言えば、同じことを繰り返しグルグルとひねくり回している印象もあつて、失礼ながら字数稼ぎのために殊更沢山書いているのではないか、と思うこともありますし、かなり独善的で、「ホンマカイナ？」と思わされる部分もありますが、近著の農協改革について論じた、「亡国の



農協改革」が仲々読ませたのでご紹介します。

この人は安倍政権に対して、色んな方面から鋭い批判を加えているのですが、それが左サイドからの批判のための批判ではなくて、日本の国が好きで、国を良くするにはどうしたら良いか、と言う視点で書かれているのが好もしくて読まされてしまうのです。

日本国民が安全に、豊かに、安定的に暮らして行くための安全保障には、国を外国から防衛する防衛安全保障ばかりではなく、大規模自然災害から国民を守る防災安全保障、犯罪から守る防犯安全保障、飢えから守る食料安全保障、安定的にエネルギーを供給するエネルギー安全保障、高品質で安価な医療サービスを提供する医療安全保障、非常時でも物資の流通を確保する物流安全保障、などが挙げられています。全農の組織をなくそうとする農協の改革は食の安全を脅かす亡国の改革だ、と主張しています。

まず、日本の農家ほど「保護されていない」農業は世界中に類例を見ない、と言う事実（らしいのです）は私にとって新しい認識でした。私のこれまでの認識は、強大な農協の圧力で、農家には米を始めとして膨大な政府補助が行われている、と言うことでし

た。だから農協の改革は必要なんだ、と信じて来たのですが、どうやらそうではないらしいのです。例えば、農業所得に占める政府支出の比較をみると、フランス、イギリス、スイスなどは九〇%を超えています。アメリカなんて、あれだけ広い土地を持ち、強力な農業を持っている国でも、小麦に対してすら六一%、大豆やトウモロコシなどに対しては四〇%台の政府支出がなされています。こうして世界の各国は自国の食の安全保障を確保していると言います。これに対して日本の政府支出の割合は、一五・六%なんだそうで、食料安全保障に対する感覚の差が感じられます。

TPPで関税の壁を低くして農産品の輸入を増やし、農家は自分の工夫と努力で輸出することを考えて経営を成り立たせろ、と言われるが、とんでもない話。特異の分野で工夫して輸出を伸ばすことは可能かも知れないが、国民が生きて行くための穀物やタンパク源確保のための飼料はどうするのか。平時であれば輸入に頼ることが出来るけれど、一旦緩急があった場合は、輸入を止められたら国民の食の安全が確保出来なくなるではないか。農業の主要品目には国の援助を厚くして、食の安全保障を確保すべきだ。まし

てや国土が狭くて、平地が少なく、只でさえ弱体な日本の農業は他の恵まれた国よりも多くの補償を受けるのが当然だ、と言う議論は聞かせました。

農業を商業ベースでやって良いのか、と言う議論も聞かせました。株式会社を参入させて儲かる農業にしよう、とする方向に進めているが、株主を重視する株式会社が商業ベースで農業を始めても、儲からなければ撤退して行く結果になる。これでは食料の安全保障が守れないではないか。農協は協同組合だから、儲けを目的としていない。農協の体制は食の安全保障の維持を可能にする体制ではないか、と言うのです。例えば、アメリカを中心に遺伝子を操作した農作物が出回っているが、これらが将来の人間に与える影響については、まだ良く分かっていない。これらの農作物の国内への流入を水際で抵抗しているのも農協だ、と言っています。これも利益を求める組織では出来ないことでしょう。私が信奉する故宇沢弘文教授が、「経済のある部分には自由競争の原理で動かしてはならない分野がある。利益に関係のない専門家の集団、コモンズに任せる部分が必要だ」と言っています。農協もある種この分野を担っているのではないか、と思

わされました。

農協の圧力で農家が、農業機械や肥料など高い農業用資材を買わされている、と言う見方もあるが、そんなことはない、と言います。資材の購入は市場にも開放されているので、農家は安い農業用資材をどこで買っても良いのだ、と言っていますが、この辺は表面的な見方で、農協の無言の圧力については無視されているのではないか、と思います。

下手をすると農協の提灯持ちをしている、と見られなくもありませんが、主張されていることはまともで、納得が行きます。もう少し付き合ってみようと思っています。

(平成二十八年二月)

【「亡国の農協改革」、「二〇一五年暴走する世界経済と日本の命運」、「黄金の拘束衣を着た首相」、「技術革命で世界最強となる日本」、「原発ゼロの真実」、「繁栄の絶対法則」、「亡国の新帝国主義」、「いよいよ韓国経済が崩壊するこれだけの理由」、「これからヤバイ世界経済」、「中国崩壊後の世界」】

## 「低欲望社会」 大前研一

久し振りに大前研一を読んでみました。ご存知の通り大前研一はマツキンゼーを日本に紹介したグループの一人で、経営コンサルタントに留まらず、アドバイザーとして持論を世界中に発信している人ですが、相変わらず独自と言つか独善的な私見を強烈に打ち出していました。私は、何だか彼の所謂「上から目線」の態度が気に食わず、あまり読んだことはなかったのですが、「低欲望」と言つ題名なので、際限なく欲望を追求するのではなく、適度のところで我慢しよう、と言つ、私の好きな「足るを知る」の精神を説いているのかな、と思つて読んでみました。際限なく物欲や便利さを追求するのはなくて、程々のところで満足することが尊重されるような社会が理想の社会だ、と言つようなことが書かれているのではないかと期待して読み始めたのですが、期待に背いて、逆にむしろ低欲望を打破するにはどうすれば良いか、に重きが置かれていました。ご紹介旁々、私の読み方をご披露してみます。

日本の富の配分には格差が少なく、富の再配分が世界中で最も進んでいる国だ、と言

うところから話が始まります。所得上位一〇%の人たちの資産の、国民の総資産に対する割合を比較すると、日本はベルギーと並んで五〇%を切って四七、八%に収まっており、国際的には最も低い数字になっています。高い方ではロシアが一番で八五%にも達し、アメリカも七五%でインドなんかもそれに近い数字になっています。中国や韓国が六〇%台、英国、オランダ、フランスなどの欧州の各国は五〇%台に収まっています。ところが最近の日本の傾向は、低所得層と高所得層への二極化が進んでいます。私が理想の社会と考えている、一億総中流の姿から離れつつあると言っことは、

この著書では、最近の一番の問題は、日本人がお金を使わなくなっていることにある、との見方を中心に議論を展開しています。これが「低欲望社会」と呼ばれる現象です。個人の金融資産が一六〇兆円に達し、企業の内部留保が三二〇兆円に達している。若い人がモノに対する所有欲を失ってお金を使わなくなっている上に少子化が急速に進んでいる。企業は株主への配当を守るために、積極的な投資を控えている。こうした現象を打破しなければ、日本は沈んでいくばかりだ。安倍さんが進めているアベノミクス

にはこれらに対する処方箋が全く示されていない、と言う批判が連ねられています。

個人資産を吸い上げる、と言う主張に繋がるのですが、特に六十歳以上の人たちの資産をどうやって吸い上げるのか、が有力な経済再生の手法になります。税金で吸い上げる、と言う主張には繋がっていないことには賛意を表したいと思いますが、これらの資産を観光や不動産に向けさせるための施策を打つべきだ、と言う主張には抵抗を感じざるを得ませんでした。私は大分前から感じているのですが、老人が自分の資産を出来るだけ使わないようにしているのは、やはり自分の更なる老後への心配だと思います。財産を残すほどの余裕はないけれど、今後何歳まで生きるか分からないので、どの程度の余裕を残しておけば良いのか分からない、と言うのが貯め込みの理由ではないだろうか。どこかの高齢者のところには有り余る資産が喰っているのかも知れないけれど、年金に頼り、乏しい蓄えを取り崩しながら生きている私みたいな貧乏なお年寄りが多いと思うのです。私自身、「自分があと何年で死ぬ、と言うことが分かっていたら、乏しい蓄えの取り崩し方のペースが計算出来て好都合なのに」と屢々思います。だとすれば、老後

は国が面倒を見て上げるから、心配しないでタツプリ使って下さい、と言って上げる方が有効な施策なのではないだろうか。このままではお金持ちが海外に逃げてしまつよ、とか、不動産に対する税制を変えて、お金持ちが不動産投資をしなくなるようにすべきだ、と言っているのは、やはり自分を含めた超お金持ちのことばかり考えているからではないだろうか。こうした超お金持への対策も必要でしょうが、何か目線が違ふ感じがしました。過酷な累進課税は止めるべきだ、とか、相続税は廃止すべきだ、なんて主張をしているのも、同じ流れの中からの主張に見えて仕方がありません。累進課税を重くすると人々の利潤に対する動機のマインドを少なくする、つまり儲けようとする意欲を削ぐ、なんて言っているところにも、自らが成功者になり、お金持ちになつたベンチャ―を優遇しろと言つ姿勢が感じられます。

教育改革についても持論をお持ちですが、英才教育を進めろ、と主張しています。日教組が進めた平等教育については、私も大いに疑問に感じていますが、やはり教育は人間としての基礎教育が重んぜられるのが本当ではないか、と思います。道徳教育や自分



の国を愛する教育は勿論のこと、世に出て恥ずかしくないような教養を身につけることが教育の一番の目的ではないでしょうか。お金だけが大切なものではない、と言う教育も含められないものでしょうか。確かに世の中を引っ張っていく天才と呼ばれる人や、そこまで行かなくても、自分で何かを切り開いて行く人たちは必要で、こうした面を伸ばす教育も必要だとは思いますが、それだけの能力を持っている人の数は多くないと思うのです。自分でお金儲けをする能力を持っている人が優遇され、能力がなければ幸せになれない、と言う事ではなくて、コツコツと真面目に働く人が大事にされ、それなりに報いられるような社会であるべきではないだろうか。さしたる能力もなく、コツコツと実直な（？）サラリーマンとして生きて来た自分を省みて、そうした思いを強くしています。彼の主張には、そうした普通の人の目線が感じられない。「勝ち組」と「負け組」の存在を容認しています。やはり能力のある成功者、所謂「勝ち組」の目線でしか物事を判断できない人ではないか、と思いました。

少子化を抑えるには戸籍をなくせ、と言う主張も昔からされているようです。戸籍法

があるから結婚が窮屈なものになり、少子化に通じる。だから戸籍法なんて無くしてしまえば良い、との主張ですが、これについても本当かな、と思いますし、日本の経済を維持するためには移民受け入れを促進しろ、と言う主張にも疑問を感じます。農業改革をして農業を企業化し、オランダのように得意の農産物に特化して国際的な競争力を付けるような施策を取れ、と言う考えには頷けるものがありました。先号で書いた、食の安全保障を考えると、そうとばかりは言っていられないようです。

何れにしても、これらの主張は二十年、二十五年前から繰り返し主張して来たことだ、とのこと、これが全く受け入れられなかったことについては、相当強い口調で不満を述べています。これも自分の先見性を認めないのは認めない方が馬鹿だ、と言っているように聞こえて、相変わらず上から目線でモノを言っているような気がしました。コンサルタントとかアドバイザーと言う人種は、こんな言い方をしないと商売にならないのかも知れませんか。

(平成二十七年七月)

## 「天才」

石原慎太郎氏は、田中角栄の金権主義を批判する立場を貫き、角栄氏の天敵だったのではないか、と思っていました。新聞広告で、慎太郎氏がこの題名で田中角栄の伝記を書いた、と知って、早速買い求め、興味津々で読んでみました。

流石に小説家の書く伝記です。語り口が一人称で、自分が角栄氏になって語る形の伝記になっていました。語り口は面白いのですが、生意気なようですが、伝記としての内容はイマイチの感じがしました。私も田中角栄には興味を持っていて、色々読んで来ていますが、私が読んで知っている程度を、あまり超えていない内容のような気がしました。巻末の参考文献を見ても、目新しいものは見当たりませんでした。私は、角栄氏を最後まで追い掛けた番記者として知られる早野透氏が書いた「田中角栄」と言う中公新書版の伝記を、一番迫力を感じながら読んだ覚えがあるので、これが参考文献に含まれていなかったことにも不満を感じたのでしょう。

時代が少しずれるとは言え、同じ時期に政治の世界にいたし、角栄氏の抵抗勢力の旗

頭であつた慎太郎氏ならではの裏話を期待していたのですが、その分が外れでした。どうやら慎太郎氏が角栄氏と実際に直接対峙したのは、ホンの数回だったらしい。若くして最高権力者となつた角栄氏にとって、当時の慎太郎氏はまだまだチンピラの域を出なかつたのでしよう。

敵、とは言いつつ、慎太郎氏が角栄氏を高く評価しているのは私にとって嬉しいことでした。この本を書く事を勧めてくれた学者に、「貴方は、実は田中角栄という人物が好きなのではないですか」と聞かれて、これを肯定しています。「敗戦の後に国家にとつての第二の青春とも言える高度成長を経て、今私たちは他国に比べればかなり高度な繁栄と、それが醸し出す新規の文化文明を享受しているが、その要因の多くは国家の歴史の中でも未曾有のものに違いない。そしてその多くの要因を、他ならぬ田中角栄という政治家が造成したことは間違いない」と言っています。

例として、角栄氏は若い平の議員の頃から四〇にも登る議員立法を作つて来ています。これには「六法全書」を丸暗記するほどの勉強がベースになっています。こんな議員は

他にはないそうです。若くして郵政大臣になった時、電波法の制限を取り払って、今のテレビの隆盛を生み出すきっかけを作っていますし、有名な列島改造論に沿って、高速道路の整備や新幹線の延長、地方空港の整備を促進したのも角栄氏だった、と言っています。中国との国交回復に力を尽くしたことで知られていますが、結果としてその後の自民党の路線がかなり中国寄りになり、隣国と仲良くするのは良いけれど、小沢一郎の一派みたいに中国に隷属的な日本人を作ってしまったことは、中国嫌いの私にとつてあまり嬉しいことではありません。エネルギー資源に乏しい日本の自活のために、原動力の活用を推進したのも彼の先見性だった、と言います。アメリカ傘下のメジャーオイルに頼らない資源外交を進めようとした。それがアメリカの逆鱗に触れ、所謂虎の尾を踏んでしまって、アメリカの圧力と言つか、策謀による不法で不思議な裁判のお陰で、政治生命を抹殺されてしまったのだ、と言つ解釈をしてくれています。そして、「感性の所産である芸術はしばしば天才を生み出すが、政治という感性の不毛な世界で、彼のような正に未曾有の業績を生み出した人物は、少なくとも戦後には他に見られはしな

い」とまで高く評価しています。

最終学歴が小学校の角栄氏が、金の力に物を言わせてのし上がって行った過程は表面的には記され（語られ）ているものの、その人間性を含めて、もう少し具体的にその裏側を語って貰いたかった、と思いました。

半分近くが、ロッキード裁判以降の話になりますが、角栄氏としては、法の場に立てば、正当な評価をして貰えるだろう、司法は適切な裁判と判断を下してくれるに違いない、と思い込んでいた節があります。彼にとって不幸だったのは、後任の首相が三木武夫になったこと。不安定な自分の政権を維持するために大衆受けのする角栄攻撃を利用したのだ、と言う解釈です。さらに法務大臣が同郷の稲葉修造になり、調子に乗って騒ぎ立てたのも不幸だった、と言っています。こうして、角栄氏が期待した公正な裁判はどこかへ行ってしまう。

私は当時から、何かをやるう、と言う「DO」の姿勢を持った人、と言う意味で角栄鼻頂だったので、皆さんの鬻ぎを買ったこともありましたが、慎太郎氏も似たような見

方をしてくれていることを知って、我が意を得たり、の思いがしています。目的遂行のために金は使ったけれど、それは国を愛するが故のことであって、決して私欲のために使ったのではない、と言ってくれています。

そう言えば、角栄氏が総理大臣になった時、父と話したことがあります。父が出張で上京して来ていて、一緒に出勤する途中のどこかの駅のホームでのことでしたが、父が、「今度の首相には期待が出来る」と言ったのに対して、私は、「悪いこともするかも知れないけれど、やることはやる人でしょうね」と答えました。ゴリゴリの自民党支持者だった父は、「悪いことはしないだろう」と言ったのですが、結果はご覧の通りでした。父がその結果について、どんな感想を持っていたのか、聞いてみたかったな、と思います。

慎太郎氏は今、角栄氏が国のリーダーとして残っていたら、日本もこんな情けない国になってはいなかったのではないか、とも言ってくれていて、歴史の「若し」を期待したいような気持ちです。

その後、この本に対する酷評を玉川兄に紹介して貰って読みました。内容がない、内容が薄い、と言う感想は私と同じで、読む人が読めば誰が読んでも感じることは同じなんだな、と思いました。それとこの酷評には、石原ファミリーに対する批判が書き連ねられていました。甘利氏が退任した後、経済再生担当大臣に就任した慎太郎氏の長男の伸晃氏は親の七光りで自民党の要職を務めている、と言うのです。確かに伸晃は小物、自民党の幹事長や大臣を勤められるようなタマではないと思っています。ソロソロ還暦を迎える筈ですが、何時まで経っても軽くて青さが抜けない。これだけ要職を勤めれば自ずから人格が形成されて来て、重さが出て来ても良いのではないか、と言う気がしますが、これが限度ではないだろうか。それでもこつした要職が回って来るのは、やはり親の七光りのお陰なんではないか。慎太郎先輩も親ばかりで焼きが回ったのかも知れませんが。

(平成二十八年二月)



## 「服従」

日経の書評で興味をそそられて読んでみました。面白いテーマなので、ご紹介してみましよう。

二〇二二年にフランスがイスラム政権になる、と言う近未来小説です。フランスの作家が書いたもので、一人称で書かれています。私にはソルボンヌ大学の中堅の教授。気持ちの良い教授生活を送っていましたが、イスラムの政権になって、教授の職を追われ、結局はイスラム教に改宗して教授に戻るまでのお話です。

まず政権交代への道のりが面白い。何だかありそうな話なのです。現在フランスではル・ペン女史が主導する極右の国民戦線が力を付け始めていますが、二〇二二年の大統領選挙でこのマリー・ル・ペン女史が勝ちそうになります。穏健イスラム教の政党も票を伸ばして来ていますが、国民戦線の独裁に危機感を持った野党が結束してイスラム政党を支持することになります。結局、野党連合が勝って、イスラム教徒の大統領が出現するのです。

このイスラム教徒の大統領が仲々優秀な大統領で、上手な政治運営をするのですが、教育については完全にイスラム教主導となり、大学の教授もイスラム教徒に取って代わられ、また女性は完全に排除される、と言つことになります。その辺の経緯も面白いのですが、私にとって興味深かつた点、二つを紹介してみます。

イスラム教徒は正妻を四人まで持つことが出来ますが、これは自然界に存在する極く当たり前の現象だ、と言つのです。自然の世界では、雌を巡つての雄同士の戦いが激しく行われます。雌も強い雄を求めて、強い子孫を残そうとします。人間の世界でも強い子孫を残そうとするのが、複数の正妻を持つ制度だ、と言つのです。つまり、複数の奥さんを持てるのは、経済的にも肉体的にも強い男だ、という訳。大学の教授なんて言うものは、頭が良くて経済的にも恵まれている。人間の世界では強者に属するから、複数の女性に子供を作らせて、強い子孫を残す資格があるのだ、と言つ理屈になります。

我々が性に興味を持ち始めていた頃、話題になっていた「ファニー・ヒル」とか「O嬢の物語」と言つた本を手にとつた記憶があります。この「O嬢の物語」がこの本の題

名の由来になっているのです。当時はそんな意識を持って読んだ記憶はありませんが、どうやらこの物語は、女性が男性に服従して行くことがテーマだったらしく、「服従」と言うこの本の題名はここに由来する、とされています。単純な読み方をすれば、インテリの大学教授が、結局は権力に負けてイスラム教徒に服従して行く過程を語った物語、と言うことになりそうです。

（平成二十八年二月）

### 「日本経済の質はなぜ世界最高なのか」

私はお金の力で金儲けする輩が大嫌いで、そのことを本誌にも何度も書いています。お金よりも道徳の方を重んじる、「武士の心」が好きなことも、何度か聞いて頂いています。この程読んだ題記の本で、世界中で同じような考えが広がりつつあることを知ったので、ご披露してみたいと思います。

著者は我々の後輩で、昭和四十四年生まれ、福島清彦氏。現在立教大学の教授です。今年の一月に上梓された極く新しい本です。

昨今、GDP至上主義や経済成長至上主義の考えが見直されつつある、と言つのが趣旨です。

元々GDPと言つのは、国民の幸福を測るために作られた指標ではないと言つことです。指標が作られた最初の目的は国の力を測るため、ハッキリ言えば、国の軍事力を測るのが目的だったと言われます。GDPの概念を作ったのは、サイモン・クズネッツと言つアメリカの経済学者で、当時の大統領フランクリン・ルーズベルトの依頼によって考案されたものでした。クズネッツ教授はノーベル賞を受賞した学者ですが、この人自身が、「私が開発したGDPでは一国の幸福度は測れない」と言っていたそうです。

二〇一四年のGDPの上位ランクを見ると、一位がアメリカの一七兆億ドル、二位が中国の一〇兆億ドルで、日本は大きく遅れて五兆億ドル足らずの三位にランクされています。中国に二位の座を明け渡してからそれ程時間は経っていないと思うのに、随分大きく離れてしまったものだと思認識を新たにしました。

二十一世紀に入って世界中で、「金銭収入だけではない幸福を求める願望」を計測

しようとする動きが生まれて来ていると言います。新指標作成の最初の動きが二〇〇七年の「イスタンブール宣言」だそうです。国連やOECDなどで構成された委員会で、「超GDP」の指標の開発を世界各国に求めることが宣言され、これに基づいてコロンビア大学教授のジョセフ・ステイグリッツが作成したのが、二〇〇九年の「ステイグリッツ報告」でした。教授は当時のフランス大統領だったニコラ・サルコジの依頼でこの報告書を作ったとのこと。サルコジ大統領という人は、大好きの大統領だとばかり思っていました。が、こんなに先を見た立派なこともしていたのです。これとは全く別に英国でもこうした動きが見られます。一九九七年に誕生したブレア政権で超GDPと幸福度増大戦略の検討が始まり、「国民総幸福」と言う謳い文句で今のキャメロン政権にも引き継がれているそうです。アメリカでも早くからこの動きが見られ、既に一九六八年にケネディ大統領の実弟のロバート・ケネディが、物質だけを求める風潮に対する疑問を示した講演をしたそうです。この流れの中で四二年後の二〇一〇年になって、オバマ大統領が「新指標開発法」を成立させています。

このステイグリッツ報告書では、「暮らしの質」を測る指標を作ろうとする試みが始められています。この「質」を数値化することが難しいことは最初から認識されています。個人的な満足度を測るのは殆ど不可能とされていますが、幸福の分析を試み、健康・教育・個人的な諸活動・政治への発言と統治・社会的なつながり・環境条件・個人の身の安全・経済的な安定の八つの分野を測ることで福利厚生度が測れるのではないかと報告しているそうです。

二〇一一年に国連総会で、国連統計局に「GDPを超える新指標と新統計」の作成を求める決議が採択され、作業に入りました。この結果発表されたのが、「総合的な豊かさ報告二〇一二年」でした。四つの指標に分けて計算されていますが、四つの資本と呼ばれるそれらの指標は・・・

一・人的資本 (Human Capital) 質の良い人的資本を得るには教育が一番大切と言つことで、教育の指標がベースになっているようです。

二・生産した資本 (Produced Capital) 過去に積み上げられたインフラ投資や設

備投資を示すものです。

三・社会関係資本 (Social Capital) 人と人とのつながりを示す指標ですが、これは仲々数値化しにくいものなので、これだけはまだ指標化されていないそうです。

四・天然資本 (Natural Capital) 石油や鉱石類などの地下資源に加え、農地・牧草地・森林などもこの資本に入ります。

これらを総合した資本の残高で、日本の豊かさは第二位のアメリカを大きく引き離して断トツの世界一との結果が出ているのです。天然資本では大きく劣りますが、人的資本と生産した資本の二項目で高い評価がなされています。

福島教授は、安倍政権では未だにGDP六〇〇兆円を目指す、などと言って、GDP至上主義から抜け出し切れていない。世界の指導者に比較すると遅れているのではないかと、不満を漏らしているようです。

加えて日本の教育は、ゆとり教育などと言って国民の頭脳力を破壊するようなバカな

ことをやっている内に、先進国でも有数の低学歴国になってしまった。公的な教育支出が先進国中で最低の三・五%になっているとのこと。生産資本は過去の公共投資のお陰で未だに高い水準を保っているが、これも最近は公共投資が押さえられていて、高い指標を維持するのが難しくなってきた、と言います。これでは「暮らしの質」世界の維持が難しくなるだろう、と言っているのです。どうやらこれらの分野に対して財政出動を大きくしろ、と主張しているようで、昨今の大幅な財政赤字状態の財政事情から見て、本当に出来るのかな、と思いますが、世界中に、「GDPよりも暮らしの質」を重視する風潮」が広まって来たことは、私にとっては嬉しいことです。

ガツガツと醜く金を求めるのではなく、金を離れたところに幸せを求める生き方は日本人なら出来ることではないか、と思います。災害が起こった際に、我勝ちに、と自分の利を求めて騒動を起こすことに恥を覚え、落し物を見つけた時に猫ババすることを恥とするような、「恥を知る心」や、自分を殺しても他の人を助けようとする、「滅私の心」と言った武士の魂を心のどこかに残している日本人の生き方にはこの風潮がピッタリ



のよ  
うな  
気が  
し  
ま  
す。

（平  
成  
二  
十  
八  
年  
三  
月  
）

盗人猛々しい国

このところの中国の横暴は目に余るものがあります。先号の茂木兄の一文に触発されて、私もひと言言いたくなりました。

習近平が総書記になってからの中国は大変に危険な国になっているように思います。これは、「総書記が代わったから」と言つよりも、「そう言う時期に至ったからだ」と言つた方が正しいのではないか、と思います。

恥を知らない嘘つきの国、と思いますが、これは意図してやっていることだと思います。南京大虐殺の話は、色んな面から検証されていますが、どう考えても事実ではないことが証明されているようです。ある程度の殺戮があつたのは事実でしょうし、それは大変悪いことをした、と認めねばなりません。あんな短い時間であれだけの大量の殺戮が出来る筈がない、とか、当時の南京の人口が二〇万人だったことから考えて、三〇

万人の人が殺せる訳がないとか、当時現地には大勢の外国人ジャーナリストが滞在していたのに、そこからは何も報道が流れて来なかったとか、証明の方法は山ほどあるようです。国際法廷でも何でも出るところへ出て証拠を突き合わせれば、どちらが正しいかは判定が出来る筈です。それを事実の検証もしないままで、習主席辺りが国際的な場で事実として口に出し、南京には記念館まで作っています。嘘を事実として確定するための意図的なものなのでしょう。尤もこの南京大虐殺は、本多勝一なる人が朝日新聞に連載した「中国の旅」なる紀行文が原本になっているようです。先日慰安婦問題と同様に朝日新聞が犯した罪はこの辺にもありそうです。また、何十年後の遅すぎた訂正記事事件になるのではないだろうか。

高速鉄道の重大事故を隠すために、事故に遭った車両を土に埋めてしまおうとしたことがありましたし、毒入りギョーザ事件でも、最後は自国内での毒の混入を認められたもの、ずいぶん長い間、中国側の責任ではない、と強弁を続けていました。今回の期限切れ鶏肉の問題も、自分の儲けのためには他人の迷惑は考えないで嘘を付く、と言う姿勢の現れ

だと思えます。本件については、中国の新聞が暴いたので事実が明らかになった、と言う方がお粗末だったと思つています。逆に、中国の新聞が暴いた、なんて、報道されている以上のもつと酷い事実が隠されているのではないだろうか。何故マクドナルドがこの事実を発見出来なかったのだろうか。私はずい分前から、中国からの輸入食材は口にしないことにしていますが、外食の場合は原産地証明が示されていないので、これが判らない。全ての外食産業は中国からの輸入食材を使っているかどうか、の表示を義務付けるべきではないだろうか。中国国内では毒入り粉乳が平気で売られている話もありましたし、病気で死んだ豚を大量に川に流していた話も報道されています。自分の利益のためには他人の迷惑は考えない、と言う思考経路から見ると、乗り物に乗る際の押し合ひへし合ひの醜さもその範疇に入るのでしょう。尤も、中国国内でも、自国製の食品は危ない、との認識が出来つつあるようで、安全な日本製の食品が見直されている、なんて話もあるようですから、推して知るべし、とでも言わねばならないのでしょうか。恥ずかしい話ですね。

OECDの調査では、世界中に二五〇〇億円の模倣品が出回っているとのことですが、殆どが中国製だとのこと。ブランドの模倣品のみならず、日本メーカーの模倣も多数あるとのこと。これも国民性かと思いますが、こんな事実が明らかになって恥ずかしくないのだろうか。

東シナ海での海上自衛隊の護衛艦に対する火器管制レーダーの照射についても、最初は「日本側のねつ造だ」と主張していました。これも後日になって中国軍が照射の事実を認めています。戦闘機の異常接近事件でも、接近したのは日本側の方だ、なんて言っている。自衛隊の偵察機はプロペラ機、中国のSU二七戦闘機はマツハニクラスのジェット機ですから、自衛隊機の方から近付ける訳がないと思うのですが、これも強弁して水掛け論みたいな形になっています。自分が不利になることは、屁理屈でも嘘でもなんでも反論することに恥ずかしさを感じない。嘘を言い続けて、悪く行っても水掛け論に持ち込めばそれでも良い、と言う感覚ではないのでしょうか。

南シナ海で、ベトナムの漁船が中国船に体当たりされて沈没した事件でも、体当たり

して来たのはベトナム側だ、なんて明々白々の嘘をついている。ベトナム側が何枚もの写真で、事実を訴えているのに、中国側はたった一枚の写真でそれを否定している。石原慎太郎氏が色んな場で、「盗人猛々しい」と言う発言を繰り返していますが、全くその通りだと思えます。これも水掛け論に持ち込むことを目的としているのではないだろうか。この辺のベトナムの対応は立派だったと思えます。事件の画像を世界中に流して、中国側の非を訴えました。民主党の菅政権時代に、中国の漁船が日本の海上保安庁の巡視船に体当たりした事件がありました。画像が沢山あったのですから、これらの画像を世界中に発信して、中国の横暴の姿を世界中の人に知って貰うべきだったのに、菅政権はこれを表に出すことをしませんでした。勇気を持って画像を公開した海上保安庁の係官は罪に問われて、首になるなんてバカなことになりました。この事件にはもう一つおまけが付いています。地方検事局に責任を押し付けて、体当たりをして来た中国船の船長を、お構いなしで釈放して帰国させています。日本国民はこんな人たちに一日でも政権を預けたことを本当に恥とさえねばなりません。

文芸春秋の八月号で、私のお気に入り京大の中西輝政名誉教授の「中国はなぜ平気で嘘をつくのか」と言う特別寄稿に接しました。この中で彼は、一番の嘘つきは鄧小平だった、と言っています。九〇年代の初頭に彼が打ち出した「鄧小平の二十四文字」と言う国家的指針の中に、「韜光養晦」と言う言葉があることが広く知られています。これは「才能や野心を隠して、周囲を油断させ、力を蓄えて行く」と言う意味だそうです。中西教授はこれを鄧小平の最大級の嘘、と捉えています。私はこの言葉は単なる嘘ではなかった、と理解しています。「今は自分に力がないから、静かにしておきますが、自分に力が付いたら、力を行使しますよ」と言う宣言と受け止めるべきだと思いません。彼が七八年に訪日した際、尖閣島の帰属問題が話題になった時、「この問題の解決は次世代の人たちの知恵に任せましょう」と言ったと言う話も有名ですが、これも同じ思想の下でなされた発言ではないかと思えます。「今の時点でこの問題を話題にしたのでは自分の力が不足していて、自分が不利になるから話すのは避けよう。自分に力が付いて有利な話が出るようになった時点で話し合いますよ」と言うことだったのだと

思うのです。これも嘘と言うより、時間稼ぎの戦術だったと思います。中国にはこうした長い時間かけた外交戦術が取れるような政治体制が出来ている。民主主義の国のように、短い時間で成果を出して選挙民のご機嫌を取らないと自分の首が危なくなる、なんて心配をする必要がないのです。何時ぞやご紹介した「日本解放工作」と同じやり方、恐ろしいことだと思います。中西教授は、中国人は嘘と裏切りの歴史の中に育ったので、平気でその場を取り繕うような嘘がつける人種だ、長期的に信頼し合う人間関係を作れない人たちなんだ、と言っています。有名な「孫子の兵法」の基本も「兵は詭道なり」です。つまり、戦いの基本は騙すことだ、とされているのです。ここ一連の中国人のやり方を見てみると、正にそうではないか、と思わされています。

ここへ来て中国が対外的に強い姿勢を示すようになって来たのは、自分に力が付いた、と言う認識と自信が出来たからではないだろうか。中西教授は二〇〇八年がこの転機ではなかったか、と言っています。経済的にも軍事的にもアメリカや日本と対等かそれ以上の話が出る力が付いた、との自信が付いたからではないか。習体制になったから、



強気の姿勢になったのではない。本稿の冒頭で「そう言う時期に至った」と言ったのは、そう言う意味です。これからはこの姿勢がドンドン強く押し出されて来るのではないかと、思うのです。

安倍さんが考えていることが、これ程単純なことだとは思いたくありませんが、同じ方向で考えているのではないだろうか。こうした中国からの圧力を押し返す力を付けておかねばならない。日本版NSCを作ったのも、特定秘密保護法を整備したのも、この流れの中で考えられたものだと思うし、集団的自衛権問題も周辺国への働きかけもその考えに沿ってのことではないだろうか。特に領土問題では南シナ海沿岸の各国と手を携えて中国の横暴に対抗する必要があるのではないかと考えます。

集団的自衛権を巡る公明党との下らない調整で、こんなことは出来る、これは出来ない、なんて項目が明らかになって来ています。単に、公明党の点数稼ぎの為にやったことでしょうか。こんなことを外国に公表するのが何の得になるんだでしょうか。ずる賢い中国は、その出来ないことの網の綻びを捜し出して圧力を掛けて来るでしょう。大きく、「集

团的自衛権は、現憲法の範囲内で出来る限り行使する」位の姿勢を示せば良かったのではないかと考えます。離島防衛の目的でオスプレイをいつ何時までに配備する、なんて公表している。侵略を目論んでいる国があるとすれば、「それなら配備される前に攻撃してしまった方が良い」と考えるのが当然の姿勢ではないだろうか。現段階での日本の海上自衛隊の力は中国を凌駕していると言われますが、時間が経てば中国の方が強くなるのは目に見えています。中国は、自分の方が力が強いと判断したら、それを行使することに迷いを持たない国だと思います。集团的自衛権の法整備を来年廻しにする、なんてノンビリしたことで良いのだろうか、なんて、心配をしています。

中国の最大の武器は人口ではないか、なんて考えたことがあります。毛沢東が、「第三次世界大戦が起こって核が飛び交っても、中国は絶対に負けることはない。アメリカに核が落ちて、例えば三〇万人ものアメリカ人が死ねば、民主主義の国だから、それだけで『戦争は止めよう』』と言う声が上がって、收拾がつかなくなるだろうか、中国なら五〇〇〇万人が死んでも、一二億人は残る」と言う意味のことを言った、と言うことを

どこかで読んだことがあります。人口の多さと政治体制が武器になっている。ウイグルやモンゴルやチベットなどの周辺地域への侵略は、その地域に多くの漢民族を送り込むことで支配しようとして来ています。その地域で支配的な地位を占め、同化して行く。砂を撒いて行く、と言う表現が取られると言われています。こうして漢民族が支配地を広げて行って、元々の民族はその下で虐げられる運命になる。これも大きな人口と言う武器があるからこそ出来ることではないだろうか。

二〇一二年二月に中国共産党の「日本解放工作」を本誌でご紹介した時にご披露した「二〇五〇年マップ」では、朝鮮半島は全部中国の「朝鮮省」として中国の領土になっています。日本は能登半島から西は「東海省」となって同じく中国の領土になり、それより東北の部分は今のチベット自治区と同じような「日本自治区」になっています。こうした目標に向けての動きが着々と進められているのではないか、との危惧の念が強くなっています。

先日、北京で行われた第六回米中戦略・経済対話の中で、習主席が、米中二国の新型

大國關係に言及したのに対して、ケリー國務長官が反論を加えています。ケリー長官の演説の一部を見ましたが、「敢然と」と言う言い方がピッタリのハッキリした姿勢で堂々と反論している姿に頼もしさを感じました。ケリー長官は何か弱々しい印象で、頼りないな、と思うことが多かったのですが、この演説で見直しました。やはり力の背景がなくては、こうした強い対話は出来ないと思います。

このところ、我ながら少々過激になり過ぎていたのではないかと感じています。

(平成二十六年七月)

### 変なペン 朝日新聞

何が特別の契機になったのかは記憶にないのですが、長いこと購読していた朝日新聞の購読を止めたのは、もう三〇年以上前になります。偏向報道に嫌気がさしてのことでしたが、何に寄らずエキセントリックと言うよりヒステリックな報道をする姿勢にも嫌気が差したのでした。本多勝一の「中国の旅」を連載したのも朝日でした。これは、南

京大虐殺を追う、と称する旅を連載したもので、三〇万人大虐殺の大嘘の原本となったものです。沖縄の海底の珊瑚の捏造報道も酷かった。この件では社長が辞任したのでした。「ペンは銃よりも強い」と言われますが、これはどう見ても「変なペンだ」と思ったのです。

日本の新聞なんですから国を愛し、国を良い方向に持って行くこととするのが当然です。社会の木鐸として、時の政府や社会を批判するとしても、それは国や国民を良い方向、正しい方向に向けるための批判であるのが新聞の使命だと思つのですが、国を愛する姿勢が全く見られません。日本は悪い国なんだ、日本人は悪い人種なんだ、と糾弾する記事なら喜んで大袈裟に騒ぎ立てる。反日偏向とでも言うのでしょうか、国の尊厳や国益を貶める方向で記事が書かれていることに不満を覚えたのです。何か特別な目的があるんだろうか。若し、殊更にこの種の問題を作り上げて、新聞の売り上げを伸ばそうと言つのが目的だとしたら、これは国益を損ねて自分の利益を謀ろうとする「国賊」と言うことになるでしょう。

その後は一時、読売新聞に替えましたが、ナベツネの傲慢な姿勢に嫌悪感を覚えて、これはあまり長いことは続かず、数年で今の日経に替えました。日経は政治的な姿勢が全く感じられず、主張がないし、社会面でも批判的な記事にはならないので物足りなく感じることもあります。判断は自分ですれば良いや」と割り切って読んでいます。

日経に替えて直ぐ気が付いたのですが、記事の文章は圧倒的に朝日の方が優れていると思うのです。読売も敵わない。どこが、と言われると困りますが、朝日の方が読み易いのです。特に「天声人語」でしたっけ、毎日のコラムは抜群でした。一寸した教養を満足させてくれ、ピリツとした小味の効いた文章は毎朝楽しみに読んでいたものでした。美しくて分かり易い文章を書く訓練が行き届いていると言うことなのだろうか。朝日の「社説」は大学入試の国語の問題になることが多かったと聞いていますが、理由はそんなところにあつたのでしょうか。

このところ慰安婦に関する問題で、大きな話題になっています。従軍慰安婦については、私は、この問題を中学校の教科書に載せることが話題になっていた頃から、こんな

事実かどうか分からないような不確定な問題を中学校の教科書に載せるなんて不適切だ、売春婦のことを中学生に教える必要があるのか、と言いつづけています。また、軍の強制連行を認めた河野官房長官談話についてもどこかで取り消すべきだ、と言いつづけていますが、正にこの問題が大きく取り上げられることになっています。

こんな問題になると、日経では全く物足りないの、図書館にでも行って勉強せねばならないかな、と思っていましたら、産経新聞を含めて五・六種類の新聞に目を通す機会のある茂木兄が同情して、関連の新聞を送ってくれました(煽ってくれたのかな?)。私の「右寄り」と言うより「愛国の姿勢」に同調してくれている別の友人が、自分が購読している雑誌「WILEY」を送ってくれています。先日、病院の本屋で雑誌「正論」を発見し、これにも目を通して見ました。毎月読んでいる「文芸春秋」も本件で特集を組んでいます。まず、朝日の偏向報道については「正論」の二十六年初秋増大号の整理を参考にしながら、私見を交えて整理しますと……。

一・単独講和には反対の姿勢でした……一九五六年の講和に当たり、ソ連や中国を

含む全面講和にするか、これらの二か国を外した単独講和にするかは当時大きな話題になっていましたが、吉田首相は単独講和で押し切りました。若し、全面講和に固執していたら、早期の独立は不可能だったし、今の日本は存在しなかったと思うのです。

- 二・安保改定に反対しました・・・丁度我々が卒業するころ、「アンボ・ハンターイ」の声が叫ばれていましたが、改定の内容を見ると誠に適切な改定がなされていると思つのです。こんな内容を知った上での反対だったのか、疑問に思うほどです。叫んでいた人たちは、内容も知らずに騒いでいたのではないかと思つのですが、新聞たるものが単に騒ぎ立て、煽り立てていた、と言っただけのことではないだろうか。
- 三・北朝鮮の金日成を礼賛し、北朝鮮への移住を尻押ししたのも朝日だったと言います。「地上の楽園」と言つた北朝鮮側の宣伝に乗つたのは朝日に限らず、全てのマスコミが騒いだものでしたから、これは朝日だけが悪者だった訳ではないようです。
- 四・毛沢東を礼賛し、毛が主導した文化大革命を評価しました。その結果がどうだった



たか。大革命が大失敗だったことは歴史が示しています。結果として生じた少数民族への弾圧は無視されています。

こうした偏向報道を経て慰安婦問題になるのですが、最近、福島原発の吉田昌郎元所長の「吉田調書」も問題になっています。事故調査委員会が事故当時の状況を、亡くなった吉田所長に聴取して調書として残しているのですが、朝日新聞は五月の段階で、自らが独自に入手したとされるこの調書を紹介する中で、「事故の直後、作業員の九〇%の六五〇人が、所長の命令に反して撤退した」と報道していたそうです。この程、この調書が全面的に公開されたそうですが、それによると調書にはそんなことは全く書かれていなかった、と言うのです。こんな判り切った嘘を報道して何の得があると言うんだろう？ 日本人を貶めて騒ぎ立てる何時もながらの朝日の姿勢です。こんな嘘の報道によって、災害の直後、何の混乱も騒乱も起こさず、世界中から賞賛された日本人の見事な国民性が全く帳消しになってしまいます。朝日新聞は社長が記者会見をしてお詫びをしています、どうしてこんな単純な誤報を見抜けなかったんだろうか？ 本件も朝日

の報道のいい加減さを示す証拠として大きく問題にされて良いと思っています。何時もの、日本は悪い国なんだ、日本人は酷い人種なんだ、と騒ぎ立てるための捏造記事だったと言っことなんでしょう。

慰安婦の問題には、私も関心を持っていて、これまでも何度か話題にしていますが、まず、韓国との賠償の問題は一九六五年の日韓請求権協定で全て片付いている筈なのです。ところがこの慰安婦に関して新たな賠償を要求されるような事態になって来ています。一九八二年以来、吉田清治なる人が、「自分が韓国の濟州島で経験した」と言う言い方で、従軍慰安婦の強制的な連行を話題にし始めました。朝日新聞がこれを積極的に報道し始めたのです。その後すぐに、地元の濟州島の新聞が、「調査してみたがそんな事實はなかった」と報道していますし、現代史家の秦郁彦なる人が現地調査をして、そんな事實はなかったことを調べ上げています。吉田清治の話は、強制拉致の人数が二〇〇人から、九五〇人になり、二〇〇〇人になり、と変わって行き、話として信用が出来ないと判定されたので、流石の朝日新聞としてもでたらめな話として追及をギブア

ッブした程だったと言うのですが、関連の報道は続けられていました。

一九九二年になって朝日新聞は、慰安婦問題に軍が関与していた、と言うキャンペーンを張りました。これが当時の宮澤喜一首相の訪韓の時期の直前のことだったので、宮澤首相は韓国訪問中に何度もお詫びを言わされる羽目になりました。私はこのキャンペーンも朝日が意図してやったものではないか、と思っています。首相訪韓の直前にこんな報道がなされれば、こんな騒ぎになることは容易に予測されることです。もし仮にこれが事実だったとしても、国益を考える新聞だったら、発表するタイミングを考えるのが常識と言うものでしょう。これも国を貶めてまで騒ぎを大きくしようとした朝日のやり方ではなかったかと思っています。韓国で騒ぎが大きくなった時、時の韓国の盧泰愚大統領が、「この騒ぎは日本のマスコミが韓国に火をつけたものだ」と言っています。朝日の罪は大きいのです。

一九九三年には、河野談話が発表されました。この談話は軍の関与を認め、お詫びをさせられたものです。この談話は、これ以上の日韓のゴタゴタを避ける目的で、韓国側

と摺合せを行った上で作られたものですが、今やその背景は忘れられて、「韓国の女性が日本軍に強制的に連行されて、口にするのも憚られる程の酷い目に遭わされたことを国が認めた」と言うストーリーがまかり通っています。談話が独り歩きしていると言うことだと思います。強制があつたかなくなつたかは、談話ではハッキリさせない約束だつたそうですが、記者会見の席で河野氏が、「強制はあつたと理解して良い」と発言してしまつて、軍の強制性が確定した形になっています。

子供を含む二〇万人の韓国女性が被害に遭つたような言い方をされることがありますが、これも朝日が女子勤労挺身隊と慰安婦問題を混同していたことに端を発しています。女子勤労挺身隊とは戦時下で女性を軍需工場などに動員した制度で、慰安婦とは全く関係がなかつた制度です。また二〇万人という数字は勿論日本人が殆どで、子供を含む二〇万人の韓国女性被害に遭つた、なんていうのは全くの誤報です。

今やこの問題は国際問題となり、「性奴隷」と言う呼び名がまかり通るようになって、日本人は過去にこんなに酷いことをして来た人種だ、と言うことにされてしまつていま

す。慰安婦と言うのは、昔から軍には付き物の「売春婦」だと思えます。勧められたことではありませんが、世界中どこでも認められていたことです。でも、今やこの問題は女性の人権問題の方に進んでしまつて、この種の反論をすると橋下市長やNHKの刼井会長が受けたような大きな反発を受け封殺されてしまふ風潮になつてしまつています。

朝日新聞は八月五日と六日にこの問題を大きく取り上げ、「吉田清治の話は誤報だつたことを認める」「慰安婦問題と女子勤労挺身隊の混同があつた」の二点を訂正しました。私はこの記事を読んで、全くお詫びの言葉がないこと、と、自分の責任を棚に上げて弁解に徹していることに怒りを覚えました。日本と日本人を貶め、日本と韓国の関係を最悪の状態にしたこんな大きな問題がこれで片付く訳はありません。それとこんな嘘の報道を三二年間も訂正しないで続けて来た姿勢が許せません。この間に日本と日本人がどれ程貶められ、被害にあつたのかを考えれば、社長の辞任位で終わらせてはいけません、と思つています。廃刊させるべきだ、との声も出ています。それ位の覚悟が必要だと思つています。ただ、この種の問題になると、「言論の自由」とやらが大きな顔をし

て出て来て、政治が圧力を掛けることが難しくなります。嘘の報道を続けて来た朝日は糾弾されて当然なのですが、「言論の自由」なんて錦の御旗を振りかざされると問題がややこしくなる。「政府による言論の弾圧だ」なんて旗を世界に向けて振り回したら、タメにする国々からは、「安倍政権が軍国主義化の度合いを強めて来ている」と言った種類の声が上がって来て、大騒ぎになるのではないだろうか。女性の強制連行の問題を女性の人権侵害の問題にすり替えて行った手法と似ているような気がします。このころ英国のフィナンシャル・タイムスやアメリカのニューヨーク・タイムス辺りまでが、「安倍政権が軍国主義化を進めている」といった論調を打ち出して来ているようなのが気になります。朝日のことですから、この辺りまでは計算の内に入っているのではないかと疑いの念を持っています。

更に、私も過去何度も主張して来たように、この様な事態を招いた河野談話は何としても見直さなければならぬ、と信じています。河野氏が死んでしまったら、検証のしようがないのです。生きている間に国会で喚問するなど、ハッキリさせて貰いたいもの

だと思っています。

「ご臍原の桜井よし子さんが、これまでの外務省の不作為を糾弾し、国を挙げて日本の名誉を回復するような手立てを取るべきだ」と主張しています。全くその通りだと思っています。

(平成二十六年九月)

### 安倍首相の外交姿勢

年末の突然の総選挙には驚かされましたね。消費税アップ延期が最初の理由でしたが、私もここで総選挙をやる意味があるのかな、と疑問を感じていました。党内からの圧力に負けたのだろうか、それともやはり「選挙は勝てる時を選んでやる」という手前勝手な民主主義の常道に安易に乗ったのではないかと安倍さんの姿勢に失望を感じたりしていました。結果は予想通りの自民党の圧勝、野党の大敗に終わりましたが、ここで選挙をやったのには全く別の意図があったのではないかと、言うことに思い至りました。こんな解釈をしている評論家にはまだお目にかかっていませんが、長島評論家の説

はどうでしょう？　つまり、安倍さんが一番やりたいのは、日本と日本人の誇りを取り戻すこと、と憲法改正です。そこへの一里塚として第一次安倍内閣で国民投票法を成立させているし、教育基本法も成立させています。先日の特定秘密保護法や集団的自衛権もこの流れの中に入っていると思います。この点をあまりに前面に出すと抵抗が大きいので、一番大切なのは景気の回復だ、なんて言っていますが、安倍さんとしては、経済問題は二の次に考えているのではないか。政権維持のための便法と言ったら言い過ぎでしょうが、それくらいの意識ではないだろうか。ここで強力な政権の基盤を作って、少なくとも四年間の政権維持を確実にしておくことで、内外にその姿勢を示したかったのではないだろうか。第二次安倍内閣の発足後、中国や韓国からは、「安倍さんの所為で日本との外交関係が悪くなっている」というメッセージが流れ続けています。安倍さんとしては、特に、彼らに対して、「少なくとも四年間は日本の外交姿勢は変わりませんよ」と言う姿勢を示したかったのではないか、と思うのですが如何でしょう？

この選挙の結果を見て、中国や韓国の外交姿勢が変わって来るとしたら、ここで選挙



に踏み切った作戦は成功だった、と言えるのではないでしようか。

基本的に経済は政治と関係のないものだと思います。社会主義の体制にある訳ではないし、統制経済の中にいる訳でもないのですから、政治の力で景気を良くするなんていうのは、むしろ思い上がりなのではないだろうか。経済が上向きになるような地盤を作って後押しをする、くらいが政治の出来ることであって、経済は民間の経済自体の力で良くなる他ないのではないかと思います。景気が良くなれば政治も安定しますから、景気回復のお手伝いをする、程度の考え方で良いのではないかと考えます。それと、経済政策による景気の回復には時間が掛かります。アベノミクスの政策の効果が見えない、なんて声が出ますが、経済政策の効果なんて直ぐに出るものではありません。五年や一〇年は待たねば効果は現れないのです。アメリカで保守党のレーガノミクスの効果が現れて、それを享受したのは、民主党のクリントンだったし、英国で保守党のサッチャーの思い切った政策の効果を受けたのは労働党のブレアでした。何でもかんでも政治の所為にしよつとする最近の風潮は、どこか間違っているのではないか、という気がし

ています。例えば、自然災害に遭った人たちが支援を求めるのは当然のことです、困っている人がいたら助け合うのは当然ですが、支援して貰うのが当たり前、政府が支援しないのが悪い、みたいな姿勢が見えると、どこか間違っているのではないか、と思うのです。

(平成二十七年一月)

### ISによる日本人誘拐事件他

イスラム国による日本人誘拐事件、大変な騒ぎになりました。個人を狙った卑劣としか言いようのないテロの手段には怒り以外の何ものも感じられませんでした。こうした行為に対して何も出来ないもどかしさのみが残りました。圧倒的な軍事力を持つアメリカでも自国の人質を救う手段がなかったのだし、軍事力でこの種のテロを防ぐことが出来るとは思いませんが、こうした理不尽が今後共発生する可能性があり、それに対抗する手段がないと言うもの情けないですね。昔、マレーシア・クアラルンプールの大使館人質事件で、日本赤軍の五人を解放した三木武夫(一九七五年)

やバンングラディシユのダツカでの日航機ハイジャック事件の際、「人の命は地球よりも重い」(この言葉は福田赳夫元首相の言葉として有名ですが、元々は三木武夫元首相が前回の時に言った言葉をパクったものだそうです)と言う有名な言葉を残して犯人の要求に屈し、服役中の日本赤軍のメンバーやシンパを解放し、カネまで払って世界中に迷惑をかけた福田ナニガシとか言う愚かな首相(一九七七年)がいましたが、今回の日本政府の姿勢は立派だったと思います。七五年に解放された服役囚の中に、私自身が経験した三菱重工爆破事件の犯人が含まれていたこともあって、その感が強いのかも知れません。解決がヨルダン政府の対応に任された形になったので、イスラム国側にヨルダンと日本の離反を図ろうとする意図が見えたように思いましたが、不幸な結末になった後、直ぐに日本政府がヨルダン政府に対して、良くやってくれた、とお礼のメッセージを出したのも良かったと思います。ああした危険な場所に行くのは、往々にして、金儲けの手段として行くとか、売名行為目的で行くケースが見られますが、こんなケースは完全に自業自得の範疇に入る訳ですから、最初から「決して金は払わない」と宣言しても

良いのではないかと思います。今回最終的に不幸な結果になった後藤さんは仲々立派だったと思います。最初から、自己責任で行く、と宣言していましたし、母親も奥さんも日本政府に対して、助けてくれ、と言わなかったのも立派でした。後藤さん自身の本意が理解されていたからなのでしょう。もともと後藤さんも事前に政府関係者から何度も止められていた事実があったようですから、自分の勝手に、日本と日本人に迷惑をかけた、と言われるも仕方がないのではないのでしょうか。ですから、もう一歩進めることが出来なかったのか。若し万一、私があのような立場に立たされる羽目になったら、自分の存在自体が騒ぎと迷惑の中心になっているのですから、自分がいなくなればテロ集団の武器はなくなる、と考えたのではないか。何らかの方法で自分を消すことを考えたのではないか、と思いました。こんな問題で国を挙げて大騒ぎをし、心配し、国事も疎かになるような事態にはすべきではない、と考えます。ご臍原の安倍さんの心身共に亘る健康が心配になりました。

事件終結の翌日、朝日新聞を買ってみました。全紙で八ページにも亘って、相変わら

ずヒステリックな報道がなされていましたが、社説を含めてその論調は流石に常識的なものと思われました。

実は、事件が起こって直ぐ、朝日新聞がどんな記事にしているのか、また安倍さんの右寄りと見られる外交姿勢がこの種の事件を引き起したのだ、と言う論調に仕立てて論（あげつら）っているのではないか、と気になって、態々近くの駅まで出掛けて行って求めて来て、久し振りに朝日を読んでみたので、終結後はどうだろう？　と思つて再度読んでみたのです。流石に本件については最初も二度目もそれ程極端な姿勢は示されていませんでした。

でも、この手のテロは、テロリストが自分の存在を世界中に広く知らしめて政治的な主張をアピールするのが目的でしょうから、こんな事件で世の中が大騒ぎしてくれるれば、テロの目的は達成できるのだと思います。全紙八ページも使って、大きく報道するなんていう朝日の姿勢は、それこそテロ集団のお神輿を担いでいるのではないか、と言う疑問を持ちました。

偶々最初の日（二月二十二日付）の社説で慰安婦の問題に触れていました。中学校の教科書出版会社の一つが、教科書から「従軍慰安婦」の記述を削る決定をしたことに對する批判でした。「従軍慰安婦は問題として消滅した、と言つ主張が、日本人が人権を輕視しているとの国際社会の見方を生む」と言つ相変わらずの朝日のすり替え論調の主張でした。私は、従軍慰安婦の問題を中学校の教科書に載せること自体に最初から疑問を感じていました。売春婦の存在を中学生に教える必要があるのか、と言つのが基本的な疑問です。若し、どうしても教えねばならないのなら、売春と言つ職業が人類の歴史上一番古くからある職業であることを教え、不幸な事実ではあるけど、貧しい家庭では已むなく身を売ることと生きて行かねばならない人がいた不幸な時代があったことを教え、特に古今東西、若い男の集團である軍隊には売春婦は欠かせない存在であり、彼女らの最上の顧客である軍隊には、付いて歩いてきた売春婦の集團が必ず存在していた事を教え、むしろ軍隊には征服された側の女性を守るためと性病の蔓延を防ぐためには慰安婦的な存在は必要だったことを教えなければ、それこそ偏つたことを教える結果に

なり、片手落ちになります。こんな片手落ちの知識をベースに、「日本の軍隊だけが酷いことをした。日本は悪い国なんだ。日本人は酷い人種なんだ」と言うことを中学生に教え、日本と日本人を貶める教育をする必要がどこにあるんだろうか。ここで教科書から記述を削除するのは当然なことだと思います。売春婦の問題を女性の人権問題にすり替える朝日新聞の姿勢には全く反省が見られないな、と改めて感じたことでした。

先日、プライムニュースに渡部昇一が登場して、「慰安婦問題の最大の元凶は河野談話とされているが、その前に宮沢首相が訪韓した時に、その直前に朝日が騒ぎ立てた本件について、何度もお詫びを言ってしまったのも大きな元凶だ」と言っていました。「宮沢さんの年代だったら、慰安婦がどんな性質のものだったか、は十分に理解出来ていた筈だ。それを唯々諾々とお詫びしてしまったのが、後世に大きな問題を残した」と言うのです。正に、我が意を得たり、の感じがしました。

このところ本件に関連して、いろんな場面で朝日の関係者と桜井よし子さんの議論の場が企画されていますが、楽しみに拝見しています。

(平成二十七年一月)

## アベノミクス

先号で杉山兄に向けてコメントした内容をもう少し詳しく述べてみようと思います。色んなところで細切れに私見を述べていますが、少し整理してみようと思うのです。

私の実感としては、アベノミクスも賃上げと雇用環境の改善の段階まで辿り着いて、やっと本物に成りかけたな、と思っています。元々、政治の力で景気を上昇させるなんて出来るものではない、と思っています。統制経済下にある訳ではないし、管理された社会主義の計画経済ではないのですから、政治が経済を動かせる範囲は極く限られているのではないか、と思うのです。それと政策が効いて景気が上昇するとしたら、それには時間が掛かる。二年や三年で効果が現れるとは思えないのです。アメリカで共和党が進めたレーガノミクスの効果が現れて、景気が良くなって来て、その好況を享受して人気が高かったのは、民主党政権に変わってからのクリントン大統領だったし、英国でも、英国病から抜け出すために強烈な経済政策を進めた保守党のサッチャー首相の努力の成果が現れて来たのは、後継のメジャー首相を飛び越えて、労働党のブレア首相の頃で



した。サツチャー首相の政策は、在任中は強引過ぎて不評だったけれど、お陰でブレア首相は大分得をしたのではないか、と思っっています。アベノミクスの政策による景気の回復策、つまり「第三の矢」の成果が上がっていない、との批判や非難が大声で叫ばれています。これは批判のための批判です。やるだけのことやって、「もう少し時を待て」と言っただけでやれば良いと思っっています。安倍さんが最初にやったのは、異次元と言われる金融政策でした。日銀に国債を買わせて、お金を世の中に放出する、と言っただけは財政的には「禁じ手」とも言われる手法です。お金を刷り増して国の借金を増やしに行くやり方は一つ間違えるとハイパーインフレを引き起こす恐れもあるし、経済を滅茶苦茶にする恐れがあります。でもこの借金は外国に対してやってるものではない。発行されている一〇〇〇兆円に上ると言われる国債の保有残高を見ると、二〇一四年九月の数字で日銀が二一・三二%、銀行・生保・社会保障基金と言った国内の金融機関が六二・七四%なのに対して、海外は四・七七%になっています。このやり方は決して勧められる方法ではありませんが、海外への借金返済が出来なくて、国が破産に追い込ま

れるギリシヤ型ではないと思うのです。余りにも大きな財政赤字なので、これを減らすことに努力はせねばならないと思うし、国債を増やしながら財政を賄っている今のやり方は、どこかで変えていかねばならないとは思いますが、長年続いたデフレを止めるためには、止むを得ない非常手段だったのではないか、と思います。「国債は国の借金ではない、国民の債権だ」なんて見方もあって、デフレを抜け出し切れていない今の段階では、国債をドンドン発行して公共投資を進めるべきだ、と言つ極論もあるようです。ケインズの有効需要増出の考えに沿うものと思われれます。私は、景気と言つのは優れてムードに支えられる部分が多いのではないか、と思つています。先行きに明るいものが見えると、個々の企業も前向きになる。アベノミクスがやったのは、このムード作りには効果があった。ムードを盛り上げて、民間の力が付いて来るまでの時間稼ぎをやっているのではないか、と思います。経済が元気になれば税収も増えて来る。これだけ大きくなってしまった財政赤字を正常化するには時間がかかるでしょうが、返済の構図が見えて来れば良いのではないか、と考えています。

最初の頃、「円安になった」、「株が上がった」なんて喜んでいるようでは駄目だな、  
とっていました。国の経済力が強くなればその国の通貨は強くなるのが自然だと思  
います。その通貨が弱くなる、つまり円安になる、なんて言うのはおかしいと思いま  
すが、これは通貨の発行高が大きくなったことに主因があるのでしょうか。株価なんて言  
うものは上がったり下がったりするのが当たり前で、それも昨今の株価は夫々の企業の  
実態をそのまま示すものではない。むしろ売り買いの投機で動いているのではないか、  
一種のバブル現象ではないか、と理解しています。株価が上がって喜ぶのは、大量の株  
を持つているお金持ちの人たちや株の売り買いで儲けようとしている人たちです。昨今  
の株主優先の風潮は気に入りません。儲けは株主に還元するよりも、商品やサービス料  
金の値下げに回してお客に還元したり、賃上げやボーナスで従業員に還元するのが企業  
の社会的な使命ではないか、とと思っています。松下幸之助が言っているように、企業は  
社会の公器であるべきだ、と思うのです。儲けは株主ばかりに還元されてはならない。  
顧客、従業員、下請けや関連会社、所謂ステークホルダー全員に還元されるべきものだ

と思います。株主優先の方向は、流行りのピケティが言っている「財による儲け」が大きくなって、所得格差の拡大に繋がります。金の力で金儲けをしようとする、世の中に何も生み出さない、私の大嫌いな連中が喜ぶ図式ですが、株高はムードの盛り上げには相当効果があつたのではないのでしょうか。

そうは言っても、杉山兄が指摘してくれたように、日本の所得格差はアメリカや英国に比べれば可愛いものかも知れませんが、以前、お気に入りのロナルド・ドーア教授も同じことを言っていました。日本は一億総中流階級だ、と言われた時代がありました。私は、こんな社会が一番理想な社会なのではないか、と思っています。

デフレの時期には、どうしても経済活動が内向きになります。個々の企業は自分の業績を上げるために、人件費を犠牲にしようとする。従業員に負担を強いるブラック企業が出て来るし、安い労働力を求めて非正規雇用にする傾向が出て来るので、雇用が不安定になって、国全体の経済は悪くなる。所謂「合成の誤謬」が発生していましたが、先行きに明るいものが見えると、企業の態度も前向きになります。賃上げなんて、政府が

企業にお願いしなくても、企業が自分自身で考えるべきもの。失業率が減って来るのも、自然の成り行きです。安倍さんが労資の間に入って、政府が賃上げを主導してみたみたいな形を作ったのは単なる点数稼ぎだったと思います。ムード作りには効果があったし、その辺は上手でしたね。

石油の価格が下落したのは、ラッキーな追い風だったと思います。景気の押上げには相当の効果があつたのではないだろうか。でも、石油の値段が下がったので、インフレターゲットの二%の達成が難しくなつた、なんて議論があるようですが、これは私には良く分からない。インフレにすること自体が目的ではない筈です。実質的に経済が向上になれば良いのではないか。石油の値段が下がった分だけ、ターゲットが下がるのが当たり前ではないか、と思います。昨今の風潮は、何でも値上げをすれば良い、と言う風潮になりつつあるような気がします。これも行き過ぎではないか、と思つています。特に我々年金生活者にとっては、賃上げの可能性がない訳ですから、物価の上昇は直接のダメージになります。上手なコントロールが出来ないものだろうか。

高齢者は金持ちだから、高齢者から金を吸い上げる、と言う議論も気に入りません。どこかのお年寄りのところにはお金が唸っているのかも知れないけれど、年金だけで暮らしている我々貧乏な年寄りも大勢いるのです。年金制度を守るために、老齢年金を下げる、と言う議論も出て来ています。これも時代と逆行するような議論に見えて仕方ありません。誰もが安心して老後を迎えられるような制度に発展させて行くのが年金の向かうべき方向ではないか、と考えていますが、これは自分勝手な議論かもしれませんね。

(平成二十七年四月)

158

## 戦後七〇年首相談話と安保法制論議

### 戦後七〇年首相談話

戦後七〇年首相談話の騒動が終わりました。総花的な差し障りのない内容で、もう少しビシッとしたものを期待していた私としては、少しガッカリしましたが、外交面を配慮するとあんなものにならざるを得なかったのでしょうか。少なくとも、「河野談話

なんて馬鹿なものを見直す」の一言ぐらい欲しかったと思いました。安倍さん自身も、色んなところに配慮して作られた長々しい作文をイヤイヤ読まされている、と言っ感じがアリアリでしたが、これでは中国や韓国もゴタゴタ言うことは出来ないでしょう。

### 安全保障関連法案

安全保障関連法案の騒ぎは国会での醜い騒ぎの後で、一応収まりましたが、あまりに下らない枝葉末節の論議をしているので、途中で左記のようなことを考えました。読売新聞に、メールで投稿できるサイトを探し出して送ってみました。反応がなかったのは、ボツになったのだからと思います。内容をご披露します。

『安保論議はもつと本音で話したら分かり易いのではないだろうか、と思います。野党側は態と議論を解り難くして、国民が分からないように仕向けているのではないだろうか。そしてアンケートの結果を盾に、「国民の理解が充分ではない」と言っ切り札を使って来る。これでは何時になっても話は終わりません。』

本音の一つは、憲法と国の安全とどちらが大事か、と言っ議論ではないだろうか。自

衛隊は誰が見ても憲法違反でしょう。現状で国の安全を図るには憲法改正をするのが正攻法だと思います。けれども憲法改正を先にすべきだ、と言っている人は改正には反対するでしょう。改正には時間が掛かる。それなら憲法を出来る範囲で拡大解釈して、国の安全を図ろうよ、と言つ議論にすれば分かり易いのではないか、と思いました。

本音の二つ目は、自分の国を守ろうとする意欲のない国民を誰が助けると言うんだらうか、と言つ議論。周辺の島の一つや二つに侵略を受けたからと言って、アメリカが自分の国の若者の命を危険に晒して、日本のために戦ってくれるとはとても思えないのです。私は核爆弾の一つも投下されて、何十万人、何百万人の命が失われて初めて、助けに来てくれるのではないか、と思っています。国土が侵され、国民が拉致されても自ら何の努力もしないような国は誰も助けてはくれないと思います。ましてや、逆に同盟国がやられた時は何もしません、なんて言っている国を誰が助けられると言つんでしょうか。

本音の三つ目は具体的な脅威を表に出せば良いのに、と思います。中国が力をつけて



来て、領土拡張の覇権主義を表に出して来ています。将来の日本をモンゴルやチベットやウイグルのような酷い状態にして良いのか。そして我々の子供たちや孫たちを不幸な目に遭わせて良いのか、と言った具体的な議論にすれば、それこそ国民の理解度も格段に上がると思います。外交礼儀上出来難いことかも知れないけど、国会の不毛の議論を聞いているとこれくらいの議論をしなければ話は進まないのではないか、と思うのです。

本音の四つ目は、一人の自衛隊員も殺してはならない、と言う議論は間違いだ、とハッキリ言明すること。自衛隊は誰が見ても軍隊でしょう。軍人とは自分の命を賭して国を守ってくれる人たちです。そのために訓練を重ねて敵を攻撃する技術とともに自分を守る技術を学んでいる。消防隊員や警官と同じです。危険を少なくする努力はすべきだし、そのために彼らは毎日訓練を重ねているんだろうと思います。それでも危険な任務なんですから、死んでもらうことはあるかも知れない。その時は相応の処遇を考えて、国民全員で感謝する、と言う仕組みを作るべきだと思います。平成三年二月号の「湾岸戦争」の項に書きましたが、「憲法の規制があるから前線で戦うわけには行かない。だ

から後方では一番危険で人の嫌がる仕事を受け持たせて貰う」ぐらいのことが言えるような自衛隊になつて貰わないと、国際貢献なんて偉そうなことは言えないと思います。

誰が名付けたのか知りませんが、「戦争法案」なんてネーミングこそ全く失礼な、国民に誤解を与えようとする意図的なネーミングだと思っています。これは、「戦争防止法」だ、と反論すべきです。先日、鴻池委員長が、「何でも言つて委員会」に登場して、あれは「備えあれば憂いなし法案」だ、と言つていました。全くその通りだと思ひます。

こうした具体的な本音の議論が何故国会の場で出来ないんだろうか。奥歯にものが挟まつたような議論ばかりしているから、「国民の理解が得られない」なんてことになつているのではないか、と思います。野党の質問者に向かつて、「国民に出来るだけ理解させないように、理解させないように、混乱させているのは、あんた達なんだよ」の一言が言えないんだろうか。これが一番の本音かも知れませぬ。

「将来、政権が変わつた時に、この法律では拡大解釈に際限がなくて、過去に日本が歩んだ戦争への道に引き込まれる恐れがある」と言つ議論もあるようです。今のような

シッカリした政権なら心配はありませんが、腰が据わっていないグラグラの民主党政権にでもなったら何をやり出すか分からないし、ましてや万が一にでも共産党の政権になったら、それこそ自分勝手の解釈をして、共産主義化を進める手段に使って来るのではないか、と思われ、その方が怖いと思います。』

(平成二十七年十月)

五島観光

この五月に例の歴史勉強会の長崎楽会のフィールドワークで五島に行つて来ました。二泊三日の旅行です。私は五島には過去三度ほど行ったことがあります。殆どが仕事絡みだったので、福江島以外に行つたことはありませんでした。五島は南から数えて福江島、久賀島、奈留島、若松島、中通島の五つの島を中心に構成されていますが、若松島を除いて島を繋ぐ橋が出来ていないので、船がないと他の島には行けないのです。小さな島を入れると一四〇の島があるのだそうで、この内二七の島に人が住んでいるとのことでした。

今回は海上タクシーなるものをチャーターして五つ全ての島に連れて行ってくれる、と聞いて楽しみにして参加したものです。

幹事役がクリスチャンだった所為か、教会巡りが中心になりました。長崎県には

一三三の教会があつて、この数は日本一なんだそうですが、この内五一の教会が五島にあります。その内の一三の教会を拝観して回りました。それぞれの島に点在しているので、これらを追つて行くと全部の島が回れます。何れも明治になってから造られたもので、割と小ぶりなものばかりです。五島のクリスチャン人口は一〇%程度とのことで、日本全体の平均（〇・四五%程度）からするとかなり高いのですが、これはキリスト教禁制の時代に長崎から逃れてきた人が多いことに起因するのだそうです。

源平の戦いの最終章、一一八五年に壇ノ浦で敗れた平家一門の一人・平家盛が落人となつて二年後の一一八七年に列島の一番北の島の宇久島に辿り着きます。その後、一番南の福江島に降りて来て、宇久氏を名乗つて五島全島を支配することになります。宇久氏は途中から五島氏と改姓して三十数代続くのですが、十七代目の宇久純定が一五六六年にポルトガルの宣教師アルメイダを迎え入れて宣教の許可を与えたのが、五島とキリスト教との関係の始まりとされています。受け入れの契機となつたのが純定自身の病気の治療にあつたとされているのが面白いと思います。アルメイダは莫大な財産を寄進し

て宣教師になる前は、商人であり、船長であり、医者でもありましたから……。その後、徳川幕府の下で宇久氏も禁教令に従って弾圧を始めますが、大勢の人が隠れキリシタンとして残ったようです。一七八九年に、五島藩と大村藩の間の取り決めにより、大村藩の農民が多数五島に渡ったとのこと。当時、五島藩では農業技術者が不足していたのに対して、大村藩では逆に人口を抑制せねばならない要請があったのだそうで、大村藩に芋造り、畑作りの技術を持った農業技術者が大勢いたと言ふことで、両藩の利害が一致して大掛かりの移民が実現したと言ふことのように。この農業技術者の殆どが長崎の西彼杵半島の外側の外海と言われるところに住んでいた隠れキリシタンたちだったそうで、これらの人たちが五島の各地に住み着いたとのこと。どうやら地元の人たちにはあまり歓迎されず、与えられた土地も極く辺鄙なところだったようです。「五島は良いところだ、天国だ」と言われて渡った西彼杵半島の農民が、実際は酷いところだった、と嘆いて歌った歌が出来たほどだったそうです。キリシタンの禁制は秀吉の頃から徳川幕府の時代に亘って厳しかったものだと思っていました。この弾圧が明治に

なつてからも続いてきたことを再認識しました。明治の初期まではかなり激しい弾圧が行われていて、酷い迫害の歴史が残されています。岩倉使節団が世界中を回った時に、日本政府のキリシタンへの迫害に対して、諸外国から強烈なクレームを受けたのだそうです。禁制が解けたのは使節団の帰国後の明治も六年になってからのことだそうです。五島で拝観したこれらの教会は、その後になって欧州から来た神父の指導によって建てられたもので、多くの教会の建築に携わった鉄川与助と言つ建築家が有名です。こつした歴史的な理由で、多くの教会が辺鄙な土地に建てられていて、決して大きくて立派なものとは言い難いのですが、その地域の人たちの浄財と労働力によって建てられたものことで、大変に貴重なものであることが判ります。この教会に所属する信者の数が今では四人だとか、八人だとか言われる教会があつて、その地域の人は全員がクリスチャンだと言つところもありました。

「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」を世界遺産に登録しようと言つ動きが盛んです。実は、この遺産は昨年までは日本代表になる第一候補だったので、土壇場にな

って出て来た「明治日本の産業革命遺産」の方が国内予選に勝って、暫定リストに載る  
ことになりました。次はこの教会群が候補になるだろうと言われています。五島には候  
補になる教会が七つありますが、今回はその内の久賀島の旧五輪教会、奈留島の江上天  
主堂、中通島の頭ヶ島教会の三つを拝観しました。何れも小さくて粗末な教会です。欧  
州で見た世界遺産になっているような教会は、古くて大きくて立派なものも多く、これ  
らに比べると貧弱で、世界各国から来た人が見たら、「これが世界遺産なの？」と疑問  
を持つような気がします。世界遺産の基準は、五つの「C」からなっているとのことで、  
それらの「C」は、Conservation（保護）、Communication（伝達）、Community（財産  
の共有）、Credibility（信頼性）、Capacity building（人材の育成）なのだそうで、  
世界遺産の本来の目的は、後世に残すべき貴重な財産なのだから大事に保存しよう、と  
言うものだった筈ですが、最近の登録は観光が目的になっていて、世界遺産になったら  
観光客が増えるから登録しよう、としているケースが多いようです。私には、何だか動  
機が不純なものに見え、本末転倒みたいな気がして、その動きが不満なのです。長崎と



しては誘致に懸命で、この会の会員の中にも熱心な推進者がいるので、これに水を差すのにはかなり勇気が要つたのですが、旅行の感想を述べる機会があったので、「これらを建築物として世界遺産に登録するのでは恥ずかしい。その歴史や文化を含めたものとして登録するべきだ」と発言しておきました。

その後、これらの隠れキリシタンを輩出したとされている西彼杵半島を歩く機会がありました。もっぱら北の半分を回つたのですが、半島の北端には、一五六三年に来日し、当時の外国人宣教師のトップの一人で、秀吉の通訳も務めたと言われるポルトガル人の宣教師フロイスが上陸したとされる横瀬浦がありますし、天正遣欧少年使節の一員、中浦ジュリアンが出た中浦にはジュリアンの記念碑も建てられています。でも、この地域には隠れキリシタンは殆ど残っていないかつたとのことですし、今でもキリスト教に対する反発みたくないものが残っているとのことでした。中浦ジュリアンと言う人は、今こそ身を捨ててまで信仰を守って殉教した偉人の一人とされていますが、当時の体制側から見れば、禁教令を破つて布教を続ける確信犯的極悪人だった訳で、その大罪人を生ん

だこの土地に対する弾圧が特に厳しいものになったらしいのです。同じ人を見る目も体制側から見る目とクリスチャンの側から見る目、当時の人が見る目と、歴史として見る我々の目とは大違いなんだと言うことを改めて感じました。これに反して半島の南の半分には、日本で最初のキリシタン大名大村純忠の影響が残っていたせいか隠れキリシタンも多く、五島に渡った隠れキリシタンももっぱら南の地域の人たちだった、と言うことでした。

半島の北側は、当時は十五世紀の初頭に近江から来たと言われる小佐々一族が支配していて、小佐々水軍として栄えていたとのこと。私が高校時代まで、長崎に住んでいた頃は、未だ西海橋が出来る前でしたから、西彼杵半島の北の方は交通の便も悪く陸の孤島になっていました。半島の根元に「鯖腐れの岩」と言って、岩の断崖の上に大きな岩が不安定な形で乗っかっているところがありました。その下に細い道があったのですが、半島の北の方から鯖を売りに来た商人が、あの岩が落ちてから下の道を通ろうと待っている内に、鯖は足の速い魚ですから、腐ってしまった、と言う謂れのある岩で

す。私は当時、この岩の北には人間は住んでいないのではないか、なんて思っていたのですが、長崎に人が住むようになるズツと以前から、立派な文化を持った人たちが住んでいたことを知りました。案内をしてくれた小佐々家の末裔に当たる人が、「今でこそ陸路を考えるからこの地域は不便なところとされているが、水上交通を考えれば、この地域は誠に便利な土地だったのだ」と言っていました。中浦ジュリアンはこの小佐々家から出た人です。

(平成二十六年六月)

### 再び五島の話

この五月に小学校の同窓生一六人を連れて五島に行つて来ました。昨年は歴史勉強会の長崎楽会のフィールドワークで同じ五島に行つたのですが、この際、各所に渡りを付けておいたので、今年の計画は楽に作れました。吉岐・対馬に続いて五島と、このところ長崎楽会の旅行を小学校の旅行の下見に使っている感じです。船をチャーターして五島の五つの島全部を巡り、世界遺産候補になっている教会の内の三つを拝観し、海の

幸をタツプリ楽しんで来ました。お天氣に恵まれ、行き帰りの船の揺れも少なく、喜寿を過ぎたお爺さん、お婆さんたちも大満足してくれました。でも、旅行会への参加者が何だかんだと減り気味なのが寂しい。来年からは年齢に配慮して、もっと軽いものにして、しようと思っています。

初日の福江島でのガイドが自衛隊上がりボランティアのオジサンでした。うら若いお嬢さんが現れるのだから、と期待していたので、正直ガツカリしたのですが、仲々シツカリしたガイドをしてくれました。

二〇一二年七月のことだそうです。中国政府から、「台風が接近しているので、近くで操業中の漁船を退避させて欲しい」との要請があったのだそうです。福江島の南端、玉之浦港を提供することにしたなら、一〇〇隻を超える大型の船が次々に入港して来て、全然と碇泊したそうです。仲々出て行ってくれず、近くの住民はこれらの船から中国人が上陸してきたらどうなるのだからと戦々恐々の日々を過ごした、と言います。その後、本件を取材しに来られたという櫻井よしこさんの講演を聞く機会がありました。船の数

は二〇六隻だったとのこと。漁船なら二五トンとか五〇トンの大きさがせいぜいなのに、一〇〇トンとか三〇〇トンの、それも新鋭の大型船が多く含まれていたと言います。狭い玉之浦港の入口から三隻ずつ整然と入って来て、奥から綺麗に並んで碇泊したそうです。これは単なる漁船ではない。訓練を積んだ軍人が操船していたに違いない、と言うのが櫻井さんの取材の結論でした。確かに山の上から玉之浦港の入口を見ると、狭い海路が曲がりくねっていて、台風を避けるには最適だと思われましたが、ここに事故もなく入港し、整然と碇泊するには相当高い操船技術が必要だと思われました。

結局、台風は逸れたそうですが、船は一週間も居座っていたとのこと。中国人の乗組員が何人いたのかは解りませんが、三〇〇〇人はいたと思われ、一八〇〇人の人口の玉之浦の人たちが怖い思いをしたことは容易に想像できます。これを守る警察官は駐在さんが一人、海上保安庁の船は、二五トンの小型船と三五〇トンの船が一隻ずつだったこと。櫻井さんは、日本政府の領土・領海の守りに対する姿勢が懸念される、と言っていました。

台風避難という名目での入港なら、人道的に断ることは出来ません。若し、中国人が漁師と称して上陸して来たら、軍隊ではないのですから、侵略と看做すのは難しいでしょう。どうやら規模はこれほど大きくなくてもこの種のことを度々発生しているようです。ネットで検索したら、二〇一二年夏だけでも四回も二〇隻から九〇隻規模の避難を要請され、これを認めていたことが分かりました。中国は計画的にこの種の既成事実を積み上げようとしているのではないだろうか。

尖閣諸島で中国の海警船なるものが、度々日本の領海に侵入していることが報道されて、騒ぎになっていたことがありました。実は、今でも同じことが繰り返されているのです。相手が軍艦ではないということと、こちらでも海上自衛隊が出動することが出来ず、海上保安庁の船が出て行って、大きなメガホンで「ここは日本の領海です。出て行って下さい」と叫ぶことしか出来ないのだそうですが、中国側からは、「ここは中国の領海だ」と叫び返される。毎日、こんなことの繰り返しをしているのだそうです。中国はこの辺の日本の法律の不備を承知しているので、こんな行動に出る。幾ら領海を侵犯して

も、日本側が決して行動に出られないことも重々承知の上での行動です。「敵を知り己を知れば、百戦危うからず」。正に孫子の兵法です。「兵は詭道なり」も孫子の兵法の基本。相手の弱みを突き、騙すことで領土争いの戦いに勝とうとしています。

尖閣諸島については、一時はマスコミも連日大騒ぎしていましたが、これが何時ものことになってしまって、ニュース性がなくなったものですから、全く報道しなくなりました。櫻井さんによれば、新聞によっては報道しているところがあるそうですが、それでも三面のベタ記事程度になってしまっている、とのこと。マスコミは大切なことよりも話題にされることの方を重視して報道しますからこんなことになる。国の大事よりも、テレビの視聴率を上げることや新聞の売り上げを上げることの方を大切にするなんて、どこか狂っていると思います。こんな大事なことには世界中に知らせて、非を訴え続けなければならないと思うのです。櫻井さんは、「こんなことを日本の船が中国の沿岸でやったらどういうことになるか。少なくとも拿捕されて船は没取され、乗組員は捕らえられて酷い目に遭わされるだろうし、場合によっては撃沈されるだろう。若し、

中国の船がアメリカの沿岸で同じことをやったら、同じ目に遭うだろう」と言つて、日本の領海や領土を守る意識の薄さについて、警鐘を鳴らしていました。

中国がやっているのは、事実を積み重ねて既成事実を作り上げること。例えば、こんなことを三〇年も五〇年も繰り返していれば、これが当たり前のことになってしまつて、世界中が認めることになるでしょう。そうなつたら南京大虐殺の件と同じように、事実の確認も検証もしないままで、国の主席が公の場で、恥ずかしげもなく事実として公言することになり、記念館でも作るようになるでしょう。

モンゴルやチベットやウイグルで中国がやって来たことは、時間を掛けて多くの漢民族を送り込んで、その地域に同化させてしまつ。抵抗する人たちは大量に虐殺されてしまふ。そして原住民を従えてしまふ。「砂を撒く」と言われる手法だそうですが、日本に対しては、同じような手法で時間を掛けて海から侵略して来ているのだと思います。

南沙諸島でも全く同じ手法が取られています。ベトナムやマレーシアやインドネシア・フィリピンの沿岸近くまで、中国の海だ、と称して島を埋め立てて軍事基地を作



っている。出来た島には、国の援助で観光客と称する人たちを送り込んで、実績作りを急いでいるようです。周辺の国々から文句を言われても、何年でも何十年でも時間をかけて実効支配の実績を作ってしまうえば、何とでも居直れる、と考えているのでしょうか。

何時だったかご紹介した、中国共産党の「二〇五〇年マップ」では、朝鮮半島は全部「朝鮮省」として中国の領土になっています。また日本の西半分は「東海省」として中国の領土となり、能登半島から東北の半分は「日本自治区」として、モンゴルやチベットやウイグル並みの自治州になっています。そうなると大量の日本人が虐殺されるような状態になり、その後は、焼身自殺や自爆テロでしか自分の意思を示すことが出来ないような状態に追い込まれるでしょう。こんなことになって、私たちの子供や孫が自分の国を失って、酷い目に遭わされないように、我々はもっと真面目にこの問題を考えて行かねばならないのでしょうか。

対馬に行った時、辺境を守る自衛隊の基地の周りの土地を韓国人が買い占めつつある、ということも聞きました。これを防ぐ法律もないとのこと。竹島のみならず、韓国から

も同じような圧力が掛かっているのです。

五島に旅行して、改めてこんなことを考えました。

私のこうした危機意識に共鳴してくれている友人が、自分が購読している雑誌「WILL」を回してくれます。私のゴルフ仲間にも同じく共鳴者がいるので、私が読んだ後はこの友人に回すことにしています。この友人は掛かり付けの医者の待合室に朝日新聞が置いてあるのが気に入らず、院長に掛け合って朝日を止めさせたそうです。私が回した「WILL」は最終的にはこの病院の待合室に落ち着いているらしい。こうした一人ひとりの小さな行動が、多くの人達を啓蒙して行って国を守ることになるのではないかと考えています。心がけたいものだと思います。

(平成二十七年五月)

### 萩・津和野旅行

旅行会社のツアーだと大抵の場合、山口県の萩と鳥取県の津和野は一つのグループに括られ、「萩・津和野ツアー」と言っことになります。萩では松下村塾を中心とした明

治維新を尋ねる旅、津和野では小京都と呼ばれる赤い石州瓦の屋根の美しい街を楽しむ旅、が売り物になります。以前、馬場兄ご夫妻のお世話で、珊瑚会で我々が連れて行って貰った旅もこのような旅だったと記憶しています。

平成二十七年九月に企画された一泊二日の旅は、歴史の勉強会が作ってくれた所為か、これらとは違う、より深いものだったので、ご紹介してみたいと思います。

長崎からバスを仕立てて萩に入る前に、長門市の仙崎に立ち寄りました。ここは大正の後期に彗星のように現れ、西条八十にも高く評価されたとされる詩人・金子みすずを生んだ街です。恥ずかしいことながら、私はこれまで金子みすずと言う詩人を意識したことがなかったのですが、暖かくて気持ちの良い詩を書いた人です。ご主人の浮気が元で移された悪い病気の所為で、二十六歳で自殺するという薄幸な一生を送った人ですが、そんな環境の中であんなに暖かい詩を書く心を持ち続けたことに感動しました。

萩ではキリシタン迫害の歴史を学ぶことが出来ました。幕府の時代の二五〇年間は、キリスト教はご禁制で、種々の迫害がなされてこられたことは聞いていましたが、この

禁制は明治に入っても続いていたのです。むしろ幕府の時代よりも過酷で陰惨な迫害が行われていました。明治政府が出来た明治元年（一八六八年）の一月に木戸孝允や井上馨などの維新の中心になった要人が長崎を訪れ、当時長崎の北部・浦上にいた隠れキリシタンを三四一四人も逮捕し、これを多くの藩に流刑にして、それらの藩で夫々に改宗をさせる試みをしました。浦上四番崩れとして有名な事件です。これらのキリシタン達は薩摩藩や和歌山藩も含めて一八もの藩に分けて流されたそうですが、この中で有名になつたのが萩藩と津和野藩でした。この両藩では特に厳しい詮議や改宗への残酷な試みが行われました。岩倉具視以下が幕府時代に結ばれた諸外国との不平等条約を改訂する目的で、明治四年から六年にかけてアメリカを始め欧州各国を訪問した際、行く先々の国から、「キリスト教を迫害している日本は野蛮な国である。これを改めない限り文明国とは認めず、不平等条約を改訂することは出来ない」と言う強烈な圧力を掛けられて、帰国後の明治六年になってようやくこの禁制が解かれています。逮捕された明治元年から解禁までの間に萩に送られた二九八人、津和野に送られた一五三人の内の九〇人近く

が殉教しています。流刑の地で亡くなった人の数は三四〇〇人の流刑者中全部で六六四人にも上ったとされています。この二つの街にはその折の迫害の遺跡が残されていて、今回はこれらを巡るのが一つの目的でした。会員の一人が勉強の成果を詳しく発表してくれ、教会の神父さんのお話も伺えて、当時の悲惨な歴史の事実を知ることが出来ました。別のところで聞いた話ですが、これらの流刑者たちの待遇は藩によって大きく違っていたようです。例えば鹿児島藩に預けられた人たちは大変に良い待遇を受けたこととで、四年から六年間の流刑の間は楽な暮らしに恵まれ、帰るときにはお土産まで頂戴して来た、と言う話もあります。どうやら小さな藩は中央政府に気を使って、厳しい受け止めをしたが、大きな藩はそんなことを気にする必要がなかった、という解釈があるようです。尤もこの時代は廃藩置県で藩がなくなって、県になって行った時代ですから、この気遣いも幕府に対してではなくて新しく出来た中央政府に対する姿勢と言うことになるのでしょう。

萩では勿論、松蔭神社や松下村塾も訪れましたが、その他の維新の足跡の観光は同室

の仲間と早朝に起きて、朝飯前に散歩して回る、と言う始末でした。吉田松陰や木戸孝允、高杉晋作の生家や武士が投じられた野山獄の跡、一般人が投獄された岩倉獄跡なども自分で歩いて見てきました。今年は「明治日本の産業革命遺産」が世界遺産に登録されましたが、萩には松下村塾や萩反射炉、萩の城下町など五つが世界遺産の資産になっていますが、その内の三つを見てきました。

津和野には日本五大稻荷の一つ、太鼓谷稻成があります。このお稻荷さんは「ことを成す」と言う意味で、「荷」ではなくて、「成」の字を使うのだそうです。成程！ 登ってみましたが、眼下に広がる赤い石州瓦の屋根が美しい津和野の街並みが見事でした。

津和野は森鷗外を生んだ街として有名ですが、私は森鷗外をあまり評価しません。美文調の何だか気取った文体も好きではありませんが、何よりも陸軍の軍医総監として、脚気の原因が細菌にあるとの自説を曲げず、何千人という陸軍の兵隊を死に追いやったことが許せないのです。海軍では原因が食物にあるのではないかと考えて、主食の白米を玄米に変えることで病気を防いでいます。鷗外はこの事実を知った後も自説を曲げ

なかつたと言います。今では脚気の原因がビタミンなんだと言つことは、子供でも知っています。当時はこんなことも分からなかつたのです。鷗外は津和野では大変な郷土の偉人の一人で、その生家などが遺されています。

ですから、私にとってはこの街が「安野光雅」を生んだ街だということの方に興味がありました。安野光雅は優しくて暖かい雰囲気のを描く人で、ハウステンボス立ち上げの頃、ハウステンボスのコンセプトに合う人だと言つことで、キャラクターとして利用させて貰おう、と検討していたことがあります。どう言う理由だったか上手く行かず、結局、「おおばひろし」さんの方になったのですが、それ以来興味があつたのです。立派な安野光雅記念館を訪れ、暖かい絵を堪能して来ました。

同じところに旅行するとしても、企画のやり方によって旅行の仕方が変わって来るものです。これまで色んなところを訪れましたが、同じ所へ行っても、見方を変えれば違った旅行が出来る。行くところはまだまだあるんだな、と言つことを感じた旅行でした。

(平成二十七年九月)

少しばかりの勉強の成果を人前で喋る機会が何度かあった。人前で喋るとなるとその気で勉強することになる。教えることは勉強することだ、と言われるが、全くその通りだと思つ。「ハウステンボスの現状」については補遺編一でご披露しているが、これらは歴史の勉強会「長崎楽会」の席で喋ったものである。

## 天正遣欧少年使節団

長崎の空港を出ると直ぐ、国道に出る少し手前に、四人の若者の銅像があるのはご存知の通りです。碑面に「天正遣欧少年使節顕彰の碑」と紹介してあります。裏の方に「少





年使節四〇〇年記念」とあります。天正遣欧少年使節については、私は信長・秀吉の時代にキリシタン大名だった豊後の大友宗麟や大村藩主や島原半島の有馬藩主が自分の縁戚の若者をローマに送ったことがあった、程度のこととは知っていました。日本のキリシタンの歴史は何か暗くて陰惨な話ばかりなので勉強する気がせず、それ以上のことは調べたことがありませんでした。

五年ほど前に機会があつて鹿児島に行った時、友人が宮崎の綾町まで連れて行つてくれました。綾城



を見物したとき、天正遣欧使節の中の一人、伊東マンシヨがこの近くの西都市都於郡（さいとしのくり）から出た、と言うことがお城の展示コーナーで紹介されていました。綾城は都於郡城を根城にするマンシヨの先祖の伊東一族が支配する四八のお城の一つでしたが、薩摩の島津氏が、日向（宮崎県）の界隈を平定したときに、追い払われて、縁戚関係にあった豊後（大分県）の大友家を頼って落ち延びた、と言った紹介でした。使節の残りの三人は、長崎出身で、それも私が今住んでいる界隈から出た人たちらしい、と言うことで、その後、少し齧ってみることにしました。

インターネットで関連の本を探してみたら、沢山出て来たのですが、その内の読みやすそうなもの、私の手に負えそうなもの三・四冊を買って来て読んでみました。その内の一冊には三浦哲郎が昭和五十七年に小説化して第十五回日本文学賞を受賞した「少年讃歌」と言う本も含まれています（これは読み易い本ですからお勧めです）、少年使節の研究者として知られる松田毅一さんの本を幾つか読みました。実は白状しますと、

この話は一昨年の四月に東京の長崎楽会で一度話したことがあるのです。(二〇〇八年四月)ご存知の岩波さんに唆されて話す羽目になった時、少しは勉強しなければ、と思つて「クアトロ・ラガッツィ」(イタリア語で「四人の若者」と言つ意味)と言つ若桑みどりと言つ方が書いた大著を読んできました。この本はもう絶版になつていて、本屋では入手できなかったので、アマゾンで中古を探しました。新しい本で三八〇〇円の物が古本で六二〇〇円でしたから、やはり値打ちのある本だと言えるのでしょう。これは天正遣欧使節の総括とも言われている大変な本で、こんな機会がなかったら私も手にしていなかったと思います。私にとっては、人前でお話する機会を頂いたお蔭で良い勉強の機会を与えて頂いた、と言つことになります。

この使節が日本を離れたのは、天正十年(一五八二年)二月と言いますから、織田信長が本能寺の変に遭う年です。私は、この使節団はキリシタン大名たちが自発的に自分の親族をローマに送り出したもの、と言つ印象で捕らえていたのですが、実は色々と

裏の事情があつたようです。この頃の日本のキリシタンの事情をザッと眺めてみますと、まずフランススコ・ザビエルが鹿児島に上陸したのが一五四九年のことで、ここからキリスト教の日本への布教が始まります。大勢の宣教師が入国して布教を始めますが、ポルトガル人のアルメイダという人が一五五二年に長崎に上陸し、その後大分に住み着いて、大友宗麟の庇護の下に孤児院やら病院、教会等を作つて、布教活動が盛んになります。先日、天草白木河内の崎津教会に行つてみたら、この教会は一五六九年にこのアルメイダが建てたものだ、と紹介されていました。この人は外科の医師でありながら船長で商人。若くして船を利用した商人として成功し、巨万の富を蓄えていましたが、二十七歳で日本に来てから、この私財を全部寄進してイエズス会に入り、布教活動をした人です。大村藩の殿様の大村純忠が入信して最初のキリシタン大名になったのが一五六三年のことで、キリシタン大名は全国で三〇人にも達したとのこと。織田信長が布教活動に協力的だったこともあつて全国的に布教が進み、九州地区の改宗者は三〇万人、当時の九州の人口の三〇%に達したと言われ、日本のキリスト教はこの時期に絶頂期を迎え

ていたと言われます。キリスト教が日本に入って来たのが戦国時代の末期で、日本は全国的に戦乱の時代で、庶民・農民にとっては苦しみ時代でした。仏教も墮落していたそうです。キリスト教は、貧しい人に対しては、「隣人を愛せ」という慈愛の心を説き、病気の治療・孤児の救済と言った慈善活動で信者を増やし、知識人や支配層に対しては西洋の科学の知識の魅力で誘い、支配者にとっては外国貿易をすることによる富国強兵（武器の輸入）のメリットを説いて急速に信者を増やしました。

一五七九年に島原半島の口之津に上陸したカソリックのイエズス会の巡察師でイタリア人のアレックスandro・ヴァリニヤーノと言う人が、中々意欲的な人で野心家でもあったらしく、巡察師というのは宣教師の監視役だったそうですが、日本担当の責任者になってから、色々と布教の方策を打ち出して成果を上げた人です。自分の日本での任期が切れる直前になって、この大事業を考え出した、と言われていました。目的は二つ。一つは遠路日本からの使節をローマの教皇に会わせて、日本への布教に対し、理解を求め

ること。平たく言えば、自分のお手柄を宣伝して布教のための予算を増やして貰うことだったでしょう。ヴァリニヤーノという人は日本人の文化の高さを大変に評価していた人だそうですね。日本人の礼儀や理性・知性は西洋文化と同等の高さの文明を持っている、と言っています。日本の文明はキリスト教文明とは大いに違うけれども、異教の大いなる文明で、古代ローマと同列に扱っても良いものだ、なんて言っています。例えば、日本語はラテン語よりも優雅で豊富な語彙を持っている、なんて言っている。こんなに優秀な民族が東の果てに在るということをも本国の人に見せてやろう、と言う意味もあったのでしよう。日本の独特の文明については、先日（二〇〇一年七月）亡くなった民俗学者の梅棹忠夫さんも同じようなことを言われています（国立民俗学博物館館長、「文明の生態史観序説」）。二つ目は、出来るだけ若い日本のクリシタンにヨーロッパの当時のキリスト教文化の素晴らしさを見せ、感動して帰って貰って、その素晴らしさを日本人に知らせてもらうことにより、布教のスピードを上げよう、と言うものでした。

こう言う目的ですから、ヴァリニヤーノとしては、この使節団には美しいもののみを

見せる。醜いものは眼に入れさせない、と言う方針を立てたようです。このお達は旅の先々まで届いていて、使節の各地での見学に当たって、この辺の配慮がなされたことが分かっていきます。例えば、裸の絵や彫刻は見せなかったそうです。

急な思いつきのことですから、使節団の構成もかなりいい加減なものになります。当時、イエズス会のセミナリオ（これは苗床という意味です）が京都の安土と長崎の島原半島南部の有馬にありましたが、（何れも一五八〇年にヴァリニャーノが創設したもの）一カ月後に長崎を出る船に間に合わせるため、ヴァリニャーノが考えたのは、近くの有馬のセミナリオから団員を選抜することでした。日本の代表として送り出す訳ですから、選考の基準として教養・礼儀・立ち居振る舞いの美しさなどが重視されたとのこと。勿論ラテン語も選考の要素の一つだったでしょう。こうした事情の下で選抜するのですから、かなり無理もあつたようです。第一の条件は幼少の時入信した若者（所謂、幼児洗礼を受けた人）と言うことだったようです。第一世代の日本人キリシタンはザビエル

が布教を始めた直後の一五五〇年代に出来た筈。その人たちの子供が生れて、生れた時に洗礼を受けた第二世代の初穂と呼ばれる人が選ばれたようです。

正使が二人で伊東マンシヨと千々石ミゲル。伊東マンシヨは、最初に一寸触れたように、日向で島津家に追い払われ、綾城から逃れて縁戚関係にあった豊後の大友氏のところに身を寄せていた伊東家の縁戚の子供で、逃れたのがマンシヨ自身が八歳のことだそうです。武士ではあるものの大名の後継ぎと言う訳でもないのですが、大友家の縁戚のその又縁戚に当たると言うことで、これを大友家の名代に仕立てて正使にしました。ややこしい紹介ですが、宗麟の妹の娘の連れ合いの姉の息子、と言うことで血も繋がっていません。

本名は伊東修理亮祐益（しゆりのすけすけます）。幼名満千代。ヴァリニヤーノが行かせたかった候補者は同じく親族の伊東ゼロニモ義勝だったと言われ、この人は信長の前でクラビオと言う楽器を弾いて喜ばれた人だそうです。いずれも都於郡城の城主、伊



東三位入道義祐の孫で、祐益は島津に追われたとき、刀鍛冶国広に背負われて豊後に落ちたとされています。

【大友宗麟（一五三〇～一五七〇）八七年）。サビエルと親交があり、国際感覚の持ち主。これ以前の一五五二年には日本人をローマに送っています。入信は隠居後の一五七八年。アルメイダの病院を援助。現在の太田市は当時キリスト教の日本布教の本部だった。島津の侵攻を一旦押し返した後、日向に神の国作りを夢見て、島津と戦ったが敗北（一五七八年）して断念したと言われる人です。】

もう一人の正使の千々石ミゲルはそれでも一番由緒がハッキリしていた人らしくて、大村家と有馬家双方に縁が繋がっていた武士の息子（大村純忠の甥、有馬晴信の従弟）だったようで、先祖代々千々石に釜蓋城と言うお城を持っていたそうです。この人を大村家と有馬家両方の名代としました。大村純忠は日本で最初に改宗したキリシタン大名で一五六三年入洗し、一五七〇年に長崎をポルトガルに開港しています。その後、ポルトガルとの貿易のメリットを受けるため一五八〇年には長崎をイエズス会に寄託（献

上)しているのです。後で秀吉が取り返したから良いようなものの、そのままだったら長崎はポルトガルの領土になっていたかも知れませんが。自分の国土を外国に売ろうとしたのです。今なら売国奴と言うことになります。

この正使の二人にはキリシタン大名だった三人の殿様(大友宗麟、大村純忠、有馬晴信)からローマ教皇へのご挨拶状を持たせました。マンショの方は、豊後まで大友宗麟の書状を貰いに行く時間もないものですから、現地でゴーストライターが書いたようです。

副使が、私が住んでいる佐世保のすぐ近くの波佐見と言つところから来た豪族の息子で原マルチノ。この人の出自が良く判らないのですが、かなりの秀才だったそうでラテン語が一番出来たそうです。

副使のもう一人が外海と言われる西彼杵半島の外海に面した中浦と言つ小さな村(七ツ釜鍾乳洞の近く)から来た中浦ジュリアンです。(本名小佐々甚吾。一五六九年に大村純忠が松浦と戦つた時、純忠の敗北の殿を勤めて死んだ小佐々甚五郎の息子)

この二人はいずれも家柄は悪くなくてシツカリした躰を受けた人だったのでしよう。使節全員の旅行中の立居振舞は中々立派だった、とのことで、この使節団が高い評価を受ける理由の一つになっています。四人とも十三才から一四才の若さでした。

この他に、デイオゴ・デ・メスキータと言う司祭が同行します(ラテン語の家庭教師。一六一四年長崎で没)。この人がラテン語の家庭教師。従者として二十才台のジョルジ・ロヨラと言う神父(日本語の家庭教師)とアゴステイーノ・コンスタンティーノ・ドラードと言うこれも二十才代の記録係が同行しています。ロヨラとドラードはいずれも日本人で、ロヨラ神父は、若者たちの日本語の家庭教師で現地に立派な日本語の書を残しているそうです(ロヨラ、一五八九年マカオにて肺病で没)。ドラードの方は、ポルトガル人との混血児だったようで、ポルトガル語と日本語が自由に使えるので、選抜の理由になったと思われます。活版印刷の技術を習得させるために連れて行った、と言われています。

この一行が一五八二年の二月に長崎を出てローマまで往復するのですが、日本にはその記録が全く残されていないのです。使節団が帰って来るのが八年後の一五九〇年のことです。信長の外国人好きは知られています。キリスト教の布教を許可し、一五七八年から一五八二年まで信長の下で日本のキリスト教は絶頂期を迎えています。遣欧使節の派遣はヴァリニヤーノが信長に会った時、決心したと言われているほどです。信長の目は世界に向けられていて、宣教師を外交官と看做していました。一五六九年にフロイスに会ってキリスト教の布教を許可したと言われています。

その信長は一行が日本を離れて四カ月後、一行がまだ、マカオ辺りで船を待つてウロウロしている頃、本能寺で明智光秀に殺されてしまい、その後、秀吉の天下になります。秀吉は、最初は九州を平定するためと、その後の朝鮮や中国への侵攻を実現するために、ポルトガルの援助を得る目的でキリスト教を味方につけようとしたようですが、島津と講和を結んで、九州平定がなった途端、信長の布教許可を反故にして迫害者に変身し、一五八七年にバテレン追放令を出してキリシタン禁制の世を作ります。

ですから、一行が帰って来た頃は、キリシタンにとつては、誠に住み難い世の中になつていた訳で、一行は正に数奇な運命を辿ることになります。使節が持つて行つた二つの目的は十分に達成され、各地からのお土産を含めてキリシタン関連の貴重な資料も沢山持ち帰つたのですが、それを公にする場が与えられることはなく、一行が苦勞して持ち帰つた記録なんて、どこかに散逸してしまつたのでしよう。

この使節の存在はこの後、徳川幕府三〇〇年の間全く忘れ去られていて、明治になつてから岩倉使節団がイタリアのヴェネツィアに行つた時、こんな使節が三〇〇年も昔にこの地を訪れたことを知つた、とのことです。岩倉使節団と言つのはご存知の通り、明治維新を推進した元勳たちが、維新の後、これからは外国のことを知らなければならぬ、と言つことで明治四年（一八七一年）十一月から六三〇日もの日数をかけて、世界中を廻つた使節団です。岩倉具視、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文など維新の中核になつた人達が、西郷隆盛や大隈重信などを留守番にして出掛けたもの。維新後、間もな

くのごとで廢藩置縣なんて大変なことをやっている最中ですから、この間留守をして外国の勉強をするなんて、随分思い切ったことをやったものです。アメリカ、英国、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、ロシア、デンマーク、スエーデン、イタリア、オーストリア、スイスと廻って帰って来るのですが、イタリアに入ったのは一八七三年五月だったそうですから、使節団がヴェネツィアで使節団の存在を知ったと言ふことは、この時まで、天正少年使節団の存在は全く忘れられていた、と言ふことになります。この三〇〇年の間は、日本はキリシタン禁制の世の中で、使節の存在を示す資料なんかは散逸してしまふ、と言ふより消し去られてしまっていますから、この使節の記録は、国内には全くなくて、外国の各地に残されたものを頼りにする他ない、と言ふことになります。

一五八二年の二月に長崎を出て、まず、二〇日足らずの航海でマカオへ。ここで一〇ヶ月ほど船を待つて、十二月にマカオ発、四ヶ月掛かってインドのコチン經由ゴアへ。

ここには東インド布教の本部がありました。ここで一〇ヶ月待つてゴア発、インド洋を超え、アフリカの南端を回り、五ヶ月掛かつて、アフリカ大陸の西にあるポルトガル領のセント・ヘレナ島に着きます。セント・ヘレナ島と言えば、思い出されるのはナポレオンです。

ナポレオンは一八一二年にロシアで冬將軍に負けて一四年に一度イタリア半島とコルシカ島の間にあるエルバ島に流されますが、一年後に脱出して再度帝位に付きます。今度は一八一五年にベルギーのワテルローで再度負けて、今度は逃げられないように遠くのこのセント・ヘレナ島に二度目の島流しにされます。死んだのが一八一二年ですから、使節が行った二四〇年ほど後のこと。この島のどこかに使節団の一行が立ち寄ったと言う記録は残っているそうですから、島流しにされたナポレオンも退屈凌ぎにこの石碑が何かを見たことがあつたのではないでしょう。こんな想像をするのも面白いです。それと四〇〇年以上前にエンジンも付いていない、帆だけが頼りの小さな帆船で大西洋の真ん中のこんな小さな島に間違いなく辿り着ける、と言うのも素晴らしい。世

界の近代化に向けての四大発明として、紙、印刷技術（印刷機）、火薬、羅針盤が上げられています。この羅針盤のお陰なのです。

ここで一休みしてから、ポルトガルのリスボンに着くのは、日本を出てから二年半後の八四年八月のことでした。この時代のことですから、それほど頻りに船が世界中を行き来していた訳でもなく、また帆船ですから風を待つ、と言つ必要もあつたのでしょう。大変な時間がかかっています。慣れぬ船旅ですから、船の上での苦労は大変なものだつたらしいのですが、欧州大陸に上陸してからの先方の待遇は悪くなかつたようです。

発案者のヴァリニヤーノ神父はインドまでしか同行できず、メスキータ神父が代わりに勤めましたが、ヴァリニヤーノ神父の依頼状が各地に届いていて、ポルトガル・スペインでは各地で大変な歓迎を受けています。一行はリスボンに上陸します。当時のポルトガルは王国でしたが、一行が着く直前に王家が断絶してしまい、隣のスペインのフェ



リペニ世（一五八一〜九八年）と言う強力な王様が王位を奪い取って、スペインに併合された形になっていました。フェリペニ世という王様は、スペインからイスラムを追い出すレコンキスタ運動の仕上げをしてスペインを統一した有名なイザベラ女王の二代後の王様で、無敵艦隊を持って「太陽の沈まぬ国の王様」として、当時、最も強大な君主と言われていた人です。イザベラ女王は、コロンブスのスポンサーになってアメリカ大陸発見の援助をした女王としても有名ですね。一五七一年レパント沖海戦でトルコの艦隊を破り、無敵艦隊の名を誇ったのですが、この無敵艦隊は一五八八年アルマダの海戦でエリザベス一世時代のイギリス艦隊に敗れるまでのこと。ですから、この三年後には無敵艦隊は消滅しています。

フェリペニ世の時代のスペインは欧州ではスペイン・ポルトガル・オランダ・イタリアの大部分、アメリカ全土とメキシコ、南米のチリ・ペルー・ブラジル、アジアではマラッカ・フィリピン（フェリペニ世の名前が由来）、アフリカのモザンビークなどが支配下で、地球上の各地に領土があるので、「太陽が沈まぬ国の王様」と呼ばれていました。

この王様の威光が行き届いていて、リスボンの代官から大変な歓迎を受けたのが一行の人気のきつかけになつたようです。フェリペ二世差し向けの馬車でトレドを経由して首都マドリードまで行きますが、ここでフェリペ二世自身から異例の歓迎を受けます。普通の客は王様の手に接吻することで挨拶をしたのだそうですが、この使節の全員は王様の抱擁で迎えられたそうです。これは王族に対する挨拶なんだそうで、王様からは「殿下」、と呼ばれ、使節団の人氣が益々高くなります。マドリードの少し北にエル・エスコリアルと言う街があつて、ここにフェリペ二世がフランスとの初の戦争に勝つた記念として作つたと言うサン・ロレンソと言う修道院がありますが、彼らが行つたのがこの修道院が出来た直後だつたそうで、王様がこの四人をここに連れて行つて自ら案内してくれた、という記録が残っているそうです。ここから旅費は先方持ちで、陸路は差し向けの立派な馬車での移動、海上はスペインの無敵艦隊の軍艦に乗せてもらい、艦隊司令官がお供すると言つた具合です。地中海側のアリカンテと言う港まで行き、ここから船に乗つて、イタリアのリヴォルノに向かいますが、船を使つと風待ちが発生するし、こ

の時期には地中海にはイスラムの海賊が盛んに活動していたそうで、（この辺は塩野七生さんが一五年掛けて書いた「ローマ人の物語」の続編として書かれた「ローマ亡き後の地中海世界」に詳しく描かれています）このためマジヨリカ島に避難していたりして地中海の横断に二ヶ月もかかっています（リヴォルノ着一五八五年三月）。余談ですが、「ドン・キホーテ」を書いたセルバンテス（一五四七～一六一六年）は海軍の無敵艦隊の軍人だったのですが、レパントの戦いの後、無敵艦隊を退任し、帰国の途中で海賊に拉致された（二十八歳の時）のだそうです。二年間奴隷生活をした後、買い戻して貰って帰国後文筆活動を始めたのです。この頃は三十七歳くらいで、マドリードの辺りをウロウロしていたことになります。セルバンテスが「ドン・キホーテ」を発表するのは一六〇五年のことですが、彼が「ドン・キホーテ」を書く手を休めて自分の家の二階の窓から一行の行列を見ていたかも知れない、なんて想像するのも面白いではありませんか。

ここでイタリア半島に上陸するのですが、イタリアは、ガリバルディとエマヌエレ二世が南と北から攻めて国を統一して一つの国にするのが十九世紀のことですから、当時

のイタリアは、まだ一つの国ではなくて都市国家の集まりでした。実質的にはローマ教皇領とヴェネツィア共和国を除いてスペインの支配下にあつたと言われています。

一行が上陸したリヴォルノの辺りはトスカーナ公国です。この地方はルネッサンス文化の保護者として有名なメジチ家が支配していました。（有名なコジモ・デ・メジチが一五三七年に初代のトスカーナ大公になりました。）

ご存知の通り、ルネッサンスは十三世紀の後半にフィレンツェに始まつた一種の文化革命です。それまでのヨーロッパの文化・芸術は文学でも美術でもキリスト教文化に支配されてきました。絵画でもそれまでの絵は、平板な宗教画ばかりでしたが、この時期から大きく変わります。パリのルーブル美術館に行くと、年代ごとに並んでいる絵の調子が、十三世紀までのものとそれ以降のものとは全く違ったものになっているのが良く判ります。ルネッサンスと言うのはキリスト教文化から逃れて、自由に表現しようとする動きです。キリスト教文化から逃れると言うことは、キリスト教以前に戻ると言うこと。つまり一三〇〇年前のギリシャ・ローマの時代の感覚に戻ると言うことになりま

す。美術に関して言えば、例えば、キリスト教で汚らわしいものとされていた人間の裸体の美しさが再発見されました。ギリシヤやローマ時代の美しい彫刻なんかが見直されるようになります。芸術にはお金の裏付けが必要で、どうしてもパトロンになってくれる人が必要です。メジチ家はこれらの芸術家を大変大切に保護しましたが、メジチ家没落の後には、金を持っているのはローマ法王と言ったことになったので、ローマ法皇がルネッサンスを支えることになります。

一行はまず、近くのピサに寄りますが、ピサの斜塔が完成したのが一三五〇年ですからこの子達もこの珍しい建造物を見たことと思います。この斜塔は年々傾きが大きくなっていくそうですから、当時は傾きがまだ今よりも少なかったかも知れませんが、ピサの斜塔はガリレオが大きさの違う二つの鉄の玉を落として重力の実験をしたことで有名ですが、当時ガリレオはまだ二十四歳の頃で、この実験をしたのは、彼らがここを訪れた直ぐ後の一五八五年か八六年のことでした。この実験は自由落下の実験で、重さが異なってもモノが落ちる速度は同じ、と言った理論の実験です。アームストロングが初めて

月に降り立ったとき、真空の状態の中でハンマーと鳥の羽根を落として実験して、これを証明したと言われています。

この後、トスカーナ公国の首都フィレンツェにも立ち寄っています。

フィレンツェでは今も美術館として残っているベッキオ宮殿に宿泊していますが、大理石で美しいドウオーモ（一四三六年完成）もありましたし、彫刻品で飾られたシニオーリア広場も訪れたことが記録に残っています。シニオーリア広場にはミケランジェロの「ダビデの像」、私の好きな「サビーナの掠奪の像」、メデューサの首を持った「ペルセウスの像」（ペルセウスと言うのはゼウスが黄金の雨に化けて人妻のダナエのところに忍んで行って作った子供。蛇の髪を持つ化け物メデューサの首を取った）などが並んでいるのですが、美しいものだけを見せろ、と言うヴァリニヤーノの指示で、裸のダビデなんかは見せなかったことが記録に残っているそうです。サビーナの掠奪の像は裸の女性が男に拉致されようとしている像ですから、これなんかは絶対に見せて貰えなかったと思います。ポンテ・ベッキオ（古い橋）を渡って対岸のピッティ宮殿に行っ

の記録も残っています。当時のイタリアはルネッサンスの最後の時期に当たりますが、彼らはルネッサンス文化に直接接した唯一の日本人だったと思われる。

ポツティッチェリの「春」や「ビーナスの誕生」も既に描かれていました。これらの絵は現在ウフィッツィ美術館に展示されていますが、ウフィッツィは当時メジチ家のオフィスとして使われていた訳ですから、これらの絵もどこかに飾られていた筈ですが、これらも女性の裸体の絵なので見せて貰えなかったのではないのでしょうか。

三〇〇〇人の見送り人に国境まで送られてローマ教皇領に入り、ローマ入りしたのは、八五年三月。日本出發後三年一カ月後のことでした。ローマ教皇に会いに行くための行列はローマ未曾有の行列だった、と言われます。

この時期はポルトガル人のマゼランが一五一九年にマゼラン海峡を発見して世界一周をしてから間もなくの頃で、それまでは欧州の他の土地には人間は住んでいない、とされていたのに、他の土地にも人間がいることが分かり、ローマ教皇が「彼らも人間だ」なんて全く失礼な宣言をしたのがホンの数十年前と言うことですし、ルネッサンス最後

の天才と言われるガリレオ（フィレンツェ生まれ）がコペルニクス（ポーランド）の天動説（一五四三年）に賛同する発言をし、宗教裁判にかけられて「それでも地球は廻る」と言ったのが、この後の一六三三年ことです。そんな時代ですから、地球の裏側、言わば地の果てから来た一行が大変に珍しがられたことは容易に想像できます。当時のローマ教皇はグレゴリウス十三世と言う方でしたが、この方に大変な歓迎を受けることになります。この人は一五八二年にそれまで世界中で使われていたユリウス暦を改正して現在の太陽暦の原型であるグレゴリウス暦を作って制定したことで有名な人。それまでは紀元前一世紀の頃シーザーが作った暦を使っていました。

まず、宮殿内の帝王の間での謁見が許されました。これは国王並みの扱いと言われます。さらに、普通の人は教皇にご挨拶する時は、ひれ伏して教皇の足に接吻する、と言うのが決まりだったそうですが、使節の一行がその挨拶をしようとしたら、教皇がそれを止めて夫々を抱擁してくれる、と言う異例の扱いをしてくれたそうです。その後、行列で法王の衣の裾を持つ役をやらされたとのことで、これも特別の格の人に許される大



変な名誉なんだそうです。グレゴリオ十三世は当時既に八十四才と言う高齢で、使節の到着を待っていたように、一行を謁見した一八日後には亡くなってしまつたのですが、その遺志が次の教皇のシスト五世に引き継がれます。グレゴリオ十三世の葬儀の式典やシスト五世の戴冠式で一行は重要な役割を演じ（例えば、シスト五世の戴冠式でマンシヨがミサの際、新法王の手に水を注ぐ役を仰せ付けられた）その際の立ち居振る舞いが中々立派だったと言うこともあつて、評判がドンドン上がります。日本からの使節ということで、人気が高かったのをグレゴリオ十三世やシスト五世が自分の宣伝のために利用したと言う説もあります。丁度、宗教革命の直後で、偶々大航海時代の最中で植民地獲得競争が始まつた時期。カソリックが欧州の宗教革命でプロテスタントとの戦いに負けた後、植民地への布教に力を入れるようになった。特にグレゴリオ十三世と言う人はアジア・アメリカの布教に力を入れた人。その成果が出たということで、プロテスタントに対抗するための派手なパフォーマンスをしたのではないかと説もありませんが、基本的には式典でのお役目を始めとして、一行の態度が立派だったという要件があるよう

です。当時の武士の子供はどこへ出ても品のある立派な態度が取れた。それなりの立派な教育を受けていたと言つことでしょう。

一行は四人だったのですが、派手な行列のパフォーマンスの後で教皇に拝謁したのはジュリアンを除く三人だったと言つことが割りと有名な話になっています。これは中浦ジュリアンが病気をしているで参加できなかったのが理由とされていますが、その後の調べで、これは事実ではないのではないか、とも言われています。ご存知のようにキリストが厩小屋で生れた時に、東方から三人の王様が馬に乗って、捧げ物を持ってご挨拶に見えた、と言つのが言い伝えになっています。東から来る王様や王様の代理は三人でなければならなかった、と言つのです。中浦ジュリアンは病気をしていたのは事実らしいのですが、拝謁に参加できないほどではなかった。数を合わせるために、病気を理由に外されたと言つのが真相らしい、と言つ説があるのです。病気が大したことがなかった証拠にその前後にジュリアンは一人で教皇にお目にかかっています。中浦ジュリアンはこうして教皇から特別な思し召しを頂いたということで、日本に帰ってから最後まで

信仰を捨てずに布教を続け、拷問に耐えて殉教したんだ、と言う説に繋がっているのです。

ローマでは勿論サン・ピエトロ大聖堂に何っているのですが、真ん中のキューポラ(大ドーム)の部分はミケランジェロ(一四七五年生れ一五六四年没)の設計で、彼が死んだ後の一五九〇年に完成しますから、一行が行った時はこの部分はまだ工事中だったことになります。完成の直前ですから、もう形は出来上がっていたのではないのでしょうか。勿論、大聖堂の入り口にはミケランジェロの「ピエタの像」はあつた筈ですし、ラファエロが描いた「大公の聖母」と言う名画も、マリア様とキリストの絵ですから、こんなものは見せて頂いたものと思われます。システィナ礼拝堂は法王の礼拝堂ですから勿論拝観させて頂いているものと思われます。ミケランジェロが描いた旧約聖書の創世記の「天地創造」の天井画(一五〇九年完成)やムキムキマンのキリストがいる「最後の審判の壁画」(一五四一年完成)も眼にした筈です。システィナ礼拝堂というのは、ご存知のように、法王が亡くなって次の法王を選ぶ時、五〇人以上の枢機卿が籠ってこ

ンクラーベと呼ばれる選挙をやる場所です。バチカン宮殿のシスト五世の間には戴冠式の壁画があつて、この中に四人の使節の姿も描かれているのですが、ここは一般には公開されていないので私も観たことはありません。(後でご紹介する天草のコレジ才館にこの絵の複製が飾つてありますので、ご興味があれば行つて見て下さい。) 私はローマには仕事を含めて何度も行きました。システイナ礼拝堂に入ったのは二度だけです。大好きな礼拝堂で、今でも、世界中でどこに行きたいか、と言われたら、間違いなく、もう一度システイナ礼拝堂を見たい、と答えます。

八五年の六月にローマを離れて、帰国の途に着くのですが、地球の果てから王子様が来ている、教皇が帝王の間で謁見された、教皇さまが異例の扱いをされた、と言つことが広まつてその後の各地での歓迎振りはどんどんエスカレートして度を越したものになつて行きます。前の町での歓迎を上回る歓迎をせねばならぬ、と言つた如何にもイタリア人らしい調子でポリウムが上がります。六月にローマを出て、アッシジを経由し

てロレートと言う町に立ち寄ります。ここは聖母マリアが天使ガブリエルからキリストの受胎を告知されたナザレの家と伝えられる建物がある町です。「受胎告知」は昔から多くの画家の絵の画題になっています。そう言えばフィレンツェの現在のウフィッツィ美術館にはダ・ヴィンチの「受胎告知」がありました。キリスト教の原点に当たるような絵ですから、彼らも観せてもらったことと思います。次いでボローニアを経由してヴェネツィア共和国に入ります。

ヴェネツィアはこの当時、ヨーロッパの最強国の一つで、周りがスペインの支配化にあつたのに、ただ一人独立国でした。五世紀末にフン族のアツチラ大王の侵略を防ぐために海の上のラグーナと呼ばれる湿地帯に都市を作つてアツチラを負かし、その後強大な海運国になつたのですが、当時はその全盛期で、フィレンツェで始まつたルネッサンスがヴェネツィアに移つて花開いていた頃です、ですからヴェネツィアの町のたたずまいはこの当時から殆ど変わっていないのではないか、と思われれます。ナポレオンが褒め称えたと言う今でも美しいサンマルコ広場（キャサリン・ヘップバーンの名画「旅情」の舞

台になった)の正面に残っているパラッツォ・ドウカーレ(大統領宮)で大統領(ドゥージェ)に謁見し、ここでも大歓迎を受けます。海上バスのヴァレットやゴンドラが行き交う運河も迷路みたいな細い小道もレアルト橋も溜息の橋もこの子達は今あるままを見たものと思われます。

次のミラノはスペイン領でしたが、スペインのミラノ総督がフェリペ国王の命に従って、他の各地に負けない歓待をすることにして金と人に糸目をつけない歓迎をしたため、ここでの歓迎が最高のものだったと言われます。サンタマリア・デッラ・グラーチエ教会のダ・ヴィンチの「最後の晩餐」(一四九七年)も観たと思われます。この絵は教会の食堂と言われるところの壁に描かれた壁画ですから、今は汚れて見難くなっています。彼らが見た最後の晩餐は、もっと綺麗なものだったでしょう。有名なミラノのドゥオーモの完成は一八〇五年のことですが、当時は既に工事中だったと言われています。この後ジェノバまで、この歓迎合戦が続いたと言われます。尤も歓迎の仕方と言えば、盛大な歓迎パレードをやる、歓迎の式典と大宴会をやる、夫々土地の名所を案内して、

ここでもパーティーをやる、と言うことでしようから、一行にとっては大変に迷惑なことだったようです。慣れないパーティーで言葉（イタリア語）もわからず窮屈な眼に遭わされるし、ダンスを強要されたこともあったそうです。第一、当時の日本人の食事は昨今のものとは大違いの筈で、お米とごく軽い野菜やお魚中心のおかず程度だったのでしようし、肉や牛乳の類は口にすることもなかったでしょうから、身体にも合わなかったと思われます。今の我々でも外国旅行をすると、直ぐにご飯とおみおつけが恋しくなりますが、昔の生活に育った彼らにとつては、それ以上の苦しみだったと思います。若いとは言え一行も大分参ったようです。強行軍の所為もあつて、代わりばんこに病氣になつたりしています。

八五年八月ジェノバからまたスペイン艦隊の軍艦に乗つて海路八日間でバルセロナまで行き（往きに二ヶ月掛かつたのとは大違い）、陸路マドリッドとエボラを経由してリスボンに戻つたのが、八五年十一月のことでした。このエボラには行きも帰りも立ち寄つていますが、ここの大聖堂（カテドラル）で一行がパイプオルガンの腕を披露した

と言う記録が残っているそうです。このパイプオルガンは今も残っています。リスボンでは暫く休養の後、近くのコインブラ（ポルトガル最古の大学がある街（一二八八年創設、一五三七年コインブラに移設）と言う街まで往復しています。

リスボンを出たのが、八六年の四月。アフリカ南端の喜望峰を回って、アフリカ東岸、マダガスカル島の対岸のモザンビークに着いたのが九月。大変気候の悪いところだったそうですが、ここで半年以上船と風を待っていた、と言いますから、当時の航海が如何に大変だったか、が判ります。ゴアで待っていたヴァリニヤーノがお迎えの船を手配してくれて、これに乗って二ヶ月でインド洋を横断してインドのゴアに戻ったのが八七年五月のことでした。

一行が日本に戻ってくるのが一五九〇年七月のことですが、この三年の間は世の中が変わってしまった日本に無事に帰れるかどうか、の様子見の期間だったと思われれます。



最初に申し上げたように一五八七年には秀吉がキリシタン追放令を出していますし、彼らを送り出した大友宗麟と大村純忠はこの一五八七年に相次いで亡くなってしまっています。帰っても大丈夫なのか、心配したのも当然のことだと思えます。

帰国の許可を待つて、ゴアでヴァリニヤーノへの報告も含めて一年足らず、マカオで二年足らずを費やしています。ここで使節の一行がヴァリニヤーノに旅行の様子を詳しく報告して、これを元にヴァリニヤーノが「遣欧使節対話録」を書いて、これが貴重な資料になっていますが、どうやらこの対話録なるものは使節の報告書そのものではなくて、ヴァリニヤーノが自分の都合の良いように脚色して書いたもの、とされているようです。

秀吉の入国許可を得て一行が長崎に帰って来たのが九〇年七月のこと。八年二ヶ月と言つ大変な旅行をして帰ってきたものの、一行のその後は恵まれたものとは言えません。翌年の九一年春、一度秀吉に謁見の機会は与えられましたし、一行を送り出した三人の

大名の内唯一生き残っていた有馬晴信（このお殿様は一六一二年に家康に斬首されま  
す）には歓迎会をしてもらったものの、その後は受難の日々になります。この内の三人  
は周囲の反対も押し切って、自分の意思で信仰の世界に入り、イエズス会入りして司祭  
になるための勉強を続けます。司祭になるのは大変で、ラテン語で神学・哲学・倫理神  
学などの高度の学問を修学することが必要だったそうです。

正使の伊東マンシヨは一六〇一年にマカオに留学し、一六〇八年に司祭になって布教  
活動を行っていました。一六一三年に四十二歳で長崎で病没します。

もう一人の正使千々石ミゲルは帰国早々と棄教して日蓮宗に改宗してしまいます。ミ  
ゲルと言う名前も捨てて清左衛門と言う名前に戻り、大村藩に仕えますが、その後は不  
遇な人生を送り、六十四歳で亡くなったとされていますが、死んだ年も場所もハッキリ  
しないのです。（最近、村木嵐と言う新人が書いて、松本清張賞を取ったという「マル  
ガリータ」と言う本があります。ミゲルが棄教したのは、大村の殿様を救ったため、か

つ隠れて布教しているジュリアンを匿うためだった、との物語になっていますが、これは全く根拠がなくて、飽くまでフィクションではないかと言われています。

ラテン語が一番出来て、秀才と言われた副使の原マルティノはマンシヨと同じ一六〇八年に司祭になり、宗教書の翻訳と出版に力を注いだそうです。一五九五年にラテン語・ポルトガル語・日本語の辞書を編纂したと言われていますが、幕府の大追放令でロードとともに一六一四年にマカオに流刑となり一五年後ここで病死。二〇〇八年、長崎での列福式で福者に列せられたペトロ岐部は有馬のセミナーオで彼ら四人の一〇年程後輩ですが、同じ一六一四年にマカオに流されていますから、先輩のマルティノと同じ船で流されたのではないのでしょうか。ペトロ岐部はここから脱出して自分の足でローマに行つて、司祭になり、日本に戻つて布教活動をした後、殉教しています。

もう一人の副使の中浦ジュリアンは一六〇八年、マンシヨ、マルティノと共に司祭になりました。ローマで病気をしていたせいで、教皇グレゴリオ十三世に一番大切にされ、思いも深かったせいでしょうか、追放令が出た後も日本に残つて潜伏して最期まで苦し

い布教活動を続けましたが、一六三三年一〇月に六十四才で凄惨な殉教を遂げます。遠藤周作の「沈黙」と言う小説に出てくるのですが、一緒に捕まった当時の日本イエズス会の最高位のクリストヴァン・フェレイラと言う宣教師と一緒に長崎の西坂の処刑地で穴吊りの刑と言う拷問を受け、フェレイラが棄教する場面が描かれています。フェレイラは棄教するのですが、ジュリアンは最後まで棄教せず、ここで殉教するのです。二十六聖人の処刑はこれ以前の一五九七年のことですから、ジュリアンは二十六聖人の中には含まれていませんが、二〇〇八年の四月に十七世紀前半の日本人殉教者一八八人と共に聖人に順ずる福者（ふくしゃ）に選ばれ一一月に列福式の式典が行われました。

遺跡を訪ねて見ました。遺跡と言っても、この人達の所謂遺跡は、殆どと言うより全くありません。比較的最近作られた記念碑の類と言うことになります。まず、一五八〇年にヴァリニヤーノによって有馬に建てられたセミナーリオは戦火や禁教令の影響で三度移動したそうですが、最後はこの辺にあつたのだらうということで石碑のみが建てられています。それこそ何のロマンも感じられない住宅地のお医者さんかなんかの家の前にピカピカの碑が立っているだけ。(二〇〇二年建立) 島原の日野江城跡の近くです。

正使の伊東マンショについては、私がこの勉強を始める切っ掛けになった綾城に再度出掛けてみました。西都市に都於郡城の城跡が残されていて、この本丸のところに銅像と顕彰の碑、生誕地の碑などが並んでいて、大事にされています。これらの写真を撮るために佐世保





から往復八〇〇キロ  
 のドライブをしまし  
 た。たつた一枚の写真  
 を撮るために八〇〇  
 キロのドライブをす  
 るなんて、七十歳の老  
 人がやることなのか、と  
 思いながらハンドルを握  
 っていました。一番古い



顕彰の碑が昭和三十八年の建立、銅像は平成八年の建立で  
 す。

もう一人の正使の千々石ミゲルの出身地は、島原半島の  
 付け根の千々石です。日露戦争時の軍神橋中佐を祀った橋





神社と言うのがあって、この神社の中にミゲルの碑の入り口があるのが何となく面白いと思いました。橘神社から入って山の上に釜蓋城の跡があつてその隣に小さな碑がありました。探すのに苦労しました。標識も不完全だし、土地の人も良く知らないみたい。知つていても、教え方も何だか不親切。初志を貫徹できず棄教した人、として地元でも評価されていないか、と勘ぐりたくなり





ました。（碑の建立が昭和三十五年ですから、私が見た中では、これが一番古いものです）千々石綜合庁舎の近くに銅像が建っていますが、これも平成になつてから建てられたものでしょう。最近（平成十六年）みかんで有名な伊木力にお墓が見付かったと言つので行つて見ました。」

#### Rの大草駅の

線路脇の岡の上にありました。案内もお粗末でお寺も何もない淋しいところ。お墓のある土地は仏教のお寺のあるところではなくて、キリシタンの墓地の地域だったと言われている、ミゲルは死ぬ時にはキリシタンに戻っていたのではないかと考えられて





いるそうです。大村藩に酷い目に遭わされたので、これを恨んでお墓が大村藩のある方向に向けられて建てられている、なんて解説が付いていました。

副使の原マルティノの出身地は、これもこの近くの波佐見と言ったところです。どんな出自なのか全く判らないようですが、どうやら波佐見の豪族の息子らしい。秀才マル

ティノと言われ、ラテン語が出来て、帰ってきてからマカオでヴァリニヤーノ師にラテン語で立派な報告の演説をしたと言われている人ですが、この人の記念碑は波佐見町の総合文化会館の前に立っています。およそ新しいもので、平成十年にこの文化会館が出来た時に建てられたものようです。

もう一人の副使の中浦ジュリアンの出身地は私





の家から一番近くて、西彼杵半島の外側、外海（そとめ）と呼ばれるところです。当時「館（たち）」と呼ばれた中浦に居を構えていた小佐々家から出ています。（本名小佐々甚吾）こちらは観光の呼び物の一つとして大事にしている様子が伺えました。

記念碑（平成元年建立）もすぐに判りました

し、新たに銅像を作つて公園が作られていました。

（平成十三年完成）

こうしてこの四人の遺跡と言えるものは何もな

く、極く最近、皆平成になつてから、観光目的に建



てられた記念碑の類のみです。唯一遺跡と言えそうなものに、ミゲルのお墓があります  
が、これとて本当にそうなのか判らない。案内板にも「千々石ミゲルと言われている人  
の墓」と書いてあるほど。四〇〇年昔の四人の若者の八年間の苦勞とその後の歴史に翻  
弄された数奇な運命の結果、残されているものがこんなものでしかなかった。それほど  
キリスト教弾圧の力が強かったのだ、ということなのでしょうが、この子達にとっては、  
自ら選んだ人生ではなかったはずです。生れた時に洗礼を受けて入信した若者を選んだ  
とのことですから、自分の意思で入信したとは思えません。十歳とか十一歳でセミナー  
オに入学、当時は十三歳から十四歳で成人と看做されていたと言われますが、自分の意  
志がどこまであったのだろうか。その結果の人生をこの子達がどんな気持ちで一生を送  
ったのだろうか。帰ってきた時はもう二十歳を越えていましたし、その後自分の強い意  
志で宗教活動に入ったとされていますが、歴史に翻弄された本当に可哀相な人生だった  
んではないかな、と哀れを感じました。

この使節の目的の一つとして、布教のための印刷技術を学ぶことがあったとお話ししましたが、有名なグーテンベルグの印刷機を持ち帰り、一五九〇年には加津佐に印刷所を作りました。東洋では唯一の印刷所と言われ、これは活躍したようです。この印刷機が現在復元されて天草のコレジオ跡に現存している、と聞いていたので、先日確かめに行つて来ました。伊東マンシヨの遺跡の写真を撮るときは八〇〇キロのドライブでしたが、印刷機の写真を撮るために五〇〇キロのドライブをしました。天草の河内浦のコレジオ館に立派な木製の印刷機がありました。コレジオ館の館長さんの説明によると、これは復元されたものではないそうです。本物はコレジオの移転に伴って、加津佐から天草に来て、その後長崎に移され、



最終的には宣教師の追放とともにマカオに送られてしまったとのこと。現在あるものはドイツのドレスデンのグーテンベルグ博物館に頼んで、当時の印刷機はこんなものであったろう、と言っことで作られた言わば複製です。図面も残っていないそうですので、想像で作られた、と言った方が良いかも知れません。この印刷機で七年間に二九種類ものキリシタン関係の本が印刷された、とわれています。一五九五年に天草版羅葡日対訳辞書が印刷されています。この辞書の制作にマルティノが関係したかどうかは確認できていない、とのことですが、何らかの関係があったと想像したいと思います。印刷機の後ろに見える絵が、先程ご紹介したシスト五世の戴冠式の壁画の複製です。

私の家の近くを散歩していたら、JRハウステンボス駅の近くで偶然、ジュリアンの父親小佐々甚五郎が殿様の大村純忠を守る戦で負けて切腹したところ、という碑を発見しました。四〇〇年前にはこれらの人たちがこの辺りをウロウロしていたと言っことです。何だか歴史が身近なものに感じられたことでした。

最初にご紹介した大村空港前の銅像は、この使節が長崎を離れた一五八二年から四〇〇年目の昭和五十七年（一九八二年）に建てられたものです。お粗末なご報告で失礼しました。ご静聴を感謝します。



（平成二十二年九月四日、長崎楽会長崎会例会での講話）

## フェルメールと私

佐世保在住会員の長島です。こちらの会にも度々顔を出していますので、ご存知の方もおられると思います。

今日ご披露しようとしているのは、十七世紀のオランダの画家のフェルメールについての話です。



実はこの話は、この二月に長崎の会でお話したことがあ  
るのです。最初に、長崎の会長の堀さんからこの話をするようにお勧めがあった時は、  
私が絵の専門家でも何でもないこと、この話はこの会の趣旨である歴史にも関係のない  
こと、更に長崎にも関係がないこと、を理由にお断りしたのですが、聞いて頂きたい  
部分もあるので、堀さんの「フェルメールはオランダだ。オランダなら長崎に関係があ  
る」と言っ理屈と言っか屁理屈に従っこととしてお話しさせて頂くことにしたのでした。

今日はその再現です。

私は昔からこうした大勢の方の前でお話する時は、出来るだけ下らない話をしてはいけない、少しでも役に立つ話をせねばならない、と思つて来ました。例えば一〇分間の話を一〇〇人の前でするとしたら、一〇〇〇分つまり一七時間近い他人様の貴重な時間を私のために使つてもらつてことになると思います。他人様に無駄な時間を使わせては申し訳ない。何か「聞いて良かったな」と思われるような話をせねばならない、と心掛けて来た積りです。ところが、今日の話は、全く専門外の話だし、役に立つような話ではないような気がします。これから一時間半ほど、三〇人ほどの方の時間を頂戴するわけですから、合計で四五時間、と言つことは二日近いの時間を私のために割いて頂くことになる訳ですが、私の感想と言つか自叙伝の一部みたいなものを聴いて頂くことになるので、何だか申し訳ない気持ちでこの場に立っています。これから世界の名画と呼ばれるものを幾つかご紹介します。キツと皆さんもご存じの絵ばかりだと思つので、「ア、



この絵は知っている」「どこかで観たことがある」と思いながら気楽に聞いて下さい。

申し上げた通り、私は美術に関しては全くの素人です。でも、単に美しいものに接するのが好き、と言うだけの理由で、世界中の絵は本物を大分見て来た積りです。それでも良い絵とか、有名な絵の本物に接する度に、申し訳ないな、と思い続けて来ました。世の中には本当に絵の好きな人がいます。経済的な理由や物理的な理由、或いは健康上の理由でそれが叶わない人がずい分沢山いると思うのです。私が絵の関連で一番感動的だと思つて覚えているのが、子供の頃読んだ「フランダーズの犬」と言う話です。皆さんもご存知だと思いますが、オランダのフランドル地方（今のベルギーの辺りです）に絵が好きで上手なネロと言う少年がいて、アントワープの聖母大聖堂教会に飾られているルーベンスの絵「キリストの降架」が見たくて堪らない。何故だか、特別な時にしか見られない仕掛けになつて居るのですが、一生に一度で良いから見てみたいものだ、と思ひ続けています。絵のコンクールに落選して失意のどん底にあつた雪の夜に愛犬パト

ラッシュと一緒に首尾良くこの教会に忍び込んで見ることに成功するのですが、そのままその絵の前で愛犬と一緒に凍えて死んでしまう、と言う話でした。この絵はキリストが十字架にかけられて磔の刑にされた後、聖母マリアや弟子たちやマグダラのマリアなんか、悲しみながら十字架から降ろしている絵で、この画題は色んな画家によって描かれています。ルーベンスが描いたこの絵はその中でも名作の一つとされています。

世の中には絵が好きで上手な、ネロ少年みたいな気持ちの人が大勢おられるに違いありません。私の美術に対する知識と云えば、せいぜい中学校の図工の時間に美術の先生に見せて貰った絵や彫刻の写真や、若い頃に買った美術全集での知識です。そ

んなお粗末な知識しか持ち合わせていない私が、それらの貴重な絵や彫刻の本物を見ている。単なる好奇心で観ているのです。美しいな、とは思いますが、ただそれだけのこ



とです。名画に接しても、ネロ少年のような感動は覚えていないでしょう。本当に見たいと思っている人に見せて上げる方が、絵を描いた人も喜ぶだろうし、絵そのものにとっても喜ばしいことではないかと思えます。また、その方が世の中の役に立つのではないか、と思うと、そうした絵を見る機会を頂戴する度に、勿体ないな、申し訳ないな、と言う気持ちになったものでした。

私がこういう機会を多く持たせて貰ったことについては、理由があります。その辺をお分かり頂くために、少し自己紹介をします。

私は昭和二十年、終戦の年に東京で空襲に遭って家を焼かれてしまって、長崎に疎開しました。小学校二年の時です。最初は大村に住んで、小学校の高学年から高校卒業まで一〇年ほど長崎で育ったのですが、親父が商船学校出で船乗りだったせいか、小さい頃から船が好きで、船乗りになるのが夢でした。ところが船乗りの苦勞を身に沁みて知

っている父からきつく止められて、結局、東京の文化系の大学に行くことにしました。大学を出ても船に関係する仕事がしたい、とは思ったのですが、英語の勉強が嫌いで、大学では殆ど勉強せず、成績も良くなかったものですから、船会社や商社に行くことは諦めて、船を造る方なら英語の心配はないだろう、と言つ浅はかな考えで、造船会社を選びました。長崎の三菱造船の本社の三菱重工工業に入社したのです。配属されたのが首尾良く船の関係ではあつたものの、これが輸出の最前線の部署だったので。電話を取るといきなり「ハロー」なんて声が飛び込んできて飛び上がったこともありましたが、「一寸お待ちください」のひと言が言えなくて、最初は少し分怖い思いもしました。大が一橋大学と言つところだったので、一橋なら英語は出来るだろう、と言つ偏見を持つた先輩にしごかれ、英語については強烈なオン・ザ・ジョブ・トレーニングの洗礼を受けて、「習つより慣れる」の勉強で何とか英語で商売が出来るようになり、香港と英国で海外駐在員を二回経験し、海外出張にも何度となく出掛けることになりました。先日数えてみたら、海外に出掛けた回数が四五回、訪問した国の数は三八か国、海外で過

ごした日数が一六〇〇日を超えていました。商社の人ならこれくらいの日数は驚くほどではありませんが、メーカーの社員としては数多くの海外経験をさせて貰った方ではないかと思います。(海外で過ごした日数は、三菱重工時代が一二六〇日、ハウステンボスに来てから二五〇日、引退後お遊びで出掛けたのが九〇日と言つことになります。)

海外出張も仕事の性質上、一人で行動する機会が多かったので、仕事さえ片付ければ自分の自由になる時間が出来ます。これが偉い人のお供の鞆持ちで行くとか、逆に自分が少し偉くなつて鞆持ちのお付が付いてくるような出張だと、仕事の合間に自分で自由に使える時間が少なくなるのです。一人で歩いていた期間の自由な時間を利用して、その土地の名所・旧跡を観光したり、夜の時間を利用してミュージカルや音楽なんかの観賞に出掛けたり、美術館や博物館を訪れたりしたのです。ここには当時の私の上司はおられないと思いますので、こんなことを言つ必要はないのですが、自由な時間を自分のために使わせて貰つたことはあつたけれど、仕事を疎かにしたことは一度もなかった、と、これだけは申し上げておきます。

こんなことが出来た背景には、そこに行けば何がある、と云うことを知っていることが重要です。観光旅行でも同じことが言えますが、あそこへ行ったらあれを見て来よう、と云う意識が大切です。「あそこへ行ってアレとコレを見て来た」と云う旅行と、「あそこへ行ったらアレとコレを見て来よう」という目的を持って行く旅行とは、質が全く違つて来ます。私は旅行に出かける場合は常に目的を持って出かけるよう努めている積りです。私は観光旅行の価値は、行った先の国々やその土地について、自分が過去に蓄えた知識が如何に豊富だったか、によつて変わるのではないか、と思つています。歴史にしても地理にしても芸術や文化にしても、知識があれば見方が違つて来て、得るものも多い。外国に観光旅行に行つても、漫然と見て回るだけでは、単に、行つて来た、と云うだけで残るものが何もないのではないかと思つのです。

芸術院会員で、文化功労者に選ばれ、八十六歳で文化勲章を受章した大分県の白杵出身の野上弥生子と云う人が書いた「欧米の旅」と云う紀行文を読んだことがあります。

この辺の知識の集積が凄い。学者のご主人に同行して一年ほどで世界一周して来る間の旅行記なのですが、何処へ行っても周辺の知識の深さには驚くばかりでした。それと観察眼の鋭さ、感性の豊かさ、表現力の豊富さなど、やはり名を残す人はそれだけのことがあります。実は、私も紀行文らしきものを書く際は、この辺を意識して書いて来た積もりですが、この深さには足元にも及ばない、と言う感じがしました。素人の駄文的な紀行文とはダンチだと言うことを再認識しました。こんな比較を試みることにすら誠に失礼なことなのかも知れませぬ。司馬遼太郎さんの「街道を行く」のシリーズにも同じことを感じます。司馬さんの勉強には凄味さえ感じられます。長崎の周辺も大分歩いておられるらしく、大分昔の話ですが、ハウステンボスの当時の神近社長と会食の機会があったのです。その時、神近が地元の西彼杵半島の話を始めたら、司馬さんの方が詳しくあったものですから、神近が閉口して何も言えなくなってしまうた、なんてことがあったそうです。神近と言う人はあれだけのことをやった、私は天才の一人だと思っているのですが、そんな人ですからご想像頂けるように自信が強くて、何に付けても自分が一

番知っている、と言う感じの人で、私も近くにいて、敵わない人だな、と思わされることが多かったのです。その上、彼は地元の町役場の役人でしたから地元のこととは一番の得意分野だった筈です。その神近が得意分野の話題で何も言えなくなって閉口している姿なんて、想像するだけで面白いし、司馬さんの凄さを感じさせられます。

申し上げたように私の美術に関する知識は中学校の図工の時間と美術全集の程度のお粗末なものでしたが、それでもそうした意識を少しでも持っている、一寸した時間を利用して、目的を達することが出来るのです。そして長年こうした努力を続けていると、知らない内にある程度のことが出てくるものなのです。平成十八年一月の日本経済新聞に「一度は見たい世界の名画」と言う特集が掲載されていて、アンケート結果の一位から十位までが掲載されていました。読んでみると私は、その時点でこの内の何と九点までの本物を実際に見ていたのです。これはやはり凄いことではないか、とその時思いました。



それらの絵をご紹介しますと、



一位がダ・ビンチの「ラ・ジョコンダ（モナ・リサ）」です。この絵は名画の宝庫・パリのルーブル美術館にあります。ですが、その中でも特別扱いされていて、最近ではガラスのピラミッドの入口を入ると、モナ・リサ行きのルートが示されています。それだけ世界中の多くの人がこの絵を目指してルーブルを訪れていると言うことなので

しょう。ルーブルでは大抵の絵は剥き出しで飾られています。この絵だけは特別扱いされていて、ガラスのケースに入れられ、廻りには柵が出来ていて、近付けないようになっています。私が最初に見たのは四〇年近く前のこと。ロンドン駐在員時代にお客や出張者を連れて何度も出かけたものでした。ルーブル美術館と言うところは世界四大美術館のトップに来る美術館で、どれを四大美術館にするかには色々説はあるようですが、ニューヨークのメトロポリタン美術館、ロシアのサンクトペテルブルグのエルミタージュ

ユ美術館、北京と台北の故宮美術館（他にボストン美術館、マドリッドのプラド美術館）に並ぶ大きな美術館です。美術品の点数が三〇万点と言われています。行かれたことがある方はご存知だと思いますが、この美術館は広くて難しく、何度行っても必ず迷子になる美術館です。四〇年ほど前にロンドンに駐在していた頃、お客様や出張者を案内する機会が度々あったのですが、出張中のお客ですから、大抵の場合、時間に制限が来ます。先方の時間に応じて半日コース、三時間コース、一時間コースなどを作っておいてご案内の役に立てたものです。（二〇〇二年十月に東高の同窓生の旅行会でフランスに行ったのですが、希望者だけをこの一時間コースで案内して感謝されたことがあります。）一九八九年にこの美術館の中庭に入口としてガラスのピラミッドが出来ました。私は平成元年（八九年）に三〇年間勤めた三菱重工を離れて、ハウステンボスの立ち上げの手伝いをするために長崎にUターンしたのですが、翌年の九〇年には八か月ほどオランダに長期に出張させられ、現地法人の会社を作ったり、ハウステンボスを作るに当たっての資材の買い付けをしたりしていました。ハウステンボスは煉瓦の道路と煉瓦の

建物で出来ていますが、これらの煉瓦を全部買って来たのは私です。この間に一度パリに出張する機会があったので、あの古めかしいルーブル美術館の建物と近代的なガラスの建造物がどう調和するのか、が見たくて、玄関だけを見に行ったことがあります。石造りの古い建物とガラスのピラミッドと噴水が見事に調和していて、やはりフランス人のやることは違うな、と思いました。私はフランス人があまり好きではありませんが、こんな面では見上げたものです。このピラミッドのお蔭で、美術館の見物も大分分かり易くなって楽になりました。世界の三大名画と言つ話になると、一番に上がるのがラ・ジヨコンダです。どれを三大名画にするかは色々な説があります。スペインのベラスケスの「ラス・メニーナス」(プラド美術館)やオランダのレンブラントの「夜警」(アムステルダム)の国立美術館)などが挙げられますが、他にも上がってくる絵は多いのです。それでもラ・ジヨコンダが外れることはまずありませんので、この絵はやはり世界中の人が認める名画なのでしょう。でも私は、これだけ何度も観ると、ラ・ジヨコンダも何だか名前の方が先行しているのではないかな、と言つ生意気な感想を持っています。

イタリア人のダ・ビンチが描いたラ・ジョコンダが、何故イタリアではなくてフランスのルーブル美術館にあるのか、については逸話があるのでご紹介します。この絵はダ・ビンチが自分も気に入って、常に持って歩いてきた絵なのだそうですが（割と小さな絵で、持ち運びが出来るサイズなのです）、年を取ってからはローマ法王との折り合いが悪かった所為で、イタリアではあまり優遇して貰えなかったとのことで、フランスに入ったところ、当時のフランソア一世と言う王様に大変に大事にされ、アンボアーズ郊外のクルー城と言うお城を一つ貰って、ここで老後を過ごしたのだそうです。ですからこの絵は一五一九年にダ・ビンチが死んだ時、この王様に遺贈されたので、フランスに残り、ルーブル美術館に飾られることになったのだそうです。フランスに観光旅行に行ってお城巡りをやった方はご存じかも知れませんが、このお城が見える湖のほとりにダ・ビンチが横たわっている青銅の銅像があったと思います。（ダ・ビンチのフランス入りは一五一六年でフランソア一世が二十一歳の時、ダ・ビンチは六十四歳。一世はダ・ビンチを父として仕えた。フランソア一世は芸術保護政策を取った王様。フォンテーヌ

ブロー宮殿に欧州中の芸術家を集め、フォンテーヌブロー派と呼ばれる芸術家集団を作った。これはアンリ四世に引き継がれ、フォンテーヌブロー宮殿を美術で埋め尽くした。この宮殿は世界文化遺産に登録されている)

こんなに大事な絵ですから、海外への貸し出しは滅多にされていないのですが、一九七四年に一度日本にきています。前年の七三年九月に当時の田中角栄首相とフランスのポンピドー大統領の間で話が決まって、七四年四月二十日から六月十日まで上野の国立博物館で展示されています。来場者数は延べで一五〇万人を超えたとのことで、私は行かなかつたのですが、大変な混雑ぶりが大きなニュースになっていたのを覚えています。その前の一九六二年の十二月から翌年三月にかけてアメリカに貸し出され、ニューヨークとワシントンで展示会が開催され、当時のケネディ大統領が見に行った、このことです。もう一度モスクワに貸し出された、と言う話もありますが、この絵がフランスを離れたのはせいぜいこの三度程度だったと言われています。その代わり、一九一一年頃盗難に遭って二年ほど行方不明になっています。イタリア人の一人が、イタリアの絵なの

にフランスにあるのは可笑しい、と言って盗んだのだそうで、二年後にフィレンツェのウフィツィ美術館に売ろうとして捕まったそうです。でもこのイタリア人はイタリアでは愛国者・英雄扱いされて、罪は極く軽く六ヶ月の懲役程度だったそうです。

ラ・ジョコンダの話が長くなりました。

二位はゴッホの「ひまわり」。これは同じようなものが一〇数点あるそうで、どれも所謂本物なのか判りません。贋作ということではありません。ゴッホが同じような構図で何枚も描いているのです。私が見たのは、阿姆斯特ダムのゴッホ美術館のものとルーブルのもの、それとロンドンのナショナル・ギャラリーのものなどですが、日本の製紙業者の会長が二〇〇億円近い金を出してクリスティーズのオークションで買ったことがあって、これが損保ジャパン東郷青児美術館にあるそうです。

三位が何とムンクの「叫び」なのです。この選択は意外に思いましたし、面白いと思





いました。これはノルウエーの画家の作品で、私は一九七四年にオスロに最初に行った時、ムンク美術館で観ました。その後、もう一度観に行ったことがあったと思います。盗難事件なんかがあって有名になりました。この絵が三位に来たのは、絵の良し悪しよりもこうした事件の所為で、話題になったから

ではないか、と思っています。この絵は美しいと言うより、不気味と言うか、不安を表す、心の中を描いたものだと思います。北欧の画家らしく、「ベッドに腰を掛ける少女（思春期）」など寒々しい絵を描く人だな、と思った記憶があります。



四位に又、ダ・ビンチが来て、「最後の晚餐」ですが、私はこの絵を都合三回観ています。第一回目はロンドン駐在中に、イタリア出張の途中に無理に時間を作ってミラノまで出かけて観たのです。三菱重工時代の出張は船会社のある港町が中心だったので、



内陸のミラノには行く機会がありませんでした。イタリアの港町ジェノアには何度も出掛けたのですが、ある出張で週末を挟むことが出来たので、ミラノにいた友人を頼って態々出掛けて行って観たものです。ミラノの教会の食堂の壁に壁画として描かれたもので、あまり綺麗に保存されているとは言えません。ナチの砲弾が外から突き抜けたこともあって、その部分は描き直したと言います。薄ぼんやり見える程度で、美しいとはとても言えず、感激するほどではありませんでした。その後、ハウステンボスに来て販売本部の責任者をやらされていた頃、商品買い付けの出張中に、引率して行った若いバイヤーたちを連れて観に行つたのですが、修復中で全面に足場が掛かった状態で、折角良い経験だから、と

連れて行った若い人たちをガツカリさせてしまいました。一〇年前（二〇〇三年）に家



内と見たのが一番良かった。修復が完全に終わり、管理もシツカリ出来ていて、これ以上の毀損は避けられるようになっており、入場者数も制限してユツクリ鑑賞できるようになっていました。

五位がピカソの「ゲルニカ」です。アンケートで選ばれた一〇点の作品の内、この日経の記事に接した時点で私が観ていないのはこの絵だけだったのです。それでもその直前に大学柔道部同期の友人三人とスリーペアでスペイン旅行を計画した時の私の一番の目的がこの「ゲルニカ」でしたから、私の眼や感覚も満更ではない、と言うことになりそうです。この旅行は全てをアレンジした後で私が総胆管癌で入院・手術する騒ぎを起こし、中止せざるを得なくなってキャンセル料を払わされる羽目になり、両ご夫妻には大変なご迷惑を掛けたのですが、三年前（二〇一〇年十月）、東高同窓生の旅行でこれを実現したので、



一〇点全部の本物をこの目で見たことになります。私は三年前のこのスペイン行が二度目でした。最初は、ロンドンに駐在していた頃の一九七五年にお正月休暇を利用してツアーで行ったものです。二年間のロンドン駐在中には、ヨーロッパ中のお客を駆け回っていたので、ヨーロッパの殆どの国には行ったのですが、スペインにはお客がいなくて、出張の機会がありませんでした。休暇を利用して観光目的で行ったのですが、有名なマドリッドのプラド美術館には連れて行って貰って、ベラスケス（ラス・メニーナス）やエルグレコやゴヤ（裸のマヤ、着衣のマヤ）の絵は観たものの、ゲルニカは見られませんでした。

「ゲルニカ」と言う絵は、スペイン内戦の初期の一九三七年、当時力を付けつつあったフランコ將軍が、ナチに頼んでスペイン北部のバスク地方にあるゲルニカという小さな村を空爆させた悲劇を描いたものです。昔の戦争は、軍人同士がやるものとされ、民間人には被害を与えないようにすると言う暗黙のルールがあったようですが、第二次大戦の頃になると都市への空襲など民間人への攻撃が当たり前になり前みたいな形になって来て

いて、東京大空襲や広島や長崎への原爆投下などがその最たるものです。このゲルニカ村への空爆は歴史上初めての民間人への無差別爆撃とされ、「ゲルニカ」と言うこの絵は、これを聞いたピカソが怒りに任せて一ヶ月で描き上げたと言う、所謂反戦の絵なのです。案内人が、色んな意味が籠められている、と詳しく説明してくれましたが、私は我が子を失った母の嘆きが一番強く感じられました。

スペイン内戦と言うのは、一七〇〇年から続いていたブルボン王朝（元はフランスの王朝、十六世紀末から十九世紀初めまで。絶対主義王政がフランス革命により転覆されて、ルイ十六世やマリー・アントワネットが斬首されて終わりになった王家。実際はナポレオンが皇帝を追われた後で、王政復古と言うことで再興したが、一八三〇年の七月革命で完全に倒れた。スペインにはこの王家が残っていた）が一九三一年に革命で倒され、世界初の人民戦線による共和制の政府が出来たのですが、その後政治が混乱し、その乱れについて軍がクーデターを起こして、内戦になったものです。この内戦は当時世界中の注目を集め、世界中の知識人が、ファシズムを標榜するフランコを勝たせてはな

らない、自由主義を守れ、と言って支援しました。アメリカのヘミングウェイは自ら戦場に入って「誰がために鐘はなる」等の名作を残しましたし、フランスからはアンドレ・マルローが空軍士官として参戦したし、未来小説の原本とも言われる「一九八四年」と言う本を書いた英国人のジョージ・オーウエルも実際に銃を取って戦ったそうです。

五五か国から四万人の義勇兵、二万人の医者などの非戦闘員が応援に駆け付けたと言われています。結局、世界中からの応援を受けた共和派が負け、一九三九年にフランコ將軍が總統に就任して、民主主義・自由主義の政治を完全に排除したファシスト政権を作りました。もっとも独裁政権とは言っても、フランコが勝手気侷な政治をした訳ではなかったようです。国民には自由を許さなかったけれど、第二次大戦中も巧みな外交を展開して中立を守ってスペインを戦火から救ったし、自分もストイックで清廉潔白な武人の生活を守っていたそうで、決して華美に流れない質素な生活をしていたそうですから、私は一種の賢人政治を敷いていたのではないかとすら思っています。現に、フランコは總統に在任中もチャンと王家を残し、むしろ後継者の王子を教育して、自分の死後は

政権を王家に返還しています。従って今のスペインはブルボン王朝を引き継いだ立憲君主国の政体を取っています。

こんな事情ですから、この反戦の絵を描いたピカソはスペインにはいられなくなってアメリカなどに逃げ出したし、この絵もアメリカに疎開しました。ジュネーブの国連の安保理事会会議場にもこの絵のタペストリーが飾ってあります。フランコが死んで、フアシスト政権が終わりを告げ、立憲君主制に戻ったのが一九七五年のことで、その後、アメリカとの交渉の結果、この絵がスペインに戻ったのが一九八一年のことだったそうです。私が最初スペインに行ったのが一九七五年のことでしたから丁度フランコが死んだ年で、この絵はまだアメリカにあったのです。二度目の二〇一〇年の旅で念願の「ゲルニカ」に接することが出来、長年の思いを遂げることが出来ました。この旅行については私が幹事役をやったので、このゲルニカが展示してある「ソフィア王妃美術館」と言うところを行程に含めて貰って、どちらかと言えばお手盛りで観たのです。ゲルニカの話が長くなりました。

六位が有名なミレーの「落穂拾い」です。これこそ中学の  
図画工作の時間に教えて貰った絵ですが、最初にルーブル美  
術館に行った時、この絵がどこかにあると聞いていましたの  
で、探し回って苦労しました。ルーブル美術館は広くて本当  
に分かり難いのですが、その判り難い美術館の中を歩き回り  
三階か何処かの隅の方に発見した時は感激したものです。今  
もミレーの絵は殆どが印象派の絵と一緒にオルセー美術館  
にあります。この絵だけはルーブルに残されていると聞いて  
います。

【印象派 ルノアール、マネ（オランピア）、モネ（五  
十歳ぐらいから睡蓮を描きはじめた）、ドガ、モリゾ、ピサロ。  
ピサロの弟子がセザン  
ヌ（後期印象派）、ゴーギャン、ゴッホと続く】



七位がミケランジェロの「最後の審判」。バチカンのシステイナ礼拝堂の壁画です。私はシステイナ礼拝堂が大好きで、もう一度行きたいところは何処か？と聞かれたら、今でもシステイナ礼拝堂、と答えるでしょう。システイナ礼拝堂と言うのはローマ法王の礼拝堂です。と言うことはカソリック教会の最高の礼拝堂と言うことになるのではないのでしょうか。皆さんもお聞きになったことがあると思いますが、ローマ法王が交代される時に枢機卿と言われる方々が、この礼拝堂に籠って、コンクラーベと呼ばれる選挙をします。選挙に参加する枢機卿たちは新しい法皇様が決まるまでここから出ることを許されないそうで、その日の内に決まらなければ夕方黒い煙で合図し、決まったら白い煙を焚いて喜びを伝えるのだそうです。昨年三月でしたか、法王ベネディクト十六世が退位さ



れ、コンクラーベが行われることが話題になっていましたが、今回は世界中から集まっ

た一七名の枢機卿の間で、選挙が行われたそうです。私はこの礼拝堂には二度しか行っていませんのですが、

最初訪れたのがロンドンに駐在中の四〇年近く前のことです。一九七五年のお正月休みにツアーで行って見せて貰ったのですが、入っただ



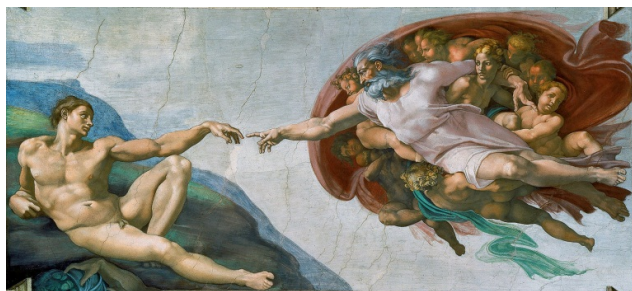
けで鳥肌が立つほど感激してしまい、どうやらそれ以来虜になっているようです。その時の感激が忘れられなくて、もう一度行ってみたいと思いつけていたのですが、その後、二〇〇三年九月に家内とイタリア旅行を計画した時にここを一番の目



的にして、二八年振りに二度目の見学を実現しました。ご存知の通り、システイナ礼拝



堂の内部は、ミケランジェロが三十代の時に描いた「天地創造」の天井画とその後六十年代で書いた、この「最後の審判」で飾られています。これらの絵は、私が行った一度目と二度目の間に、パウロ前法王の命令で一九八一年から一二年かけて綺麗に掃除がなされています。この修復作業については日本テレビが完全な記録を残したとのことですし、日本の和紙がずい分と役に立ったと聞いています。で、二度目は本当に綺麗な状態を見ることが出来ました。「最後の審判」は見事な絵で、真ん中に描かれているムキマンのキリストが有名ですね。キリストさまは大体痩せて描かれていることが多いように思いますが、このキリストさまは筋肉隆々のボディビルみたいな立派な身体をしています。もう一つ。この絵は右下の部分に描かれています。この人は偉い聖職者なのですが、この絵にケチをつけたとのことで、ミケランジェロの恨みを買って、地獄で変なところを蛇に噛まれている人にされてしまっています。



「最後の審判」はこのように見事な絵ではありませんが、私は同じシステイナ礼拝堂、同じミケランジェロでも「天地創造」の天井画の方が好きです。棟方志功が初めてシス



テイナ礼拝堂を訪れた時、天井画の方に感激していた、と書いたものを見たことがあります



ますので、私の感覚も棟方志功並  
と言うことになりそうです。この  
絵です。私が好き絵なので、寄り  
道して少し詳細をご紹介しますと、  
天地創造は旧約聖書の最初の部分  
に書いてある世界の始まりを描い  
た神話です。何もなかったところ  
に神様が現れて、まず闇と光を分  
け、次に天と地を分け、陸と海を分け、植物と動物を作り、最  
後に人間のアダムとイブを作って、これで一週間働いたので、  
日曜日にお休みになった、と言うことなのですが、これをミケ  
ランジェロがテニスコート三枚分もあると言うシステイナ礼拝  
堂の天井に描いたのです。ミケランジェロは、天地を作った後





の「アダムとイブの楽園追放」から「ノアの洪水」までが描いていますが、見事なものです。フレスコ画と言って、壁に漆喰を塗って、その漆喰が乾ききらない内に水彩絵の具で描くのだそうですが、その短い時間に本当に見事な絵を描いています。「アダムとイブの楽園追放」は神様が指先からアダムに命を与えているところだと思えますが、この構図は映画「E・T」で有名になりました。「楽園追放」は蛇に騙されてリンゴの実を食べて、天井から追放される場面。天井ですから、色んな形の平面に描いているのですが、私が好きな絵を二・三紹介しますと、「デルフォイの巫女」は綺麗な絵ですから、どこかでご覧になった方が多いのではないかと思います。巫女も八体描かれています。私が好きなのは「リビアの巫女」。この背中の美しさが好きです。もう一つ「預言者ヨナ」。預言者とは神様の言葉を預かって、人間に伝える役目をする人。ユダヤ人をエジプトから連れ出したモーゼも預言者の一人です。ヨナは漁師なので、

魚の絵が描いてあります。この絵は天井の角に描いてあるのですが、引っ込んだ曲面なのに、迫り出して見えます。絵を描く人にとっては何でもない技術なのかも知れませんが、私なんかから見ると、どうしてこんな絵が描けるんだろうか、と信じられない思いになります。システイナの話が長くなりましたが、私の場合は、システイナ礼拝堂に入っただけで感激するのですから、天井画も壁画も含めた全体の雰囲気飲まれてしまう、と言うことなのかも知れません。バチカンのサン・ピエトロ大聖堂の入り口に飾ってあるミケランジェロの「ピエタ」の美しい大理石の彫刻も忘れられません。寄り道が長くなって申し訳ありませんでした。

八位がモネの「睡蓮」。睡蓮と呼ばれる絵は、フランスのジベルニーと言う町にあるモネの自宅の庭の絵です。自分の庭を何枚も何枚も描いたのですから、これこそ何枚描いたのか判りませんし、どの絵が観たいとされている絵の対象になっているのか判りま



せんが、ずいぶん色んなところで観たと思います。勿論ルーブルにもありますし、日本に

も何度か来て、西洋美術館とか都美術館でも観たことがあります。

九位と十位が同点で、ドラクロワの「民衆を導く自由の女神」とフェルメールの「真珠の耳飾りの少女」。ドラクロアはルーブルの大作のコーナーにありましたが、今はルーブルでも別館に置いてあ



るそうです。ここにはダビッドの「ナポレオンの戴冠式」とか、ヴェロネーゼの「カナの婚礼」とか、ジェリコの「メデューサ号の遭難」とか見事な絵が沢山あって、どれを取ったら良いのかわからないほどですが、「民衆を導く自由の女神」は胸を半分剥き出

しにし、旗を掲げてフランス革命を戦う民衆の先頭に立つ女性の姿で、これを女神と見たのでしよう。力強い絵です。昨年二月にこの絵にフェルトペンで落書きをした女性があったと言うことで話題になりました。もう二〇年以上前になりますが、オランダの国立博物館で有名な「夜警」に硫酸が何かを掛けた人がいました。こうした気違いはどこにでもいるものですが、困ったものです。私のご贔屓のフェルメールが最後にでも一枚入ってきて良かった。「真珠の耳飾りの少女」は、私が平成元年に長期に滞在していたハーグのマウリッツ王立美術館にあった絵なので、それこそ何度も観に行きましたが、私は同じフェルメールでも同じ美術館にある「デルフトの風景」やルーブルで観た「レーヌを編む女」の方が好きです。彼が遺した三七枚の内、この絵が一番ピュラーだった、と言うことなのでしょう。







仲々今日の主題のフェルメールに行きつけませんが、フェルメールの絵については、この後直ぐユツクリご紹介します。

でも、考えて見ると、絵というものには自分自分の好みがあるはずです。多くの人が観たい絵と言うのは、私と同じように中学の美術の時間に教科書か美術全集か何かで見せてもらった多くの人が知っている名画であって、これらの実物を観てみたい、と言うだけのことではないだろうか。

これを一〇点全部観ているなんて言うのは、別に自慢するべきことでも何でもなくて、私が単なるミーハーだ、と言うだけのことなのかも知れません。

前置きが長くなりましたが、本論のフェルメールの話に入ります。

私のフェルメール好きはハウステンボスに来て直ぐ、オランダに長期出張した時の一九九〇年に始まっています。私は前にお話した事情で、平成元年にハウステンボスの立ち上げの手伝いに佐世保に来ましたが、平成二年（一九九〇年）に合計で八ヶ月ほどオランダの首都デン・ハーグに滞在していたのです。ここにマウリッツハウスという王立の美術館があつて、十七世紀に描かれたオランダの油絵が沢山展示されていたのですが、この美術館に展示されている三点のフェルメールの作品を観ている内に好きになつたのです。この美術館は私が借りていたアパートの近くにあつて、何度も通いました。一番有名と思われ、皆さんも良くご存じの「真珠の耳飾りの少女」の絵は先ほどご紹介したように、ここにあります。こんな絵が剥き出しの状態で飾られていて、誰もいない状態でその絵を独占することが出来て、それこそ目を近づけて見ることすら出来るのです。この美術館には「デルフトの風景」と言う絵と「ダイアナと仲間たち」と言う絵がありました。私は「真珠の耳飾りの少女」よりも、「デルフトの風景」の方が好きで、フェルメール好きが嵩じたのはこの絵の所為かも知れません。フランスの作家で「失われ

た時を求めて」で有名なマルセル・ブルーストがこの絵を評して「世界で一番美しい絵画」と言ったそうです。フェルメールの絵は勿論アムステルダム国立博物館にも展示されていて、ここには四点あります。この国立博物館の目玉は、これも有名な「牛乳を注ぐ女」。向こうではキッチン・メイドと呼ばれます。この絵の存在感も素晴らしい。何かドーンと言うショックを与えてくれる絵で、これも私のフェルメール好きを後押ししてくれた絵です。国立博物館にはこの他、「小径」「恋文」「青衣の女」と都合四枚あります。オランダでは年間チケットを買い、どの美術館に行っても、博物館に行ってもその期間は何度でも只で入場出来るのです。このチケットをフルに活用して、ここへも何度となく通いました。





フェルメールの絵の何が良いのか、何処が好きなのか、と問われると困ります。一般的には「神秘的とさえ言える光と色彩の魅力」とか「光の画家」「光の天才」なんて評価されているし、ラピスラズリとか呼ばれる高価な青の絵の具を使ったフェルメール・ブルーと呼ばれる青の色が美しい、なんて言われることもあ

ります。家内などは写真のように写実的ただけだ、などと言いますが、絵の好き嫌いなんて別にその理由を言う必要はなくて、単に「好き」で良いのではないだろうか。敢えて言えば、対象に忠実に丁寧に描かれていて美しい、なんてことになるのですが、他のその種の絵と何処が違うのか、と言われると説明が出来ません。宗教画は好きになれませんが、素人の私としては絵の中に思想が含まれているものや、所謂抽象画は理解できないので、単純に美しいものが好きでこの人の絵が私の感覚に合う、と言うだけの初歩的な好き嫌いと言うことにしておきましょう。私のご臍原の塩野七生さんも「芸術作品

は解説するものではない。仲介者なしでそれと一対一で向かい合い、作者が表現しようとしたことを虚心に受け止めるべきものだ」と言っていますから、初歩的な好き嫌いでも許して貰えるでしょう。

フェルメールは寡作（少しの作品しか残していない）の画家として知られています。十七世紀は東インド会社が活躍していた時代で（イギリス一六〇〇年設立、オランダ一六〇二年、フランス一六〇四年）、その影響でオランダが世界最大の海洋国家になってもの凄く栄えた時期で、市民が豊かになって自宅を絵で飾る人が増えて来た時代とされていいて、絵画の黄金時代とも言われています。それまでの画家は王様や貴族や教会の後ろ盾がないと生きて行けず、王様や貴族の肖像画や、宗教画を描いていたのですが、この頃のオランダでは、一般市民に絵を売って食べていける画家が増えて来たのです。オランダの画家としては画聖と言われたルーベンス（一五七七年～一六四〇年。この人は政治家でもあって、どちらかと言えば宮廷画家）、帝王レンブラント（一六〇六年～

一六六九年）より少し若くて、生まれが一六三三年、没年が一六七五年ですから

四十三歳と比較的若死にでした。この他、ヤン・ステーンとか人物画を描いて笑いを描いた画家と言われたフランス・ハルス、風景画のライスダール、当時の日常生活を描いて有名なデ・ホーホ等と言う画家が出て来ています。同じオランダの画家のゴッホはこれより大分時代が下っていて一八五三年に生まれ九〇年に三十七歳で自殺しています。

（私がオランダ滞在中の二〇〇〇年がゴッホ没後一〇〇年でした。誕生日の三月三十日から死んだ七月二十九日まで、世界中からゴッホの作品を集めた大ゴッホ展が開催されていた）ゴッホは画家としての一〇年間で二一〇〇点を超える絵を描いたと言われていますが、この内、ゴッホが生きている間に売れたのはたった一枚だったと聞いています。これに反してフェルメールは生涯に三十数枚の絵しか残していません。正確に何枚だったか、と言うことについて未だに議論が続いているようです。真贋の判定に厳しい学者は本当に間違いのない真作は三三枚、と言っているようですが、一般的には専門家の大部分が認める三四枚（二枚が疑問作）とされ、これが国際標準的なものになってい

ます。もう少し甘く積極的に評価しようとする学者は三六枚（二枚が非真作）まで広げて来たそうですが、二〇〇四年に新しい絵が発見され（後で紹介しますが、ヴァージナルの前に座る若い女）、これが有力な真作と認められて、これを加えて最近では全部で甘く見て三七枚、厳しく見て三三枚と言つのが定説になっています。絵画名とその真贋の程度をリストに纏めてみました。（疑問作と非真作の表参照）

フェルメールが画家として世の中になられたのは、死後二〇年も経って、フランスの画商が発見したからだ、と言われていきます。それよりこんなに少ない絵で、どうして食っていたのか、と言つ疑問がありますが、元々フェルメールの親父さんと言う人は当時の実業家で、宿屋を含めて色々な事業で成功した人らしいのです。フェルメール自身宿屋を継いで、割と裕福な生活をしていた、と言われます。この宿屋は娼婦宿

も兼ねていた、と言う説もあって、そう言われてみると彼の画題の中にはそれとと思われる女性も多く登場しています。ですから彼は画家として生計を立てていたのではなくて、むしろ趣味で描いていたのではないか。プロの画家ではなくてアマチュアとして描いて



いたのではないか。だから多くの絵を描かなくても良かったのではないか、と言つのです。先ほどお話しした高価な絵の具のラピスラズリをふんだんに使うことが出来た背景にもこの辺の事情があるのではないか。ラピスラズリはアフガニスタンから輸入された寶石とも呼ばれる石で、これを粉にして絵の具にします。大変高価な絵の具で普通の絵の具の一〇〇倍ぐらいの値段だったと言われます。フェルメールはこの絵の具を実に贅沢に使っています。(二四ノ三〇枚) お金に不自由しなかつたから、こんな贅沢なことが出来たのではないか、と言つのです。尤も彼は聖ルカ組合と言つ画家の組合の理事をしていたそうですから、アマチュアと言つてもその実力は認められていたのでしょう。

この内、現在オランダ国内にあるのが先ほどご紹介したように七枚と意外に少ないのです。私は第二次大戦の時、ナチがオランダを占領した時に、これらの美術品を奪つて持ち出してベルリンに持って行ってしまったことに原因があるのではないか、と言つ疑いの念を持っていました。映画や小説でナチが占領地から多くの美術品をベルリンに持って行ったことを知らされていましたから。でも、そう言つ疑いの目で見て、フェル

メールに関してはそうした事実はあつたとしてもそれほど多くはなかつたようです。それでも今でもフェルメールの絵は六枚がドイツに遺されていますから、これらはいやほいやりナチの仕業ではないか、と疑いの念を持っています。

尤も、フェルメールとナチの間には面白い話が残っています。オランダの画商でメーヘレンと言う人がいて、この人がフェルメールの絵と言うのを持っていて、ナチのゲーリングの目に留まり、ゲーリングが一枚一六億円もお金を出して買ったのだそうです。これが切っ掛けで一〇枚以上のフェルメールの絵がナチに売られたと言われます。メーヘレンは全部で七〇億円くらいの商売をしたそうです。戦後、この人は大事なフェルメールの絵をナチに売った国家反逆罪に問われ、死刑にでもなる騒ぎになったのですが、これらの絵は全て自分が描いた贋作だったことを白状したので、軽い詐欺罪になり、一転ナチを騙した人、と言うことで英雄になつたそうです。

フェルメールが死んだ直後の一六九六年（フランスの画商が評価した後と思われる）にアムステルダムで二一枚の作品が大々的にオークションに掛けられた、とのこと

で、これが契機になってフェルメールの絵が世界中に広がったようですよ、十九世紀の末頃、産業の黄金時代を迎えて続々と出現したアメリカの大富豪達がこぞってヨーロッパの絵画を買い漁ったと言う現象もあったとのことですよ。絵の所在をリストに入れて見ました。ご覧頂けるように、今やフェルメールの絵はアメリカに一番多く残されてますが、その原因はこの辺にあったのでしよう。アメリカの富豪たちは古典的な美術品を個人のコレクションとして蒐集し、ワシントンのナショナル・ギャラリーなんかはアンドリュー・メロンと言う大富豪がフェルメールを含む自分のコレクションを展示するために個人で作った美術館だと言われます。個人のコレクションが後に博物館や美術館に寄贈された例も沢山あったようですよ。

私はオランダにいた間にオランダにある七枚は何度となく観に行きましたし、その後も近くまで行くところらの美術館に寄る機会を作って、必ず何枚かは観に行きます。絵



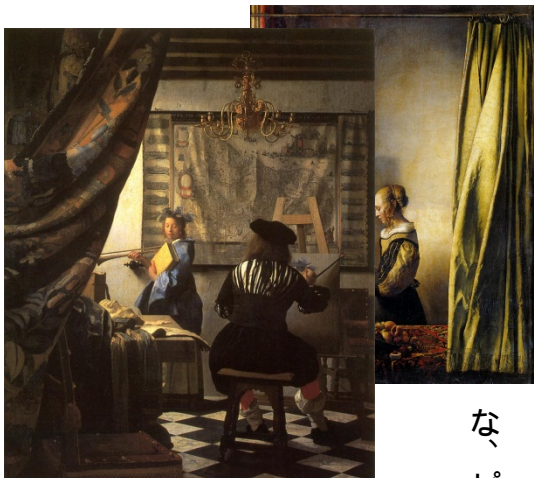
に会いに行くと、言うような気持です。引退した後、二〇〇二年にオランダの友人にアパ

トを借りて一ヶ月滞在したことがあるのですが、この時も何度も会いに行きました。

この時はレンタカーを借りて欧州中を走り回ったのですが、パリとロンドンまで行ってルーブル美術館とナショナル・ギャラリーで夫々二枚ずつ計四枚を観ました。ルーブルには「レースを編む女」と「天文学者」と言う絵があります。「レースを編む女」は本当に小つちゃい可愛い絵で、私も特に好きな絵です。スペインの抽象画家でサルバドル・ダリと言う人がいます。この人は皮肉屋で人の絵は滅多に褒めなかったと言われますが、この絵はこの人が絶賛した絵だそうです。日本にも何度か紹介されたと聞いています。フェルメールは二枚の風景画の他は女性を描いた絵が殆どなのですが、「天文学者」は数少ない男性を描いた絵です。（他に「地理学者」が一点）ロンドンのナショナル・ギャラリーにも二枚あって「ヴァージナルの前に立つ女」と「ヴァージナルの前に座る女」と言う絵です。（ヴァージナルと言うのはチェンバロみたいな



な、ピアノのように鍵盤を持つ楽器です)



フェルメールは日本でも人気が高く、何度もフェルメール展が開催されています。記録を調べるとフェルメールが最初に日本に紹介されたのは一九六八年で、それ以来、フェルメール展は一〇回以上開催されているそうです。昨年までに来た絵の数は一五枚、重複して来た分を含めると延べで一八枚と言われています。私はこの内、一〇枚を見る機会がありました。

りました。東京にいればこうした文化に触れる機会が多いでしょうが、佐世保にいたのでは仲々このために上京する程の財力がありません。それでも日本に来るのはドイツやオーストリアやアイルランドなど中々現地に行けないところにあるものが多いので有難くて、日本に来ていることが分かるのと何とかして機会を作って観に出掛けることに

なります。私がそれまでに日本で接したフェルメールの絵は、ドイツのドレスデンから来た「窓辺で手紙を読む女」とオーストリアのウィーンから来た「絵画芸術」ドイツのフランクフルトから来た「地理学者」と言う絵の三枚でした。「地理学者」と先ほどの「天文学者」の二枚だけが男性を主題にした絵です。

平成二十年秋に上野の東京都美術館でフェルメールが七枚も来る展覧会が開催されると言うので、何が何でも、と言う気になつて上京の機会を作つて観に行きました。この展覧会は「光の天才画家とデルフトの巨匠たち」と銘打つて東京都美術館で開催されたのですが、十七世紀に描かれたデルフトの画家の絵が三九点来ていて、その内の七点がフェルメールでした。いずれも素晴らしい絵ばかりで立派な展覧会だと思いました。例によって大変な人出でユックリなんて見られないのではないかと、と最初から大混雑を覚悟していました。せめて入場券を買う行列は避けたいと、





事前にインターネットで入場券を買いました。一六〇〇円の入場料がシニアだと九〇〇

円になりますから、老人はずい分優遇されていることになります。当日は一日仕事にな

ることを覚悟し、身構えて朝早くから出かけました。開場直後の一〇時過ぎに入場した

のですが入場券発券所には既に行列が出来ていて、切符を事前に手配したのは正解でし

た。ところが展示場には別に行列もなくスナナリ入れて気が抜けるほど。大勢の人では

ありますが、少し詰め状態なんてことはなく、お目当ての絵の周りの混雑も少し我慢をしていると目の前まで進んでユックリ鑑賞できる状態でした。期間が八月から十二月までと言う長期間だったので楽になつたのだらうと思います。週末を避けたのも正解だったのでしよう。それでも二時間半を鑑賞に費やして午後になつて出て来たら、展示場の入り口には行列が出来ていましたから、朝早く行つたのは正

解だったのでしょうか。行った  
り来たり都合四ラウンドして  
フェルメールを堪能した気持  
ちになりました。今回は七枚  
の内で私が現地で観たことの  
あるものが二枚で、初めて見  
る絵は五枚でしたが、スコッ



トランドやアイルランド、ドイツの田舎の夫々一点ずつしか所蔵されていないところのものが来ていたし、一番最近発見された個人所蔵の絵も来ていましたから大変に貴重な



展覧会で、良くこんなモノが集められたものだ、と感心することしきりでした。イギリスのエジンバラから来た「マルタとマリアの家のキリスト」。アイルランドのダブリンから来た「手紙を書く女と召使」。ニューヨークのメトロポリタン美術館から来た「リユートを調弦する女」。ドイツのブラウンシュバイクと言う田舎町から来た「ワイングラスを持つ娘」。一番貴重だったのが、先ほどご紹介した「ヴァージナルの前に座る若い女」と言う絵でした。個人収集家が持っていたものがロンドンで二〇〇四年に発見さ



れ、その後、鑑定の結果確かにフェルメールが描いたものだと言うことが証明されたことです。三三億円の値が付いて、匿名の個人が持っているそうです。こんな絵は仲々見ることが出来ないものなのでしょう。この展覧会の時点で私がこれまでに観たフェルメールの絵は一九枚になりました。これで約半数と言つことです。

昨年（二〇一二年）、東京・渋谷の文化村ミュージアムにフェルメールの手紙に関連する絵を集めた「フェルメールからのラブレター展」と称する展覧会をやっていました。「真珠の耳飾りの少女」「青衣の女」「手紙を書く女」の三枚が来ていると聞いていましたが、一枚は既に見たことのある絵でしたし、一枚は秋にアメリカで観ることが出来る、と思つて出掛けませんでした。六月から上野の西洋美術館にベルリンから「真珠の首飾りの少女」と言つ絵が来ていると言つので、今後ベルリンまでは仲々行けないし、貴重な機会なので行つてみたいな、と思つていましたが、偶々ご不幸があつてご法事に参列する機会が出来たので、これを利用して貰つて、時間を作つて行つてきました。法事

の前日に上京し、羽田に着いてから上野に直行し、そのまま西洋美術館に飛び込んで観て来たのです。誠に不謹慎なことでしたが、この程度の無理と努力は必要です。この絵は写真で見ている頃から、好きになりそうな絵だな、と思っていたのですが、期待通りの温かくて気持ちの良い絵で、大好きな絵の一枚になりました。尤もこの絵はその後、大宰府の九州国立美術館にも来たので、また会いに行きました。

リストを作ってみると圧倒的に多くの絵がアメリカにあるので、一度は機会を作って行ってみたいな、と思っていました。一部の方はご存知ですが、我々長崎東高八回生では在京の同窓生を中心に二年に一度の割で海外旅行をしていました。これも一部の方はご存じの市原緑さんと言う女親分がいて、この人がこの旅行会を主催して一〇年以上続けていました。私もハウステンボスを退いてから四回ほど参加したのですが、七回を終わったところ



で市原さんが亡くなってしまい、この旅行会はお終い、と言うことになったのです。ところが会員の中に、「第八回の卒業生なんだから、旅行会も七回で終わるべきではない。八回まではやるべきだ」なんて言う上手い理屈、と言うより訳のわからない屁理屈をこねる人がいて、「長島さん、引き継いでやってくれ」と言うことになりました。変なウソクラテスもあったもんだ、と思いながらも、ここで断つては男が廃る、なんてこれも変な理屈を作って引き受けることにして、三年前に（二〇一〇年）、スペイン・ポルトガル旅行をやりました。先ほどお話した、ゲルニカを観た旅行です。これで終わりですよ、と言う約束でやったのですが、大層上手く行ってとても楽しい旅行会になったものですから、最終日のポルトガルのリスボンでの打ち上げ会の席で、「こんな楽しい会はこれで終わりにするのは勿体ない、もう一度やってくれ」と言う演説をする人が出て来て、それに同調してアジる人も出て来たものですから、逃げられなくなって、「二年後に生きていたら考えましょう」と言う約束をさせられる羽目になりました。フェルメールに引っかけたアメリカに行くんだったら実現して見ても良いな、と考えて、アメリ

カ東海岸一週間の旅を提案したら、皆さんがこれでも良い、と言うことになり、二人の参加者で一昨年九月（二〇一二年）にアメリカへ行つて来ました。ボストン、フィラデルフィア、ワシントン、ニューヨークを巡る旅行でした。一〇人以内なら自分で添乗員をやつて面倒を見ようかな、と思つていましたが、二〇人ともなるとそれも大変なので添乗員を付けることにし、既存のツアーを一つ買い切ることになりました。我々だけのツアーになるので我儘が効きます。フェルメールの絵はワシントンのナショナル・ギャラリーに四枚、ニューヨークのメトロポリタン・ミュージアムに五枚、フリック・コレクションと言つところに三枚あることが分かつていたので、これも行程に入れて貰うことにしました。ワシントンのナショナル・ミュージアムやニューヨークのメトロポリタン美術館は大抵のツアーに含まれていますが、同じニューヨークでもフリック・コレクションは個人の所蔵品の美術館ですから、普通のツアーでは仲々行かないところですが、買い取りの強みと幹事の特権を生かして我儘を聞いて貰つて、行程に含めて貰いました。ボストン美術館は世界四大美術館に入れる人もいるほど立派な美術館で、入つてみたか

ったのですが、時間を作るのが難しくなりました。ポストンには別の美術館にフェルメールが一枚あることは知っていました。この「合奏」と言う絵は盗難に遭って行方不明、と言うことも聞いていましたので、ポストンの美術館は割愛しました。この絵は一九九〇年に盗難に遭い、五〇〇万ドルの懸賞金が出されたのに未だに出て来ていません。これは絵画史上最大の盗難事件とされています。この「合奏」が見られるのだったら、幹事の特権を利用して、他の観光を削っても見に行ったところでした。

フェルメールの絵は多くの盗難事件に遭っています。それだけ人気が高いと言うことなのでしょう。最近の例幾つかをご紹介しますと、一九七一年にベルギーのブリュッセルでの展覧会で「恋文」がテロリストと称する人に盗られました。二週間後には犯人が分かって取り戻したのですが、額からナイフで切り取ると言う乱暴なやり方で盗んだの



で、大きな傷が出来て修復に時間もお金も掛かったそうです。一九七四年にロンドンでの展覧会で「ギターを弾く女性」がこれもテロリストに盗られました。「一三億円の身代金を払わないと燃やしてしまう」と言う脅迫状が舞い込んだそうですが、結局七十二日の無傷で返還されました。同じく一九七四年にアイルランドのダブリンで「手紙を書く女と召使」が盗難に遭いましたが、これも犯人が逮捕されて無事に戻りました。そして先ほどのボストンの「合奏」です。この絵は一五〇億円の価値があるとされています。

まず、ナショナル・ギャラリーのフェルメールは分かり難いところに展示されておりましたが、このところ日本の観光客にはフェルメールの人氣が高いとかで、案内人が真っ直ぐ連れて行ってくれました。先日來テレビで、かなりのフェルメールおたくと思われる青山学院の福岡伸一と言う教授が盛んに宣伝していましたから、こんな後押しがあるのかも知れません。一枚が貸し出し中でしたが、残りの三枚の内、「天秤を持つ女」



なんかが仲々良くて、無理して来た甲斐があったな、と思いました。メトロポリタン・ミュージアムでは五枚中二枚が貸し出し中で見られませんでした。が、「水差しを持つ女」が良かった。フリック・コレクションは貸し出しを禁止しているそうで、ここでは三枚とも見る事が出来ましたが、「女と召使」が何か深みを感じさせて一番気に入りました。結局、今回の旅行では目標の十二枚中九枚しか見ることが出来ませんでした



が、これで私が見た数は二九枚になります。残りの七・八枚は世界中に一枚ずつ散在しているし、個人所蔵に近いものもあるので、もうこの辺でお終いかな、と思っています。

この内の私のお気に入りの五点を挙げて見ますと、西洋



美術館で見た「真珠の首飾り」。暖かみと優しさが感じられる絵です。重量感と迫力満点の「牛乳を注ぐ女」、これはアムステルダム国立博物館。ルーブルで見た可愛い小さな絵の「レースを編む女」。デン・ハーグのマウリッツハイスにある「デルフトの風景」、これは精緻な絵と言つ感じず。一番人気のある「真珠の耳飾りの少女」はマウリッツハイスで何度も観た絵ですが、私にとってはやっと五番目に入ります。先ほどご紹介した「女と召使」とどちらにしようかな、と言つ程度です。

世界中に散らばっているフェルメールを追っかける旅が出来たら素敵だな、と思つているのですが、他にもそんなことを考える人がいるらしく、これまでにこんな旅をしてそれを書き物にした人を二人発見しました。一人は朽木ゆり子というニューヨーク在住のジャーナリストで、他にもフェルメールに関する本を何冊も書いていて、かなりのフェルメールおたくみたいです。二〇〇六年に「フェルメール全点踏破の旅」が上梓されたので直ぐに読みました。こちらはどつやら出版社から費用が出て、世界中のフェルメ



ールを観て廻つたみたい。盗難行方不明中の一点を含めた四点を除いて観て廻っていますが、ジャーナリストらしく記述も少々硬くて報告書の感じです。もう一人が有吉佐和子の娘の有吉玉青（たまお）で、二〇〇七年に「恋するフェルメール」と言う本を出しています。こちらは本当のフェルメール好きが、一七年と言う歳月を掛けて自分で追っかけて廻つて観た記録です。新発見の分と盗難行方不明中のものを除いて三五点を見えています。一九九六年にハーグのマウリッツハウスで開催された大フェルメール展で二三点を纏めて観ているので、大分楽をしていますが、大したものです。この大フェルメール展は、それこそ世界中に散らばっているフェルメールの作品を集めて来たもので、大変な騒ぎになり、警護にはオランダの軍隊が出動したそうです。玉青さんは自らフェルメール・ラバーと称するだけあって熱の入れようが違います。それと玉青さんは流石に有吉佐和子の娘だけあって文章は巧み。フェルメールに掛ける愛情が文章のそここに表れていて気持ちの良い読み物でした。若し、ご興味があるならこちらの方をお勧めします。

お蔭で観ていない分の残りが少なくなっていますが、一枚ずつでも観て歩く機会が出  
来たら良いな、と思っております。

つまらない話に長時間お付き合い頂き、感謝します。

（平成二十六年四月 長崎楽会定例会にて講演）

## 後書きに代えて

肺ガンを発症しました。

平成十七年六月に総胆管ガン摘出の手術を受け、その後定期的に手術部位をCTで検査して貰っていました。家内から、「変な咳をしているのが気になる」と言われて、検査の範囲を広げて貰って、肺も検査して貰い始めたのが二十一年頃のことでした。最初は、左肺の下葉部に薄いすりガラス状の影があるが、まだ何だか分からない、咳の原因ではない、とのことでしたが、昨年三月の検査で、少し大きくなったかな、と言われました。ガンだか何だか分からないが、当時の私の体力だったら、今の段階で手術をすれば一〇〇%心配はなくなる、とのことでした。ガンだったら、影の中心部にコアが出来る、とこのことで、手術して取って見たら何でもなかった、と言うこともあり得ることだし、私も別に長生きをしたい訳でもないの、「暫く様子を見ることにして下さい」とお願いしました。それがこの平成二十八年三月に検査をして貰ったところ、

この影が明らかに大きくなりコアも出来ている、これは肺がんに間違いない、との診断を受けたものです。

私は前から七十五歳まで生きれば十分だと思っていました。長生きを希望している訳ではなく、かなり程度の高いQ・O・Lが維持出来ている間生きていられれば良い、と言う考えを持っていました。前回の手術が終わった時点で、「今度ガンが発見されたら、手術も抗ガン剤治療も放射線治療もしないで下さい」と申し出たことがありました。偶々最近、「ガンは原則として治療しないで放置した方が良い」と言う主張をされている先生の本を読んだりしていたので、この件も含めて、担当医に相談しましたが、このガンは、以前の総胆管ガンが転移したのではなく原発性のもので、肺ガンは脳と骨に転移する可能性が高いとのことでした。私も脳に転移した先輩を見ていたことがあります。自分で自分をコントロール出来なくなっても生きていて周囲に迷惑をかける、一番想像したくないパターンです。骨に転移すると激しい痛みに襲われるとのこと、これもあまり嬉しくありません。結局は私が目指す目的達成のためにも手術が一番良い、と

言うことになり、左肺下葉部全摘の手術を受けることになったものです。

私の父は脳腫瘍が原因で亡くなったし、母は腎臓のガンでした。私の血の中にガンのDNAが流れている、とは思っていましたが、ガンの手術を二度もやる羽目になるとは思ってもいませんでした。

手術自体には何の不安もありません。もう一〇年以上お世話になっている佐世保中央病院の碇先生は、当時は外科部長でしたが、今は院長になっておられます。当時から院内での人望が高いことが窺われ、関係する検査技師の皆さんや看護婦さんとの連携も見事で、この面からも信頼できる先生だと思っていました。今回も碇先生のお世話になりますが、先生からも、早期発見と私の健康状態に加えて、十一年前の大手術を乗り切った精神力と体力をもってすれば、今回も大丈夫だ、とのお墨付きを貰っていますので、安心して手術に挑戦することにします。

私の「自分史」の補遺編（三）を制作したのが平成二十六年九月のことでしたが、その後、新たに書いたものや以前書いたもので掲載漏れになっているものを纏めて補遺編

(四)を準備していました。これが丁度良いボリュームになっているので、手術の前にこれを製本しておこうと考えました。

「自分史」は最初、五巻作り、これは一三〇人以上の方に読んでいただきました。その後発刊した補遺編がこれで四巻目になります。作り始めた時は、これ程の量になるとは思ってもいませんでしたが、これで私の「自分史」は終わりになると思います。書くことは好きな方なので、今後とも書くこと自体は続けるとは思いますが、纏まった形でご披露することはもうないでしょう。

これまでお付き合い頂いた皆様に感謝します。

佐世保市ハウステンボス町四 三十六  
ハウステンボスヒルズ 一 四〇三

長島 達明

電話 / FAX 〇九五六 五八 七六五〇  
携帯電話 〇九〇 三一九六 三三二七  
メールアドレス vzd06705@nifty.com

平成二十八年三月